て百たび中らんとの。又「相呼び相喚んで歸去來」とは、南泉の恁麼ならば則ち去じと道ひしことを頌す。南泉此れより去行からず。故に云く、「曹溪路上登陟することを休む」と。これ荊棘林思慮分別を滅却す何となれば到り歸り來れば別事なし盧山は烟雨浙江は潮で悟後。に於ても矢張り眼は横に付き鼻は直と眞直なるが故にかく云ふ。雪竇把不定未だ十分に取りにして、復云く、「曹溪路坦平なり什麼としてか登陟を休む」と。これ曹溪の路人々本分の途は塵を絶し迹を絶して、露躶々、赤灑々、平坦々として、翛然地なり直下に到達す。什麼としてか却て登陟を休む。これ各自に脚下を看よたものとの意を頌し。

第七十則　潙山、百丈の傍に侍立す

【垂示】快人の一言、快馬の一鞭、萬年一念、一念萬年主客相對して問答をするに其俊發爽快なる僅に一言一句を發するに千里の馬に一鞭を加へたるが如く又其時間の長短を超過せるを以て萬年を一念に縮め一念に萬年を容れると云ふあんばいであるとの意。直截を知らんと要せば、未だ擧せざる已前なるべし何なる事に臨んでも直下に契當せんとせば未だ顯はれない未發の時に向て其消息を辨ぜねばならぬ。且く道へ、未だ擧せざる已前作麼生が摸索せんどんなあものか。請ふ擧示す看よ。

【本則】擧す、潙山靈祐禪師後に潙仰宗五峰常觀禪師潙山と共に百丈の弟子雲巖曇晟禪師初め百丈に參す百丈死して後藥山大師に至りて法を嗣ぐ同じく

百丈大智禪師に侍立す三人共に百丈の傍らに侍して立つ。百丈潙山に問ふ、咽喉脣吻を併却して、作麼生何か道はんと口を閉じ舌を動ぜずして一句を言ひ來れと是れ垂示に未だ擧せざる已前底のこと所謂父母未生已前の消息である。潙山云く、却て請ふ和尚道へ。丈云く、我れ汝に向て道ふことを辭せず。恐らくは已後我が兒孫を喪はん是れ潙山の句を奪つて他の脚根下を截斷したもの更に評唱を見るべし。

【評唱】潙山、五峰、雲巖同じく百丈に侍立す。百丈潙山に問ふ、咽喉脣吻を併却して作麼生如何か道か道ん。山云く却て請ふ和尚道へ敵馬に騎つて敵を追ふの作。丈云く我汝に向て道ふことを辭せず。恐くは已後我が兒孫を喪せんと。百丈然も此の如くなりと雖も、鍋子已に別人潙山に奪ひ去り了らる。丈復五峰に問ふ。峰云く和尚也須らく併却すべし此の和尚千言萬句を吐と雖ども元來此本分事は一氣息に涉らざることを知らないのかゆ。丈云く人無き處に餘りに遠く萬里無人の境（第一機の本分地）に走り過ぎたから中々見にくいよつて所額して汝を望まん所額とは手を額にかざして汝を望見せんとの文意即是れ亦百丈第一機を漏泄。又雲巖に問ふ。巖云く和尚有りや也未しや一體それは咽喉脣吻を併却して那の面目を露さんとしたもの。丈云く我兒孫を喪せんと。三人各々是れ一家皆百丈の門下なり。古人雲門道く、平地上に死人無數なり陸沈する凡漢のみな、荊棘林曲折して透過しを過ぎ得者是れ好手と。所以に宗師家荊棘林を以て人を驗む。りとの文意雜き語句に喩ふを何が故ぞ。若し常情の句下に於てせば、人を驗らむことを得ざればなり。衲僧家須らく是れ句中裏に機用を呈し、言中に的要略を辨すべし。若し是れ擔板漢板を擔て一方のみより分らんと云ふ自由のなき凡漢の意ならば、多

く句中に向て語路に轉ぜられて死却して、便ち道はん。咽喉唇吻を併却して更に口を下す處無けんと。若し是れ變通底自由活達の人ならば、逆水の波あらん師家の脚下を截斷するの手段あつて敵馬に騎つて敵を追ふことを得んとの意。只問頭上に向て一條の路出身の血路あり。鋒を傷つけ手を犯さず。潙山云く、却て請ふ和尚道へと。且く道へ、他潙山の意作麼生如何。箇裏此の潙山の答處は に向て、擊石火の如く閃電光に似て相似たり何ぞ意路を迎るの閑暇あらんやとの意。これ他百丈の問處を拶して便ち答へたもの。自らこれ出身の路あつて、纖毫些少の氣力を費やさず。所以に道ふ、他學人活句に參じて死句に參せざれと。百丈却て他を采せず他の事に拘らずとの文意底意は自分の本分事を拈起しての意。只云ふ汝に向て道ふことを辭せず。恐くは已後我が兒孫を喪せんと。大凡宗師人の爲にするに、釘を抽き楔を拔く其人の思想上の一切の繫縛を去る。若し之れ如今の人ならば便ち道はん。此百丈の答は他潙山の領話せざることを肯はざるものと潙山の語を首肯せない答へなりと云はん。殊に知らず箇裏百丈の此答處中には一路生機の處、壁立千仞にして、賓潙山主丈百互換して活潑々地なることを互に主賓の位置を換へて各自に第一頭地上に立ち縱横の作略をなせしものとの意。雪竇他潙山の此語の風措猶風流と云はんが如し宛轉自在にして、又能く封疆を把定することを敵路を塞斷し自己の封域を强固にして他の出頭を容れずとの意。所以に頌に云く。

【頌】却て請ふ和尚道へと。こは虎頭に角を生じて荒草間を出づ出て來たと同じで何人も近寄り難きを云ふて潙山の答處を讃歎したもの

此頌四句全く潙山を稱揚した有樣である猛虎が。更に角を戴いたのだから一層の働きあるを云ふ。十州春盡きて花凋殘す十州等の説明評中に委し此は百丈潙山が脣吻を涉らずして父母未生已前の消息を通じたるを頌す蓋し人間界以外の此十州の仙境に於ても其花悉く凋落すとは如何なる言句作略もそが情識上のことならば何等の價値がない咽喉脣吻に涉らぬ第一機の上より見れば皆悉く大悟の上の言句技倆でも已に第二第三に落在すとの意を含め。珊瑚樹林日杲々然るに十州の花は皆凋落して盡きるを知らないが如く父母未生已前の消息は第一頭地の位を離たもの萬古日光に映じて春の盡きるを知らざる海底より築き上げた珊瑚の林は千古れず千古萬古に其消息を通じて居ると云ふて百丈と潙山の問答の未だ擧せざる已前の消息を通ずる樣子を讃歎したものである

【評唱】三人の答處各々同じからず。即ち也壁立千仞なるあり潙山の答處を云ふ。也照用同時なるあり五峰の答處。也自救不了なるあり雲巖の答處を云ふ自分。「却て請ふ和尚道へ」と。雪竇便ち此一句頌中の一句にて さへも救ひ得ずとの意の中に向て機用を呈し了れり雪竇は潙山の答へを其まゝ頌の初句に用ひ來つて此一句の中に本則の全機大用を頌し了れりとの意。更に中に就いて輕々に拶して、人をして見易からしむ第二句以下にて注解同樣に頌し。云く「虎頭に角を生じて荒草を出づ」て人をして見易からしめたりと。潙山の答處は一へに猛虎の頭上に角を安んずるに似たり。什麼の近傍の處あらん近傍し難きを云ふ見ずや僧、羅山に問ふ、同生不同死の時如何。山云く牛の角なきが如し。僧云く同生亦同死の時如何。山云く虎の角を戴くが如しと已に五十一則中にありたり。雪竇只一句に頌し了れり。他轉變餘才あつて更に云ふ、「十州春盡て花凋殘す」と。海上に三山蓬萊、方丈、瀛州十州あり。百年を以て一春と爲す。雪竇の語風措風流を借んで宛轉盤礴す自由自在の義。春盡くるの時百千萬株の花、一時に凋殘す。獨り珊

瑚樹林のみあつて凋落することを解せず。太陽と相奪互に光色を奪ふてふて其光り交映す。正當恁麼の時妨げず奇特なり紅光相映ずる時其勝景。雪竇此を用ひて、他潙山の却て請ふ和尚道へといふことを明云ふばかりなしとの意す。十州は皆海外の諸國の附する所なり附庸の國なり。一に祖州、返魂香を出す。二には瀛州、芝草玉石泉に酒の味の如きを出す。三に玄州、仙藥を出す之を服すれば長生す。四は長州、木瓜玉英を出す。五は炎州、火浣布を出す。六は元州、靈泉蜜の如きを出す。七は生州、山川ありて寒暑なし。八には鳳麟州、人鳳喙麟角を取つて續弦膠を煎ず。九には聚窟州、獅子銅頭鐵額の獸を出す。十には檀州、琨吾石を出す。劒を作れば玉を切るに泥の如し」。珊瑚は外國雜傳に云く、大秦の西南漲海の中に、七八百里ばかりにして、珊瑚州に到る。州底盤石あり珊瑚其石上に生ず、人鐵網を以て之を取ると。又十州記に云く、珊瑚は南海の底に生ず、樹の如し高さ三二尺ばかり、枝あつて皮なし、玉に以て而も紅潤なり。月に感じて生ず、凡そ皆枝頭に月暈ありと。

第八卷

第七十一則　百丈の咽喉併卻　（垂示なし）

【本則】擧示す。百丈復五峰に問ふ。咽喉唇吻を併却して作麼生何か道ん。峰云く、和尚也須らく併却すべし文意の上では和尚既に口を閉ぢ舌を動ぜずに一句を道へと云はるゝではないか。然らば和尚先づ其口を御自分に塞ぎなされとの言ひ分である。然し其底意は五峰は五峯の立場に立て他の出頭を許さない處即ち第一頭地の本。地の風光を露呈し來たのである。丈云く、人なき處斫額して汝を望まんいやそんなに遠く獨尊の玄境たるを無人境に走り去つては額に手をあてゝかざして見ましよわいとの文意。

【評唱】潙山は封疆を把定し他の窺窬、五峰は衆流を截斷す五峰の答處情慮の衆流を斷絶す。此の些子五峰の答處たる一轉機の處との意是れ此漢にして、當面顏々相望んで直下に提撕せんことを要す。馬前の相撲の如く、擬議を容れず、直下に便はち用ひて緊迅危峭ありとす。こは潙山の盤礴くつろひて圓轉自在の貌にして滔々地活潑なるを云ふなるに似ず。如今の禪和子禪僧只架下に向て行ひて、他五峰の一頭地を出づること能はず。所以に道ふ。親切適當を得んと欲せば問を將ち來つて問ふこと莫れと　こは實法を人に與へ得らるべきものにあらざるを云ふ門より入るものは家珍にあらずで人々本具のものを他

に啓發して資ふまでに止まる極處は。五峰の答處當頭直に情理坐斷す、放げず快俊なることを。百丈云く人無き處に斫額手を額に翳すこと遠方を見る時の姿して汝を望まんと。且く道へ是れ他五峰を肯ふか、是れ他を肯はざるか。是れ殺か是れ活か。他五峰の阿轆々地圓轉自在なることを見て、只他に一點點定して證明するの意を與ふ。雪竇の頌に云く。

【頌】和尚他併却すべし。龍蛇陣上に謀略を看る　五峰が答處を其まゝ第一句に持ち來つてかく云ふた處は未だ擧せざる以前の地に位置を占めて居ると稱揚し其活作略は武備志の四陣の一なる龍蛇の展陣で、首を擊ては尾至り尾を打てば首至り中陣を擊てば。尾首共に至ると云ふ陣を展べて謀略を計つて居る有樣だと讃歎したもの一頌全く五峰の稱讃である。人をして長く李將軍を憶はしむ。萬里の天邊一鶚はやぶさを飛ばす　其五峰の作略はかの射を善せし李將軍を思はしむ實に其答處の的中せるあんばいは空を行く鶚を一箭で射落した樣のもの飛ばすとは落るを形容す

【評唱】「和尚也併却すべし」と。雪竇一句の中に於て拶一拶して云はく。「龍蛇陣上に謀略を看ると」。兩陣を排排列して突出突入、七縱八橫にして、鬪將底の手脚あり。大謀略底の人あつて、正馬單鎗にて、龍蛇の陣上に向て、出沒自在なるが如し。儞作麼生か他を圍繞し得ん。若し是れ這箇七縱八橫の作略ある人ならでは の人にあらずんば、爭でか此の如き謀略あることを知らん。雪竇の此三頌七十則七十一則及七十二則の三頌は皆裏頭底意に就いて狀り出す底の語にして此の如し。大に李廣が神箭に似たり。

「萬里の天邊一鶚を飛ばす」と。一箭に一鵰を落すことは定まれり、更に放過せず。即ち雪竇百丈の問處は一鶚の如く、五峰の答處は一箭の如くに相似たることを頌す。山僧評者只管に五峰を讃歎して、覺えず渾身泥水に入り了れり。

第七十二則　百丈、雲巖に問ふ　（垂示なし）

【本則】擧す、百丈又雲巖に問ふ。咽喉唇吻を併却して作麼生か道ん。巖云く和尚有りや未しや　それは咽喉唇吻を併却して云はれたのですかと百丈の語句下に死在す。丈云く我兒孫を喪せん　我法絕えん。との文意

【評唱】雲巖、百丈に在つて、二十年侍者と作る。後に道吾道吾山の圓智禪師と同じく藥山惟儼禪師曹洞派下の祖師に至る。山問ふて云く、子、百丈の會下に在て、箇の什麼何事をか爲せし。巖云く生死を透脫す。山云く還つて透脫すや也未しや。山云く渠に生死なし本分事には元來生死のようなものはない寂靜無爲のものである。山云く二十年百丈に在つて習氣煩惱の薰し付だも也未だ除かずと。巖辭し去て南泉普願禪師に見ゆ。後復藥山に歸て方に契悟す。看よ他の古人二十年參究するも、猶半青半黃徹底せざるを云ふにして、皮に粘じ骨に着て、穎脫すること能はず。是なることは則ち也是尋常を拔くこと勿論なるも未。只是れ前は村に搆到也らず、

後は店に迭せずと云ふ。道ことを見ずや。語窠臼を離れざれば、焉んぞ能く盖盖五纏十纏の細微なる煩惱を云ふを出ん。白雲谷口に横はる言語の窠臼に喩ふ。幾く人の源をか迷却すと窠臼に落る時は則ち無所住の心源に迷ふとの意此は雪峰の語なり。洞曹洞門派下に之を觸破と謂ふ雲巖の渠に生死なしと云ふた様の語句即ち一物珍重の語句は本分の事に觸犯して臭氣あるを云ふ。所以に道ふ。荊棘林法智喩ふを透過して始て得べし。若し透過せずんば、終始廉纖微細の無明煩惱に渉て斬不斷ならん。適來前來道ふ。前は村に搆到也らず、後には店に迭せずと。雲巖只管に去て他人底百丈を點驗す。百丈他の斯の如きことを見て、一時に把り來て打殺し了れり。雪竇の頌に云く。

【頌】和尚有りや也未しや、金毛の獅子踞地せず 頌の形式は前二則の頌と同一である雲巖は金毛の獅子で中々の活物なるも只地に踞くまざるが爲に獅子の獅子たる威力缺くのである即ち只窠臼を出でざるが故に其用處活脱ならずとの意。兩々三々舊路に行く 機位の上に活達の作用なくば毒海に墮在す巖頭脱の機なくして舊解を改めず即ち轉身の分なし而も天下の人多くは是れなり豈に二三のみならんやとの意。大雄山下百丈山のことにて百丈大智禪師住在の地なり空しく彈指す 此句に古來兩説あるも語勢の上より云へば百丈は雪巖を切齒みて接化したので幾度も彈指して奮勵せしめたものと見る。べし雪巖は後に藥山の下に往きて遂に大悟せり

【評唱】「和尚有りや也未だしや」と。雪竇欵に據て案に結す條令に據つて斷案を。即ち是は則ち是なるも、爭何せん金毛の獅子踞地せざることを。何となれば獅子物を捉ふるに牙を藏し爪を伏して。踞地返擲す。物大小となく皆以て威を全うす。其功を全うせんことを要すればなり。雲巖云く、

和尚有りや也未だしやと。只是れ舊路上に向て行く只玄域を是として轉處の分なく見識改むることを得ず。所以に雪竇云く、百丈大雄山下に向て空しく彈指呵すと。

第七十三則 馬大師の四句百非

【垂示】夫説法とは無説無示なり。其聽法は無聞無得なり 説法と云へば種々の言説あるものと思はれるが本體上より云ふ時は説くべき法なく迷へる衆生なし迷ひなきが故に悟りの佛祖も亦なし是の故に終日説いて終日説かずと云ふことになる既に不説不示なるを以て聽く方でも無聞無得である宇宙の大本元來無所得なればなり即ち得たり還れば別事なし舊に依て山高く川長しである。の如く説既に無説無示ならば、爭でか説かざるに如んや。聽既に無聞無得ならば、爭でか聽かざるに如んや。而も無説又無聽却て些子玄旨に較れり 蓋し此無説無聽と云ふのも未だ十全ではないが比較的に眞實に近いと云ふだけである禪家にては更に那邊の一事即轉身の分を要するか。只如今諸人山僧圜悟が這裏此に在て説を聽くが如きこと あらば、作麼生如何か此過無聞無得爭でか聽かを免れ得んであつたならば其卑淺からずであるとの意。若しも圜悟の此説法を説法として聞くよう。されば 透關の眼を具する者は、試みに擧す看よ。

【本則】擧す、僧あり馬大師江西馬祖山の道一禪師に問ふ。四句を離れ有句、無句、亦有亦無非有非無百非此四句にそれ〴〵互に四句を具して十六となる之を過現未の三世に配して四十八となる已然と未然とに約して九十六となる之れに本の四句を加へて百となるを云ふ凡そ佛教と云はず一切の理論言説此四句百非を出でず を絶して、請ふ師某甲に西來の意達磨西より來りたる大意を直指せよ。馬師云く。我れ今日勞倦す、汝が爲に説くこと能はず。智

藏慶州西堂の智藏禪師前則の百丈と共に馬祖の弟子に問取し去れと此れは穴穿勞倦して居るから說けんと云ふ意ではないかくて無說無示の設法であるされば無聞無得底の人ならば此で直下に承當の機あるべき筈だ。そ僧智藏に問ふ。藏云く何ぞ和尙に問はざる。僧云く和尙敎へ來つて問はしむ。藏云く我れ今日頭痛す。汝が爲に說くこと能はず父子共に同一の說法である。海兄百丈の大智懷海禪師のこと智藏の兄弟子に問取し去れと。僧海兄に問ふ。海云く我れ這裏ゝに到つて却て不會と元來此れ會不會の論量を超絕せる處なるが故に僧馬大師に擧似示す。馬師云く。藏頭白海頭黑と智藏は白く懷海は黑しとの文意是れ馬大師の批判であつて即ち四句百非を絕したる說法である亦是れ無說無示を超越せるの手段である此に言詮の及ばざる處なるは勿論なるが强いて文意を追へば月黑く山黑しの夜の風景である花は紅に咲き柳は綠に風のまに〳〵拂はれて居る任運無作の妙用の外別に西來の意あらんや

【評唱】這箇此の公案、山僧舊日蜀の成都に在て眞覺眞覺禪師黃龍の慧南の弟子に參ず。覺云く只馬祖の第一句我れ今日勞倦す云々の一句を看ることを消知らせば、自然に一時に理會し得んと三人共に用處同一なればなり。且く道へ。這の僧是れ會し來て問ふか。會し來らずして問ふか。此問妨げず淡遠なることを四句百非を離るゝ處言詮不及の法なるが故に一應揚げ。四句を離るゝとは、有と無と非有非無と非々有非々無と。此四句を離るれば、其百非たものを絕す之れ百非は四句を根本とし成立したるものなればなり。只管に道理を作さば話頭を識らじ。頭腦を討れども見えず。若是れ山僧ならば、馬祖の道ひ了らんを待つて、便ち與めに坐具佛袈裟を着する僧の坐する時に開いて坐數として用ふるものを展べて、禮三拜して、他馬祖の作麼生其意如何と道ふを看たらんに。又當時山僧が馬祖ならば、若し此僧の來て、

四句を離れ百非を絕して。請ふ師某甲に西來の意を直指せよと問ふを見て。柱杖を以て劈脊直下に便ち棒して趕ひ出し、他の省するか省せざるかを見たらんに。然るに馬大師は只管に葛藤を打し我れ今日云々と。以て這の漢僧をして、當面に蹉過して、更に去て智藏に問はしむ言句を以てす。殊に知らず馬大師此僧の來風を淡く辨ずることを。然るに這の僧懞憧として走り去て智藏に問ふ。藏云く何ぞ和尙に問はざる。僧云く和尙敎へ來つて問はしむと。看よ他智藏這の些子智藏の、機用拶着すれば便ち轉ず。更に閑暇の處なきことを其機用に空虛。怠慢な處なし智藏云く我れ今日頭痛す、汝が爲に說得すること能はず。海兄に問取し去れと。這の僧又去て海兄に問ふ。海兄云く我れ這裏ゝに到て却て不會と。且く道へ。什麼としてか一人は頭痛すと道ひ、一人は不會と道ふ。畢竟作麼生如何。這の僧却回し來て馬大師に擧似示す。師云く藏頭白海頭黑と。若し解路を以て卜度せば、却て之を相瞞欺ずと謂ふ。有者は道ふ。只是れ相推過すと互に讓つたものと云ふ。有者は道ふ。三箇馬祖智藏懷海の三人總て他此の僧問頭を識る、所以に答へずと。此見解は總て是れ拍盲地失明の意にして一時に古人醍醐の上味を將て、毒藥を着けて裏許醍醐中にのに在く。所以に馬祖道く。汝が一口に西江の水を吸み盡さんを待て汝に向て道はんと此話前に。此公案本と一般なり其底意同一なり。若し藏頭白海頭黑を會得せば、便ち西江の

水の話を會せん。這の僧一擔ひとかつぎの懞懂不明の意を將て、一箇の不安樂不會と云に換へ得て。更に他の三人の尊宿宗師を勞して、泥に入り水に入らしむ第二第三に落ちて。色々と說かしむ。畢竟じて此僧瞥地靈利ならず。然も一へに恁麼なりと雖も、這の三箇の宗師却て箇此の漢に此僧に勘破せらる三大老共に此僧の爲に玄機を洩して彼此言語を弄するを云ふされば第一機上より見來。如今の人只管に語言上に去て向て活計分別を作して云く。白は是れ明れば已に落草たるを免れざればなり頭に合し明に合す即ち明々、白地の境を云ひ暗は暗頭に合すと暗々裏の境を示す。只管に鑽研計較す色々と分別妄想す。殊に知らず古人馬祖一句に意根分別心の源を截斷することを。須らく是れ正脉裏靈機命脉の處に向て自ら看て始て穩當安樂なることを得べし。所以に道ふ。末後の一句。始て牢關に到る。要津こゝぞと頼りにする要處を把斷して、凡聖を通ぜずと。若し此事を論ぜば、當門に一口の劒を按懸ずるが如くに相似たり虎口に入るが如きものである。擬議せば則ち喪身失命せん。又道く盤山譬へば劒を擲て空に揮ふが如し。及と不及とるとの意。を論ずること莫れと。但八面玲瓏の處に向つて會取せよ會得せよ。見ずや古人道く。這此の漆桶と漆桶の黑漫々たる姿、或は云く野狐精と。或は云く瞎漢と。且く道へ。一棒と一喝と同れ同か是れ別か上述の語褒貶何れにあるかを分たず底意曲折して難解の語句なり此れ古人が直に學人の凡體を削き凡骨を換ふるの手段ある語なりとの意。若し其底意を知らば千差萬別の語句も只是れ一般なり。自然に八面に敵を受くるに堪語は差別あるも其用處皆一なれば一處透れば千處萬處で八面より難問を受くるも力を費さずして解き去らんとの意。藏頭白海頭黑

を會得せんと要すや。五祖先師道く。これ封后先生なりと此れは史記並に通鑒にある故事で昔黃帝が姓は風(音封と通ず)名は后なるものを天下に求めて政事を執らしめ天下大に治まれりとあるにより今馬祖の此一句は元來學人の妄心を斷ち。雪竇の頌に云く。假塵を拂ふて歸家穩坐底の人たらしめんが爲なると一般であるとの意なり

【頌】藏頭白海頭黑と本則の主要なる處、明眼の衲僧師も會不會此馬祖の藏頭白云々と批評を下した一句は千聖も臂を容るゝの地なからん何となれば言詮不及の處にして會不會の論量を超越せるが爲なり。馬駒馬大師即ち馬祖のことこれは馬祖の師匠たる南嶽懷讓禪師に六祖曹溪大師が法を嗣せた後向後佛法汝がかゝる活機用は天下馬祖一人であると歎稱したのである。邊より起らん已後一馬駒を出して天下人を踏殺せんと豫言された馬駒と稱し來たものことがあるより南嶽の高弟たる馬大師を此に馬駒と稱し來たもの用を稱揚。臨濟未だ是れ白拈賊白晝の盜賊と云ふこと所謂生馬の眼にあらず曾て雪峰老人が臨濟大師のことを褒めて白拈賊であると言はれたが此馬祖の活作略に比すれば臨濟は白拈賊の稱號を馬祖に渡さればならぬと何處までも馬祖の稱歎である。四句を離れ百非を絶す。天上人間唯我れ知る更に僧の問端を擧げて此れは人々冷暖自知的のものである他に問ふたとて。知れるものでない各人自ら背ふの心を辨せればならぬと結ぶ

【評唱】「藏頭白海頭黑」と。且く道へ意旨作麼生。這の些子此一句の玄旨ほとの意天下の衲僧跳れども出でじ。看よ他の雪竇後面次の句に合殺合し頌すとの意し得て好きことを。道く直饒明眼の衲僧も也會不會と。這箇の此の些子玄旨の消息、之を神仙の秘訣、父子不傳と謂ふ。釋迦老子一代時の敎を說き、末後に單傳敎外別傳の心印を喚んで、金剛王寶劒と作し。喚んで正位と作す。されば恁麼かゝ葛藤言も早く是れ事已むを獲ずして、古人略些子玄旨を洩の鋒鋩を露はす故に正位から見れば正位は空界物なき處なるも其に轉身の妙用を呈して學人の爲めにした

ものである。若し是れ透得底の人ならば、言下に便ち七穿通八穴達の大自在を得ん。若し透不得ならば、前に從つて舊に依て悟入の處なく、轉た說けば轉た遠し。「馬駒踏殺す天下の人」とは、西天印度の般若多羅、達磨を讖して云く。震旦支那闊しと雖も別路なし 別路なしとは道一なるを云ふ即ち馬祖道一に至つて佛法興るを云ふと即ち馬祖を豫言することになる。兒孫の脚下を假て行んことを要す 馬祖道一に至つて法孫尤も多し即ち達磨馬。祖を得て祖道の興隆を得んとの意と謂はる。金鷄一粒心印の一法の粟を銜むことを解して、十方の羅漢僧に供養すると 此れ亦馬祖の師南嶽は金州の人なれば南嶽は馬祖を得て祖道興隆すとの豫言なりと即ち馬祖は漢州の人なれば金州の南嶽は淺磨の單傳の一法を漢州の馬祖に傳ふと。の意と古來より云はるれど餘りに情解に落るが如し如何。又六祖が讓和尚南嶽の懷讓即ち馬祖の師匠に謂て曰く。向後佛法禪師の法を嗣げるもの天下に布く。時に馬祖と號す。達磨と六祖と皆先づ馬祖を讖す。看よ他馬祖の作略果然として別風なることを。只道ふ藏頭白海頭黑と。便ち天下の人を踏殺する處あるを見ん。只這の一句黑白の語、千人萬人咬めども破れず。「臨濟未だ白拈賊にあらず」とは、臨濟大師一日衆に示して云く。赤肉團上身體に一無位の眞人心靈は凡聖等の階位に落ちありて、常に汝等諸人の面門に向て出入す。未だ證據せざる者は看よ看よと。時に僧あり出でゝ問ふ。如何なるか是れ無位の眞人と。濟、禪床を下つて、擒住擒へして云く道へ道へと。僧無語、濟托開放ちして

云く。無位の眞人是れ什麼何の乾屎橛ぞと。雪峰後に聞いて云く。臨濟大に白拈賊に似たりと。雪竇他の臨濟と相見せんことを要す。馬祖の機鋒を觀るに、尤も臨濟に過ぎたり。此正に是れ白拈賊といふべき云なり。故臨濟未だ是れ白拈賊にあらずと頌した。雪竇一時に穿却し了れり。更に却て此僧の問處を頌して道く。「四句を離れ百非を絕す。天上人間唯我れ知る」と。且く鬼窟裏情處のに向て活計分別を作すこと莫れ。古人云く、問は答處に在りと。問端既に四句を離れ百非を絕して直指せよと云ふ故に其答處直答にして四句百非を離れて居るな。答は問處に在りと。其意を得れば早く是れ問答俱に奇特なり。儞作麼生か四句を離れ得、百非を絕し得ん。雪竇云く、此事唯我れ能く知ると。直饒三世の諸佛も也覷れども見えず。既に是れ獨り自ら箇れ是し知る。諸人更に上來して箇の什麼何をか求めん此事元來各自冷暖自知のものである。更に其上に求むるものありやとの意。大潙の眞如拈提じて云く。這の僧恁麼くに問ひ、馬祖恁麼に答ふ。四句を離れ百非を絕する處、智藏海兄都て知らず人々自知のもの他の知る所にあらざるが故に、會得せんと要すや。道ふことを見ずや馬駒踏殺す天下の人と 此れ智藏も海兄も俱に掃蕩し盡して只馬祖の大機大用に歸し馬祖第一人の天下なるを示す即ち是れ大潙の宗眼なり

第七十四則　金牛和尚の呵々大笑

【垂示】 鍈鋙干將鏌鋙の名劍 横に按じて、鋒前に葛藤窠を剪斷す 此は師家が大自在の照用を放ちて學人を接する樣子を云ふ名劍を以て學人の一切の葛藤窠即ち言語理論の穴に陷りて自由を失へるを救ふ手段で其情根を斷絶す 明鏡本智の體に喩ふ 高く懸て、句中に毘盧の印を引出す 此は師家の本分の智體の消息を云ふ師家に本分の智鑑ある故に學人の來風は直下に鏡中に映じて洩らすことなし即ち一句一言の中に毘盧の印即ち盡十方法界の一切諸法を攝盡して居るのである毘盧とは梵語毘盧遮那の略宇宙の本體なり此を人格化して大日如來と云ひ阿彌陀加來と云ひ法身佛と云ふ印とは印可印證の義即ち一言一句の中に宇宙の本體の大光明を確かに引出包容して輝かして居るとの意。田地穩密の處、着衣喫飯 已に上述の如き境界に住して飯に逢ふては飯を契すると云ふよう。神通遊戯の處、如何んが湊泊せんかゝる宗師の接化の方法には凡情を以に一切事に於て任運無作の應用あり するものは心田平安にして思議すべからざる作略あるものであるが學人たるものは如何に。還つて委悉合點すや否や。下文を看取せよ。

【本則】 擧す、金牛和尚馬祖の弟子の齋時飯時に至る毎に、自ら飯桶を將て、僧堂禪堂前に於て、舞をなして呵々大笑して云く。菩薩子喫飯し來れと菩薩子とは諸人。雪竇云ふに同じく。然も此の如くなりと雖も、金牛是れ好心にあらず金手の作略は尋常でない容易に看過してはならぬぞとなり 後僧長慶弟子雪峰のに問ふ。古人道く。菩薩子喫飯し來れと。意旨如何。慶云く大に齋時飯に因て慶鑽するに似たり御飯を食へる時の禮法であるうよとの答へ慶讃は御飯の出來たのを慶賀すとの。文意評に參すべし

【評唱】 金牛は乃ち馬祖下の尊宿大德なり。齋時に至る毎に、自ら飯桶を將て、僧堂前に於て、舞を作して呵々大笑して云く。菩薩子喫飯し來れと。是の如くすること二十年。且く道へ。他

の意什麼何の處にかある。若し只喚んで喫飯と作さば、僧堂には僧堂の形を規則がある即ち尋常魚魚の形をせる木板なりを敲き鼓を擊て亦自告報喫飯すべきことをせん。又何ぞ須ひん更に自ら飯桶を將ち來て、許多の伎倆を作すことを。是れ他顛狂すること莫しや。是れ提唱建立法說すること莫しや。若し是れ此事本分を提唱せんとならば、何ぞ寶華座上須彌壇即ち佛座に去上て、床を敲き拂子を竪てざるかくして說法。然るに今そ此の如きことを須要して什麼をか作さん大笑して舞をするが何の事。然し今の人は、殊に古人金牛の意、言外に在ることを知らず。何ぞ今人且く祖師達磨當時初來底の題目西來の意什麼と道ひしかと看ざるや。分明に說いて道はずや。教外別傳、單傳佛心印と。古人金牛の方便也只儞をして、直截に承當し去らしめんとす。後來の人妄りに自ら卜度して便ち道ふ。那裏何處にか許多の事あらん なにも別の事はない。寒する時は火に向ひ、熱する時は涼に乘じ、飢ゆる時は飯を喫し、困ずる時は則ち眠ると。若し恁麼かに常情を以て、義解註註せば、達磨の一宗土を掃ふて盡きん。知らずや古人二六時中日終に向て、念々に捨てず。此事を明めんとす。雪竇云く。然も此の如しと雖も、金牛是心好心にあらずと。只此の一句。多少の人錯て會せり。故謂はゆる醍醐の上味。世の爲に珍とせらるるも、斯等の人に遇へば解者には かゝる邪、翻つて毒藥と成る。金牛既に是れ草に落ちて第二第三に下つて人の爲に

す。雪竇什麼としてか道ふ。是れ好心ならずと。什麼に因てか却て恁麼くに道ふ。祇僧家須らく是れ生機轉身機用のあつて始て得べし。今の人古人の田地境界に到らずして、只管に道ふ。什麼の心をか見。什麼の佛かあらんと心無く佛なしと。若し此の見解を作さば、金牛老作家を壞却し了らん。須らく是れ子細に看て始て得べし。若し只今日も明日も口快些子ならば了期あること無けん日々些少許りも口辨に渡らば遂に悟了の日なけん。後來長慶上堂法堂に上りて說法すの時、僧ありて問ふ。古人道く菩薩子喫飯し來れと。意旨如何。慶云く大に齋に因て慶讃するに似たりと。尊宿家慶忌煞慈悲故に漏逗少なからず一線道を放ち玄機を洩して人の爲にす。是なることは則ち是なり。齋に因て慶讃すと。儞且く道へ。箇の什麼をか慶讃する。看よ他の雪竇の頌に云く。

【頌】白雲影裏笑呵々白雲影裏とは絶對向上の境理を譬へたもの是れ金牛の立脚地で。ある其立脚地に立て呵々と其境界の消息を通し來たのである　兩手に持し來て他に付與す他とは一山の大衆を云ふ今金牛は兩手に飯桶を持し來つて此消息を附與せん。とするのであるけれども他に分付すべき物が元來あるのかとの底意を含む　若し是れ金毛の獅子子ならば、三千里外に諸訛金牛の合點の行かぬを見ん本分の衲僧ならば未だ金牛がかゝる作略をしない以前の振舞にかゝる難解の公案を既に見破するであろうとの意

【評唱】「白雲影裏笑呵々」と。長慶道く、齋に因て慶讃すと。雪竇云く、「兩手に持ち來て他に付與す」と。且く道へ、只是れ他に與へて喫飯せしむるか。爲當別に奇特あるか。若し這裏こゝ

に向て端的を旨を知得せば、便ち是れ箇の金毛の獅子子ならん。若し是れ金毛の獅子子ならば、更に金牛の飯桶を將ち來て舞を作し大笑することを必とせじ、直に三千里外に向て、便ち他金牛の敗缺の處を知らん金牛の未だ擧示せざる以前に早く其意を了會せん蓋し金牛の人の爲めに許多の英氣を費せる處を敗缺の處と云ふ何となれば第一義門より見來れば人々箇々圓成なれば他人の救を求むるの必要なければ。古人道く、鑑み機先に在て、一揑を消用ひせずと機先を鑑みるとは未だ第一機の現れざる以前を見ばとの意即ちかく根元を識破せば其杖策は力を勞せずして知り易し。所以に衲僧家尋常須らく是れ格外に向て、用ひて始て本分の宗師と稱することとの古人の句の意を得べし。若し只語言に據らば、未だ免れず漏逗することを漏逗とは物にひゞが入つて用をなさゞるを云ふ即ち徒らに語を追はゞ終に了期なしとの心

第七十五則　烏臼、僧に法道を問ふ

【垂示】靈鋒の寶劍、常露現前す金剛王寶劍とも云ひて宇宙の本體に喩へたもの禪家常用の父母未生已前の那一句である此は佛にありても增さず衆生に在りても減ぜざる眞如にして離れんとして離るべからざるものなれば日々夜々吾人の。亦能く人を殺し、亦能く人を活す凡夫は之を利用し得ない爲めに自由を失ふて居るが元來此面門より出入して當體顯現して居るのである劍は殺人劍活人刀のもので上では佛境界をなし下では餓鬼畜生となる無自性のものである。彼に在り此にあり。同得同失なりとす故に主となるものが用ひ得らるゝので賓主相見の上で云へば或は師の掌中に歸し又は賓が主の作略ある時には却て賓客の掌中に歸するのである。或は又同得同失で賓主共に其働きを現はし來ることもあれば又諸共に其作用をなさず一時に隱してしまうこともある。これを之提持把住せんと要せば、提持するに一任す。若し平展開放せんと要せば、平展するに一任す把住奪

ふのも放行と他に與へるのも自由である。且く道へ、賓主に落ちず。回互に拘らざる時如何 今若し賓主が殆んど同格の作略を有する場合にどちらが勝つたか負けたか判定の付けられぬ時或は又互ひに拘束され、試みに擧す看よ。

【本則】擧す、僧あり定州和尚石藏和尚、北宗の神秀大師の弟子普寂の法を嗣ぐの會裏下座より來て、烏臼馬太師の弟子八十餘員の一なり此和尚當時人を打つを以て名あり に到る。烏臼問ふ、定州和尚の法道教化 這裏余が教化 と何似ぞ。僧云く別ならず。臼云く若し別ならずんば、更に彼の中定州の下に轉じ返り去れと云ふて便ち打つ。僧云く棒頭に眼あり。草々〳〵輕々に人を打つことを得ざれ。臼云く今日一箇を打着すと云ふて、也打つこと三下す 今迄多くの人を打つたが今日ほど打ちこたへのあることはなかつ。僧便ち出で去る 强に遇ふては弱で他の提起するに一任して放行する樣子を見せたのである。臼たどうも心地の善いことであると云ふて又三返打つ。僧云く屈棒元來人の喫するあるあり 罪なきものを打つ道理のないのに打つは其れ風棒なり是れ此僧の出で往く後から罪のないに打たれてそれで文句なくし出て行くものがあるものかと戰を挑む。僧身を轉じて云く、爭何せん杓柄和尚の手裏に在ることを 我れにその棒を持たしめば和尚を打ち得るものを今は主人でないから仕方がないと。臼云く汝若し要せば汝に回與せん 白身を下して僧を勸辨せようとて必ず要とならば此棒を汝に與へんと云ふ。僧近前して臼の手中の棒を奪て、臼を打つこと三下す。臼云く屈棒々々 僧已に主となりて正令を行ふ然れども亦是れ風棒ならずやと云ふ。僧云く人の喫するあるあり 其屈棒を食ふたのではないか。臼云く草々に箇の漢を打着すと 臼再び主位に立ち返りて第三の勸驗を試みた樣子が見える即ち御前中々豪い者だ私は先きに輕々に御前を打つたのだとぢろりと此僧の擧動を見たものらしい。僧便ち禮拜す 問答已に了りたれば主人に對する禮を行ふたのだ。臼云く却て

恁麼にし去るや けないではないかとの意。僧大笑して出づ 此僧はどこまでも逆順自在の遣り方で。臼云く 臼の下に降參せない樣子を見せたもの。臼云く消得恁麼消得恁麼と 消し用ゆるの意かくの如くに用ひ得と云ふことで只それだけのことがいと自己の領域を出ないことを示したもの

【評唱】僧、定州和尚の會裏より來て、烏臼和尚の下に到る。諸人若し這裏 賓主相見の處 に向つて、此二人の一出一入を識得せば、千箇萬箇只是れ一箇 賓主一際にして更に二なく三なしとの意 なり、これ主となるも也恁麼賓主となるも也恁麼主賓なり、賓となるも也恁麼主賓と作る、二人畢竟合して一家と成る 互に無賓主の眞際に歸したるを云ふ。一期の勘辨、賓主の問答、始終作家たり 互に賓主となる處實に本分の作家たるに耻ぢずとの意。看よ烏臼這の僧に問ふて云く、定州の法道教化の樣子 這裏の我が教化の樣子と何似。僧云く別ならずと。當時若し是れ烏臼にあらずんば、此僧を奈何ともし難からん。臼云く若し別ならずんば更に彼の中に轉じ返り去れと云ふて、便ち打つ。奈何せん此僧是れ作家の漢、故に便ち云く、棒頭に眼あり草々に人を打つことを得ざれと。臼一向に令正令を行じて云く 主人公の作略なすの意、今日一箇を打着すと云ふて又打つこと三下す。其僧便ち出で去る。看よ他の兩箇 兩人轉轆々地圓轉自在の意にして、俱に是れ作家。這此の一事本分上の一大事を了ず 大事悉了底の漢なるを以て。須らく緇素 黑白を分ち休咎 善惡を別たんことを要す 未だ初の問答だけでは賓主共に十分の試合がすまぬ。即ち此僧出で去ると雖も、此の公案問答 却て未だ了らざること在り。烏臼始終他の實處を驗し。他を如何と看んとす。然るに此僧では却の方へ

て門を撐へ戸を柱るに似たり門戸を閉ぢて來敵を入れざらんとすることが見える。所以に烏臼は未だ他僧の底意を見得せず。故に烏臼却て云く、屈棒元來人の喫するあるありと云ふて。再驗す。此僧身を轉じ氣を吐かんとして、而も却て他烏臼と爭はず。輕々に力を費さずして轉じて云く、奈何せん杓柄和尚の手裏に在りと。烏臼は是頂門に眼を具する底の宗師。故に敗て猛虎の口裏に向て身を横へて云く、汝若し棒を要せば山僧汝に回與せんと。此僧是れ肘下に符ある底の漢。護身の守り袋を所持せる漢とは中々豪い者との意で、更に擬議せず直下に近前して烏臼の手中の棒を奪ふて、臼を打つこと三下す。臼云く屈棒々々と。儞且く道へ意作麽生如何。頭上初め臼此僧に打つた時に云く、屈棒元來人の喫するある在りと。然るに今此の僧他烏臼を打つに到るに及んで却て道ふ。屈棒々々と。又僧云く人の喫するある在り。臼云く草々に箇の漢を打着すと。是れ亦頭上初めに道ふ、草々に一箇を打着すと。而も末後に自ら棒を喫するに到て、什麽としてか亦道ふ。草々に箇の漢を打着すと。當時若し是れ此の僧卓朔地伶俐の姿獅子の兩耳を立て、其威を全うするに喩ふなるにあらずんば、也他烏臼を奈何ともせじ。其意を會する故に此僧便ち禮拜す。然し此僧の禮拜最も毒なり。是れ好心にあらず平常でないから高く眼を着けて見よとの意破らざらん。烏臼云く、却て恁麽にし去るやと。其僧大笑して出づ。烏臼云く、消得恁麽消得

恁麽と そんなことだろうよとの意 看よ他の作家の相見。始終賓主分明にして、斷えて而も能く續くことを賓主となり主が賓となり。これ其實は只是れ互換の機なり賓主互に位置を換へて。佛法を擧揚するの機用 他這裏ゝに到て亦箇の互換て問答斷えずとの意の處ありと道はず。自ら是れ他の古人情塵意想を絶ちて、彼賓此主の作家亦得あり失ありと道はず。是れ一期間永い間の問答の語言なりと雖も、兩箇活潑々地にして、都て血脈針線あり少しも繫着なく自在にして斷絶せず。若し能く此に於て見復せば、亦乃ち十二時中に向て日、歴々分明ならん 已靈を味まさず垂示の所謂實餡常露現前する處なりとの意と云ふものであるとの意。其僧便ち出づ。是れ雙放賓主俱に放行の。已下の問答は是れ雙收賓主共に收來して他の出頭を許さずとの意。之を互換と謂ふ賓主優劣なく互に賓主となるを云ふ。雪竇正恁麽の地に互換の處を頌出す。

【頌】 呼ぶことは即ち易く、遣ふことは即ち難し 此れは此兩人の問答に於て臼が此僧を驗する爲に定州の法道云云と云ひて此僧を釣る處並に此僧が棒頭に喪ありと云ふた處は皆對手の作略を呼び出す手段にして此れは比較的に容易なるもさて其釣り出した後の取り扱は中々容易でない臼の扉棒々々とか色々他を弄する手段と云ひ此僧が更に主となりて棒を行するなど一通りの作略では出來ない處を頌したもの而して此語は此兩人の難易の處を蛇を捕へるものゝ難易を借りて頌したものである即ち蛇を捕ふるに先づ瓢で作りし笛を吹くと蛇が集まると云ふ此れは何人にでも出來ることなれどさて其巢まつたものを如何に捕へ遣ふかと云ふ段になると中々困難の仕事である何となれば僅に捕へそこなへば忽ち毒を受けて喪身するからである。 互換の機鋒子細に看よ賓主互に位置を換へて始終優劣のつかない處を見よ。 劫石劫とは梵語長時間のこと佛教では時劫を論ずるに小劫中劫大劫等のことあり評中に委し 固うし來たるも猶壞すべし かく劫石は堅固なるも破壞する時あり而るに此二人の機鋒は盡くる期なく立處幽深にして時間の外に超然たりとの意蓋し宇宙の本體其のまゝに活動し來るが故に時間の支配を受けぬとの意 滄溟涘き處も立ろに乾くべし 前句の對句である大海の水も直に乾

く何となれば二人の作略は宇宙乾坤。烏臼老、烏臼老烏臼和尚の名を重れ呼ん。で其作略を稱揚したもの。幾何般ぞ和尚の縱横自在の働きは無盡であつて其を兩手に携へての働きなればなり

奥の手が。他に杓柄を與へて太だ端なし和尚が此僧に棒を與へるとは全體主家にあるまじきことである。知れん と且く抑へて底意は他人ならば出來ることでないと褒めたもの。

【評唱】「呼ぶことは即ち易く、遣ふことは即ち難し」と。一等總てに是れ草に落つ第二第三に。雪落ちて居る寶忑煞慈悲爲なるが。尋常道ふ。蛇を呼ぶは易く、蛇を遣ふは難しと。如今箇瓢子を將て吹き來て、蛇を喚ぶことは易く、遣んとする時即ち難し。一へに棒を將て他に與ふることは却て易く。復他の棒を奪ふて遣ひ去ることは却て難きに似たり。須らく是れ本分の手脚あつて、方に能く他を遣ひ去るを得べし。烏臼は是れ作家。蛇を呼ぶ底の手脚あり。亦蛇を遣ふ底の手段あり。這の僧亦是れ磕睡底平凡にあらず。烏臼問ふ、定州の法道這裏と何似と。便ち時れ蛇を他ぶも。烏臼便ち打つ。是れ他を遣ふの。僧云く、棒頭に眼あり草々に人を打つことを得ざれと。こはこれ却て這の僧の處に轉在して蛇を呼ぶ手が僧の手、便ち是れか呼び來したもの。烏臼云く、汝若し要さば山僧汝に回與せん。僧近前して棒を奪ふて他を打つこと三下す。却て是れ此僧の遣ひ去りしもの。乃至其他の問答、略して此僧大笑して出づ。烏臼云く、消得恁麼消得恁麼と。此れ分明に他僧を遣ひ得て恰合なり。看よ他兩箇の機鋒互換。絲來り線去つて衣を縫ふに針線の路、打成一片異途に迷らすにの違はざるを云ふ

して、始終賓主分明なることを。即ち有時は主却て賓と作り。有時は賓却て主と作る。雪竇也讃歎し及ばず。所以に道ふ、互換の機、人をして且く子細に看せしめんとして、「刼石固うし來るも猶壞すべし」と。謂ゆる此刼石は方四十里、凡そ百年に乃ち天人あつて下り來り、重三銖の衣を以て拂ふこと一下し。又去て百年に至つて、又來つて此の如くに拂ふ。かく此の石を拂ひ盡すを乃ち一小刼と爲す。之を輕衣拂石刼と謂ふ。雪竇道く、刼石固うし來るも猶壞すべしと。石は堅固なりと雖も、尙爾も消磨し盡くすべし。此二人の機鋒は千古萬古更に窮盡することあるなし。「滄溟深き處も立てば須らく乾くべし」とは、任是れ滄溟洪波浩渺白浪滔天なるも、若し此二人をして內に向て立せしめば、此滄溟も也須らく乾き竭くべしとの意。雪竇此に到つて一時に頌し了る。末後に更に道く、「烏臼老、烏臼老、幾何般ぞ」と。これ或は擒或は縱、或は殺或は活、畢竟是れ幾何般ぞなきを美む と其手段限り。又最後に「他に杓柄を與ふ太だ端なし」とは。這箇此の柱杖子七尺の棒は三世の諸佛も也用ひ、宗師家にも也用ゆ。これ人の與に釘を抽き楔を拔き、粘を解き縛を去らんがためなり。爭でか輕易に人に分付し與へ得ん。雪竇の意は獨り用ひんことを要したもの。賴ひに此僧當時只他烏臼の爲に平展放行して他自由を與ふにするに値ふ。然るに此に忽ち若

し旱地に雷を起さば旗を奪ひ鼓を奪ふて一向に正令を行じて。看よ他烏如何が當抵せん其鋒に當ることは出來なかつたろう改め來たならば和尚はどうしたであろう

烏臼杓柄を過過與して人僧に與へ去る。豈に是れ太だ端なきにあらずや とんでもないことを遣つたもの。のだと且く抑へたあんばい

第七十六則　丹霞の喫飯了

【垂示】細なること米末の如く、冷きこと氷霜に似たり。乾坤に逼塞して、明を離れ暗を絶す

此れは宇宙の本體は小なることを云へば米末の如く其大なるを云へば方所を絶す而して天地を包容し乾坤に充滿す其稱たるや明かと云へば暗、暗かと云へば明即ち明中に暗あり暗中に明ありで石頭大師は參同契の中に之れを夜半正明天曉不露と云はれたり蓋し絶對界には迷悟得失是非曲直なし總て一切の相狀を離るゝが故に

低々の處之を觀るに餘りあり。高々の處之を平ぐるに足らず

此れ衆生に在つても滅らず佛に在つても增さず一切の作爲を絶して圓滿無缺なるものなるを云ふ

把住奪ふ放行與ふ。總て這裏この許に在り本體は一切處に徧在する故に謂ゆる跳れども出ですで一切の行動運爲悉く此中を出ですず

此跳れども出でざる處に於て出身の活路を見るうと云ふにはどうしたらよいか

試に擧す看よ。

【本則】擧す、丹霞鄧州丹霞の天然禪師僧に問ふ。甚麼何の處よりか來る。僧云く山下より來る。

石頭希遷禪師の弟子

霞云く喫飯し了るや未だしや。僧云く喫飯し了る。霞云く飯を將ち來つて汝に與へて喫せしむる底の人、還つて眼を具するや否や

御前は山下で飯を食ふたと云ふが御前の爲に飯を與へた人は具眼者とは云へまいと此僧の懵懂なるを抑ゆ

僧無語、長

慶、保福に問ふ、飯を將て人に與へて喫せしむるは、恩を報ゆるに分あり。什麼としてか眼を具せざる

此れは丹霞の話頭を以て保福を勘檢するのである人に飯を與ふるは慈善で佛祖の恩を報ずる一分にもなるのになぜ丹霞はあゝ云ふたのか。

福云く施者受者二り俱に瞎漢

俱に盲人だ否な二人のみならず盡大地箇の一大盲目を離れんや實に十方界を平等に照らすものは此一大盲目ならずやと本分事の露現た丸出にしたもの豈に具不具の際ならんやとの底意

長慶云く、其機を盡し來るに還つて瞎と成んや否や

我豈に盲人ならんやとの意尚此處評唱と照らし見よ

今長慶は全機を以て本分の立脚地より道ひもち來。

福云く我れを瞎すと道ひ得んや否やと

今長慶は全機を以て本分の立脚地より道ひもち來。それでも盲人と云ふのかと再勘辨したもの

【評唱】鄧州丹霞の天然禪師は、何れの許の人なるを知らず。初め儒學を習ふ。將に長安都に入て擧科擧即ち文官高等試驗に應せんとす。方に逆旅館に宿る。忽焉として白光室に滿つと夢みる。占者曰く、解空の祥瑞なり

佛教に入るの瑞祥だと云はる

偶々一禪客問ふて曰く、仁者何くにか往く。曰く選官し去る。禪客曰く選官何ぞ選佛に如んや

選佛とは佛像にたましいを入れるを云ふ今は佛者となれの意

霞云く選佛當に何れの所にか往くべき。禪客云く、今江西に馬祖大師出世す。是れ選佛の場なり。仁者往くべしと。遂に直に江西に造る。才に馬大師を見て、兩手を以つて幞頭脚巾日本の頭を托ぐ、馬師顧視して云く、吾汝が師にあらず。南嶽の石頭大師の處に去れと。遽に南嶽に抵つて還つて、前意馬大師の意に從てを以て之石頭に投ず。石頭云く槽廠行者の居る所即ち碓房なり に着き去れど。師禮謝して行者堂に入り、衆に隨て作務する

こと凡そ三年。石頭一日衆に告げて曰く、來日佛殿前の草を剗らんと。來日に至て大衆各々鍬鋤を備へて草を剗る。丹霞獨り盆を以て水を盛つて淨頭洗頭をして、師の前に於て膝を跪づく。石頭見て之を笑ふ。便ち與に剃髪す。又爲に說戒す戒法を說く。丹霞耳を掩ふて出づ。便ち江西に往いて再び馬祖に謁す。未だ參禮せざるに便ち僧堂の內に去往て、聖僧坐禪堂の正面の壇上に安置せる佛像の頸に騎つて坐す。時に大衆驚愕して急に馬祖に報ず。祖躬ら堂に入つて之を視て曰く、我子天然の霞と丹霞の佛像に跨り騎る樣子を云ふたものか。便ち下つて禮拜して曰く、師の法號を賜ふことを謝すと。因て天然と名く。他の古人丹霞天然として此の如く隷脫なり。謂ゆる選官は選佛に如かざるなり。傳燈錄の中に其丹霞の語句を載す。直に是れ壁立千仞にして、句々人の與めに釘を抽き楔を拔く底の手脚あり。此僧に問ふに似たり此本則の僧に問ふ手段。道く什麼の處よりか來る。僧云く山下より來る。と一樣であるとの意這の僧却て來處を通せず。一へに眼を具して倒に去つて主家を勘辨するが如くに相似たり。當時若し是れ丹霞にあらずんば、也收拾を爲し難からん。丹霞却て云く、喫飯し了るや未だしやと。頭邊初問初答の處は は總て未だ見得せず丹霞未だ此僧の機用を見破せず。此は是れ第二回に他を勘辨す。僧云く喫飯し了ると。こ は 懵憧の漢元來會せず會せざるが爲なり。霞云く飯を將て汝に與へて喫せしむる底の人、還つて眼を具るや否やと。僧無語。丹霞意に云く、儞這般か、の漢に飯を與へて喫せしめば、什麼を作すにか堪へん無眼子に飯を與ふる樣なものは更に無眼子なりとの意。這の僧若し是れ箇の漢具眼者ならば、試に他に一劃拶を與へて他丹霞を如何と看ん。然も此の如くなりと雖も、丹霞也未だ儞を放さゞること在らん。這の僧便ち眼貶々地動目の貌にして「無語」。保福と長慶と同く雪峰の會下に在つて、常に古人の公案を擧示して商量す。長慶、保福に問ふ。飯を將て人に與へて喫せしむ。恩を報ずるに分あり。什麼としてか眼を具せずと。必ずしも盡く公案中の事を問はず、大綱を携げて此語を借りて、話頭となして他保福の諦當悟入の處を試みんことを要す。保福云く施者受者二り俱に瞎漢盲人と。快なるかな這裏に到て、只當機本分の事を論ず。家裏保福の底意のに出身の路あり第一機の上に立ちて諸方の纏結を容れず。長慶云く、其機を盡し來るに、還つて瞎盲人と成さんや否や。保福云く我を瞎すと道を得んやと。保福の意に云く、我れ恁麼に眼を具して、儞が與めに道ひ了れり。還て我を瞎すと道ひ得んやとの意。然も斯の如くなりと雖も、半合半開全體を劈開得ずとの意し。當時若し是れ山僧ならば、他長慶の其機を盡し來るに還つて瞎と成さんや否やと道ふを等待也て、只他に向て瞎と道んものを。可惜許惜むべ。保福當時若し這箇の瞎の字を下し得ば、雪竇の許多の葛藤句言を免れ得たらん。雪竇亦只此意を用ひ

て 闔悟の判定と同樣に頌す。

【頌】 機を盡せば瞎と成らず。牛頭を按じて草を喫せしむ 評唱にもある通り總て此頌は長慶と保福の問答を頌しながら底意には丹霞の意を含ませてある長慶と保福とが機を盡すとか盡さゞれば瞎とか不瞎とか云ふて居るが牛頭を按じて草を喫せしむるの類で、食ふこゝろのないものに食はせようとしたとて駄目だとの意此牛頭の故事は大論に出て居る話しである。 四七、二三の諸祖師 四七、二十八代の祖は印度に於ける祖師で迦葉尊者から達磨大師に至る二三が六は支那に於て初祖達磨から六祖曹溪大師までの六代を云ふ、 寶器持し來るも過咎と成る 此代々の祖師の相傳せる寶器は以心傳心の寶器で色々の名を付して用ひて居る祖師の心印と云ひ又は那邊の那一句とか這箇とかと云ふて居る今は喫飯のことより問題が出て來て居るから佛祖傳來の應量器即ち佛鉢と見るべきであろう今彼等は鉢を揚げ手を犯して遂に立派な鉢にきずを付けてしまう。 過咎深し、尋ねるに處なし。天上人と此れで本則の頌は了つて已下は雪竇の見識である過咎を拈起し來る。 間同く陸沈す 其過咎は尋常ではない深さはどれ程か知れんから尋れても知れん尋たるものと尋れらるゝものと二枚ないから眼眼を見ずであるからだ此に何の瞎不瞎あらん然るに長慶や保福は色々と云ふて灑々落々たることが出來ず否な二人のみならず天上天下悉く陸地で溺れ死んで居ると雪竇第一。頭地に立つての正令である陸沈とは莊子より來た語沈むべからざるに沈むを云ふ

【評唱】 「機を盡して瞎と成らず」と。長慶云く其機を盡し來るに還つて瞎と成るや否や。保福云く、我れを瞎と道を得んやと。一へに牛頭を按じて草を喫せしむるに似たり。須らく是れ他の自ら喫するを等閑て始めて得べし。那裏どこにか他の頭を按じて喫せしめん豈に此理あら。雪竇恁麼かくに頌す。自然に丹霞の意を見得す 元來圓成なりと雖とも會得せざれば喚し「四七、二三の諸祖師、寶器持ち來るも過咎と成ると。唯只長慶を帶累するのみにあらず。乃至西天印度の二十八祖、此

土の六祖を一時に埋沒す。釋迦老子四十九年一大藏教を說いて、末後に唯這箇此寶器を傳ふ。永嘉道く、是れ形を標して虛しく事褫持也するにあらず。如來の寶杖親しき蹤跡と。若し保福の見解を作さば、寶器を持來するも、都て過咎と成る。「過咎深し尋ぬるに處なし」と。這箇玄旨は汝が與に說くことを得ず。但去つて靜坐して他雪寶の句中に向て點檢して看よ。既に是れ過咎深し。什麼に因てか却て尋ぬるに處なき。此れ小過にあらず。祖師の大事を將て、一齊に陸地上に於て平沈却沒す。所以に雪竇道く、「天上人間同じく陸沈す」と。

第七十七則　雲門、胡餅と答ふ

【垂示】 向上に轉じ去らば、以て天下の人の鼻孔を穿つべし。鶻はやぶさの類の鳩を捉ふるに似たり師家が本分向上の立場に立て王令を行ふときは天下の人の出頭を許さない實に其孤危峭絕なる手段を用ふることは恰もはやぶさが鳩を捕ふるようである所謂匹夫の心も奪ふべからざるものである然るに 向下に轉じ去らば、自己の鼻孔も別人の手裏に在り。龜の殼に藏るゝが如し 人の爲めに第二第三に落ちて老婆心を現ずるときは自分のことなどはどうあろうとかまはぬ全く拖泥帶水である恰も戰場より家鄉に歸れば鬼將軍が子供の守りをするようなもので鼻もつまゝ。箇此の中れようし髯もむしられよう譬へば龜が殼中に入りて手も足も出さない有樣のようで全く自由を缺くのである 闔悟の座下の中にて 忽ち箇人の出で來つて、本來向上向下無し。轉ずることを用ひて什麼かせんと道ふも

のあらば、只伊僧其に向て道ん。我也知る儞が鬼窟裡空腹高心の裡に向て活計分別を作すことを。且く道へ、作麼生如何か箇の緇素黒白を辨せん然らば向上が是か向下が是か黒白。を辨じてどれが本統の處であるかば條を攀ぢ、條なければ例を攀づ判官の仕方である幸ひ。今は適例があるから試みに擧示す看よ。良久暫時無言の後して云く、條條式あれ

【本則】擧す、僧あり雲門に問ふ。如何なるか是れ超佛越祖の談佛祖も亦命乞をすると云ふ樣な作略即ち禪道佛法の臭氣更にない境界は。如何門云く餬餅胡餅と書くべきだと云ふことである胡麻を付けた餅のこと。此の答處一切の思慮分別を容れない頌並に評唱に參すべし

【評唱】這此の僧、雲門に問ふ。如何なるか是れ超佛越祖の談、門云く餬餅と。還つて寒毛卓竪することを覺ふや否や。禿僧家佛を問ひ祖を問ひ禪を問ひ道を問ひ。向上向下を問ひ了つて、更に問ふことを得べきなし。却て箇問端を致して、超佛越祖の談を問ふ。雲門は是れ作家、便ち水長多くなければ船高く、泥多ければ佛大なり自由自在の意。便ち答へて道く、餬餅と。謂つべし道虛りに行せず易の繫辭に曰く苟も其人にあ。功浪りに施さず其答處應機接物の機用あるを云ふ。雲門復衆に示して云く、「儞作し悟入了るべきこと無くして悟了することなくして、人の祖師意を道着云ふするを見て、便ち超佛越祖の談の道理を問ふ。儞且く麼を喚んで佛と作し、什麼を喚んで祖と作して、即ち超佛越祖の談を說く。便ち箇の出三界欲界色界無色界の三界を超出する處を問ふの意ならん、儞先づ三界を把り來れ看ん。元來什

麼何の見聞覺知か儞を隔礙し着くることあらん。什麼の聲色の佛法の汝に與て了むべきかあらん。箇什麼の碗をか了せん。那箇何也を以てか差殊の見と爲さん人々元來繩なきに自ら繩を作りて自分で自分を縛し以て自由を失ふて居るのである一度根源に徹すれば見聞覺知元來我を束縛せず四條五條の橋の上行き來の人を其のまゝに見る。他の古聖歷代の祖師儞である又佛法の求むべきなく元來無所得の法なれば差別の見つべきものなきにあらずやとの意。

を奈何ともすることなくして、身を横へて物の爲にす無所得の法中に曲て法を施して衆生の爲にす要は徹底し來らば物々皆光を放つ澁柿の時を經て甘くなる性の靈性を鍛練するに在り

性が如し初めより他に求めず人。箇の擧體全眞物々覿體と道ふも不可得なり一物を擧くれば一物の獨露にして其もの其まゝか解說の姿と云ひ來るも空を以て人に與ふるが如く更に手ごたへなし根底未だ平穩ならざればなり我門雲れ汝に向て道ふも、直下に什麼の事かあらん。早く是れ埋沒し了れりと、いろる說話も早く是れ諸人の靈性を埋沒し了れりとの意」。此の語を會得せば、便ち本則餬餅を識得せん。謂ゆる直に根源を截るは佛の印證する所、葉を摘み枝を尋ぬるは、我れ能くせずである證道。這裏根源を截る處歌中の語に到て、親切を得んと欲せば契當せん、問を將ち來つて問ふこと莫れ直截にし去るべし問を以て答を執着して至極となすなかれと是れ答とならば、問處にあ。看よ這の僧問ふ。如何なるか是れ超佛越祖の談。門云く餬餅と。還つて差慚を識るればなり

や否や且く雲門を。抑へたもの。還つて漏逗きすることを覺ふや否や。一般の人或あり。杜撰にして道ふ。こは雲門、兎を見て鷹を放つの類に。便ち道ふ餬餅と。若し恁麼斯の如くに胡餅を將て便ち是れ超佛越祖の談として見去らば、豈に活路あらんや。胡餅の會得を作すこと莫れ。又超佛越祖の會を作さ

ざれ。便ち是れ活路なり。山の洞麻三斤と。禾山の解打鼓と一般同底意なり。然も只胡餅と道と雖も、其れ實に見難し。後人多く道理を作して云く、麁言及び細語皆第一義に歸すと。若し恁麼に會せば、且く去つて座主學者と作つて、一生、多知多解を贏得せよ。如今の禪和子禪僧道く、超佛越祖の時、諸佛も也脚跟下に踏在し、祖師も也脚跟下に踏在す。所以に雲門只他に向て胡餅と道ふと。既に是れ胡餅豈に超佛越祖を解せんや。試みに去つて參詳實參實究して看よ。諸方の此本則を頌した頌極めて多し。盡く門頭邊に向て言語を作す雲門の高穩を述べて居らず唯雪竇のみ頌し得て最も好し。試みに擧す看よ。頌に云く。

【頌】 超談の禪客問偏に多し。縫罅披離す見るや也なしや 古來より超佛越祖の問端を擔き廻る禪僧は中々多いが今此僧も御多分に漏れず又此問を致す已に其問端に縫罅即ち縫ひ目の破れて居るのが見えるではないか當體即是なる。に更に超佛越祖を求む是れ已に縫ひ目がほくろびてばら〳〵になつてしまうて居る。胡餅壅塞ぐの意し來るに猶は住まず。今に至つて天下請訛曲折して難解なるを云ふ言ふ（此れは本則には出て居ないが雪竇は此れを用ひ合せ來たもの）て止まないのである蓋し本源を斷ぜず言句に迷ひ轉ぜられる爲であつて此餅の話が天下の人の八幡知らずとなつて錯謬に陷るのである是れ皆末を追ふから起るのであると。の意。

【評唱】 「超談の禪客偏に多し」と。此語超佛越祖禪和家偏へにかゝ問を發するを愛す。見ずや雲門道く、

儞諸人横まに柱杖を擔ひて、我れ參禪學道すと道ふて、便ち箇此の超佛越祖の道理を覓む。我れ且く儞に問はん。十二時中日行住坐臥、屙屎放尿す。茅坑裏便所の蟲子、市肆の羊肉を買賣する案頭店に至つて、還つて超佛越祖底の道理ありや否や。道ひ得る底は出で來れ。若し無くんば我が東行西行縱横に說き來るのを妨げざれを妨ぐる莫れと。便ち下坐す。有者は更に好惡を識らずして、圓相を作し一圓相を畫きて此れ宇宙の本體、徒なり何物か之れを出んと云ひに土上に泥を加へ枷を加へ鎖を帶ぶことを知らず徒らに法を見ば是れ土の上に更に泥を加へたるもの又見に縛されて。所見を立して法上に自由を得ざるは枷を加へ鎖を帶ぶの類何の詮あらんとの意。「縫罅披離支離滅裂す見るやまたなしや」と。他此僧問を致す處に、大小大字助の縫罅あり。雲門他の問處の披離分離するを見る。所以に胡餅を以て攔遮也縫塞定す。這の僧自ら肯て住まず。却て更に問ふ本則にはなきも雲門の本錄中には僧云々更に什麼。是の故に雪竇云く、胡餅壅塞也し來るに猶住まず。今に至て天下請訛あり」と。如今の禪和子只の交渉があらん門云く云々の問答あり之を云ふ管に胡餅の上に去て解會す。然らずんば超佛越祖の處に去て道理を作す。既に這此の兩頭方に在らずんば、畢竟じて什麼の處にか在る。三十年後山僧が骨を換へて死して出で來らんを待て、却て儞に向て道はん。

第七十八則　十六人の開士浴に入る　(垂示なし)

【本則】　擧す、古へ十六人の開士、梵語菩提薩埵略して菩薩と云ふ、覺有情、開士、大心等と譯す経中には多く開士とあり。浴僧の時に於て例に隨つて浴に入る。忽ち水因を悟る　此れは評唱にもある通り首楞嚴經に跋陀婆羅菩薩が其同伴者十六人の菩薩と共に開悟の經驗談を語たことがあるそれは此菩薩と他の十六人の菩薩は過去世に於て入浴せし時忽ち水性を徹見し塵垢も洗はず體をも洗はず中間安然として無所得を得て云く妙觸宣明にして佛子住を成じたりと言ふたのを今雪竇が頌古の題としたものである抑も水の體性はこれと云ふて其實體實性を認定することを得ざるは今世の科學でも水は水素酸素の化合物なり而も其原素なるものを研究すれば最後には電子と云ふものに歸着し物質的とも精神的とも確定し能はざる不可思議のものとなると云ふて居る今佛教にては水相を以て因緣假和合のもので暫時の間の狀態に過ぎずとするのである世人只水の力用によりて身體を洗ひ清めると思ふて居るが其水因の本來空なるを了ずる時はそれと同時に身體も塵垢も皆悉く實體實性の認むべきものなきを自然に悟了するに至らむ諸禪德、作麼生か會せん雪竇の語。他菩薩道ふ妙觸宣明、成佛子住と　かく眞空の水を以て眞空の身體を洗ひ眞空の塵垢を洗ふが故に今此菩薩は身體に觸覺を感ずる時眞空を以て眞空に觸るゝものなれば畢竟して無所得なるを達觀せんそこを妙觸宣明と云ふ實に觸を受く所不思議の法なるを以て妙觸と云ひ其狀態顯著なる故宣明と云ふ此妙觸宣明の處即ち是れ成佛子住であるとの意即ちかく悟了の當處立地に成佛を得るとの意　也須らく七穿通八穴達にして始め得べし　雪竇の語なり菩薩は妙觸を以て佛子住を得たと云ふが我禪家にては此妙觸たるや只入浴のみに限つたことではない運作顛倒手の舞ひ足の踏む處悉く妙觸宣明の時節に至らなければならぬとの意。

【評唱】　楞嚴會上佛陀楞嚴經を說き給ふ時にに跋陀婆羅菩薩、十六の開士と與に、各々梵行清淨の聖業を修せし時、乃ち各々證する所の圓通法門の因を過去世に於て證入せる圓通の法門を說く。此亦二十五圓通の一數なり。即ち過去世にての所證

の法門は他菩薩浴僧の時に因んで、例に隨て浴に入つて、忽ち水因を悟る。云く既に塵をも洗はず、亦體をも洗はず、且く道へ箇の什麼をか洗ふ。若し會得し去らば中間安然として所有なきことを得ん無所得の法門を得ん。謂ゆる無所得は是れ眞般若般若は梵語智慧と譯すなるを以て、若し所得あらば是れ相似の般若なり蓋し宇宙の本體上には一法として與べきものなく失ふべきものもなければ得るものもなし物々眞にして圓滿のものなり故に無所得不可得と云ふ。見ずや達磨二祖惠可大師に謂て云く、心を將ち來れ汝が與に安せん。二祖云く心を覓むるに了に得べからずと。這裏この些子不可得の處是れ衲僧の性命の根本なり。更に總て如許多の多少の葛藤言語を消用得せず更に言詮を用ふるの要なし。只箇此の忽ちに水因を悟ると道ふことを消用ひ知らばせば自然に了當悟入せん。既に塵をも洗はず亦體をも洗はず。且く道へ箇の什麼をか悟る。這般か、田地見地に到て塵體共に洗はざる處、一點も也着くるを得ず。即箇の佛の字を道ふも也須らく諱却すべし只是れ虛空廓々地なるこを領會すべしとの意　他道ふ妙觸宣明佛子住を成ずと。宣は則ち是れ顯の意なり。即ち妙觸は是れ明なりと云ふ意なり。既に妙觸を悟れば、佛子住を成じて即ち佛地に主す。如今日の人も亦浴に入り亦水に洗ぎ、也恁麼菩薩と同じ樣に觸る。甚に因てか却て悟らざる。これ皆塵境に惑障せられて、皮に粘りつき骨に着く。所以に惺々るにし去ること能はず。若し這裏こに向て洗も亦無所得、觸も亦無所得、水因も亦無所得ならばも俱に其體無所得との意

且く道へ是れ妙觸宣明か、是れ妙觸宣明にあらざるか。若し箇の裏無所得の上に於てに向て、直下に思慮に渉らず見得せば、便ち是れ妙觸宣明にして佛子住を成ずるなり。如今の人も亦觸る。還つて妙處を見るや否や。妙觸は常觸通常云ふ所の、觸する者と合する時は觸たり、離るゝ時は則然らざるが如きにあらず。玄沙和尚嶺飛猿嶺を過ぎて、脚指頭に磕着す玄沙初め雪峰に謁して後諸方を徧歷して飛猿嶺を過ぐるに際し石に指頭を觸れて痛處の無所得を悟りて妙觸を得たり。以至乃至德山の棒豈に是れ妙觸にあらずや德山門に入れば便ち其僧を打つ此時棒下に無生。忍を以てせば即ち是れ妙觸を得たるにあらずや。然も恁麼なりと雖も、也須らく是れ七穿通八穴逢にして始て得べし棒頭の用處を知り指頭の痛處を知つて更に七通八達の自由あり始て妙觸を得との意。若し只身上に向て摸索せば、什麼の交渉かあらんそれでは妙觸とは云へんとの意。儞若し七穿八穴にし去らば、何ぞ必ず浴に入ることを須ひん即今即處に於て無所得なるを知らば。便ち一毫端上に於て、寶王刹刹も世界を現じ。微塵裏に向て大法輪を轉す。一處心源を透得すれば千處萬處一時に透る。只一窠一屈を守ること莫れ。一切處都て是れ觀音入理の門なり　觀音は觀世音又は觀自在にして世間の音聲を聞き觀すること自在なるを觀音と云ふを以て一切の諸法は皆な自在に妙觸に入るの門。古人亦聞聲悟道音聲を聞いて悟道に入るを云ふ即ち香嚴は竹に石の當りて音を發するを聞きて悟道せりと云ふされば此菩薩等が觸根の妙觸を得たりと云へば此れは又耳根の妙觸を得たのである。見色明心色即ち外境を見て心を明め悟りたるものもあり即ち靈雲は桃花を見て悟れりと云へば此は眼根の妙觸を得たのである のことあり。今は雪竇他の敎意を拈じ、人をして妙觸の處に去つて會取せしむ。即ち他の敎學者の眼を出でゝ、人の敎網の裏に

去て、籠罩して半醉半醒することを免れ得て、人をして直下に灑々落々たらしめんとす。頌に云く。

【頌】　了事の衲僧一箇を消用也す。長連床上に脚を展べて臥す本分の大事を悟了したる衲僧であらば菩薩達のやうに何にも十六人も一所とならずとも單に一人で足りる話だ已に斯る境界のものには迷悟得失佛法禪道と云ふ樣なものを超絶せる故に禪林の僧堂に於ける坐禪する床上に足を展べて眠り胸中實に灑々落々たるものがあるのである、此僧堂の坐禪する床はずつと長き床に單位を設けて各々其單位にて幾人も。同時に坐禪して居る故長連床上と云ふ。　夢中に曾て說く圓通を悟ると。香水を以て洗ひ來るも驀面に唾せん　されば楞嚴經の二十五人の菩薩が各々圓通の法門を說いて居る其法門も夢中に說いて居る樣なもので一度目が醒めて見れば皆夢中の說なることを知るに至らん故にたとひ香水を以て充たせる浴舟に入り來るも其れが無垢清淨と云ふ一つの塵垢となるから雪竇第一頭。地上よりそう云ふものを拂ひ來たのである

【評唱】「了事の衲僧一箇を消す」と。且く道へ箇の什麼をか了得す元來了得すべきものなき。只夫作家の禪容聊か擧着するを聞いて剔起して便ち行く他一を擧ぐれば直下。に便ち了達すとの意。恁麼の衲僧に似たらば、只一箇を消用得す一人で事足る。何ぞ群を成し隊を作すことを用ゐん。「長連床上に脚を展べて臥す」と。古人云く、明々として悟法なし、悟了せば却て人を迷す　元來無所得なれば悟法なるものなし故に若し悟了だと云へばそれは却て人を迷はすことゝなる。長く兩脚を舒て睡らば、僞もなく亦眞もなしと。所以に胸中に一事無く。飢え來れば飯を喫し、困じ來れば眠る。雪竇の意に道く、儞若し浴に入つて妙觸宣明を悟得すと說かば、

這般かゝの無事に在る衲僧分上には、只夢中に夢を說くにも似たり。所以に道ふ、「夢中曾て說く圓通を悟る。香水を以て洗ひ來たるも驀面に唾せん」と。此恁麼に似たるも只是れ惡水を驀頭直に澆がん。更に箇の什麼の圓通とか說かんとの意。山僧は道はん。土上に泥を加ふ又一重と。

第七十九則　投子の一切の聲

【垂示】大用現前規則を存せず。活捉生擒餘力を勞せず師家が學人を接するや初めから一定の形式規則ありてするにあらず機に應じ變に臨んで縱橫自在なりかくて對手を生擒する。且く道へ是れ什麼人か曾て恁麼かくの如くにし來れる。試みに擧す看よ。に些の力を費さずとの意

【本則】擧す、僧あり投子投子山の大同禪師逢磨十一世の法孫實著にして能辯の稱あり此僧初めより陷虎の計略を以て其能辯者をまごつかせようと云ふ考へで此問端を發したもの に問ふ。一切の聲は是れ佛聲なりと。是なりや否や、投子曰く是づ此れ投子他を釣らんが爲に先。僧云く和尙屎沸碗鳴聲すること莫れと此僧已れの思惑に投じて來たと思ふて然らば和尙の說法の聲も屎即ち放屁の聲又は碗の中へ熱湯を注いだ時にぶつ〳〵云ふ聲などと違ふては居らぬでは御座らぬかと。投子便ち打つ投子何ぞ他の陷穽に陷ぬらんや此僧の惡平等の毒海に入れるを見て垂。又問ふ麁言及び撞き込む細語皆第一義に歸すと是なりや否や。投子云く是。僧云く和尙を喚んで一頭の驢と作し得てんや否やと、投子便ち打つ。

【評唱】投子朴實頭にして逸郡の辯を得たり。凡そ問を致すものあつて口を開けば便ち膽を見。餘力を費さずして他の舌頭を坐斷す二の句をつげなの外に決すと。此僧聲色佛法の見解を將て、他此僧自分の額頭上に貼在その見解をはりつけて して、人に逢ふて便ち問ふ。投子は作家此僧の來風を深く辨ず。這の僧投子の實頭實着なることを知つて、合下直に箇の圈纘子陷穽を做して投子をして入り來らしめんとす。所以に後の語ありちやんと初めから第二の句の意を控へて持つて居るのでわかると。然る投子却て陷虎の機を使ふて、他の後語を釣り出し來る即ち初めに先づ是と與へて於て釣る。這の僧他の答處に接して道く。和尙屎沸碗鳴聲すること莫れと。果然として一釣に便ち上る。若し是れ別人ならば、則ち此僧を奈何ともするを得じ。投子は具眼なる故。後に隨つて便ち打つ。咬猪狗底の手脚なり俊狗が野猪を咬殺す。須らく作家に還して始て得べし。左轉も也他に隨つて阿轆々地井戸車の何れへでも自由に轉する如く。右轉も也他に隨つて阿轆々地たり。這の僧既に是れ箇一の圈纘子を做造也して、來つて虎鬚を捋んと要す。殊に知らず投子更に他の圈纘頭上に在ることを、投子便ち投つ。此僧惜むべきかな頭あつて尾なし。當時他投子の棒を拈ぜんことを等待て。便ち與に禪床を掀倒せば、直饒投子全機を用ふなりとも、須らく倒退三千里なるべし。又問麁言及び細語皆第一義に歸す

と是なりや否や。投子亦云く是と。一へに前頭の語に似て異なることなし。僧云く和尚を喚んで一頭の驢と作し得てんやと。投子又打つ。此僧然も窠窟を作す一物を珍重すると云ふと雖も妨げず奇特なることを。若し是れ曲彔木床上膝を掛けるもの の老漢。頂門に眼なくんば。也他を折挫し難からん。投子轉身の處あり。此僧既に箇の道理を做して他投子の作略のこと を撥奪ふかんとす。到り了れば到つてやつ舊に依て投子老漢を奈何ともするをえず。見ずや巖頭云く、若し戰を論せば、箇箇轉處に立在すと。投子放去は太だ遲く前後の問答に於て是と云ふて。收來は太だ急なり前後に他を打。他に與へた處は纔々地たり つ處を云ふ此僧當時若し身を轉じて氣を吐くことを解せば、豈に箇此口血盆に似る底の漢と作らざらんや活達の漢と。衲僧家には一做さゞれば二休まず第一機上に於て得る處なければ二に落ち。三に落ちて休止することなしと云ふ意 此僧既に返擲轉身することを能はず。故却て投子に鼻孔を穿了せらる鼻頭を捉へられて其自由を失ふとの意。頌に云く。

【頌】投子投子。機輪阻て無し其機用圓轉自在なり 一を放つて 初めには是と云ふて 他に許して開放し 二を得たり 後には便ち打つて他を奪ふて收す。彼に同じく此に同し 前後の問答全く同一撰だと云ふて投子の手段を稱揚し以下の二句は僧を評したもの。憐むべし限りなく潮を弄するの人。畢竟還つて潮中に落ちて死す 徒らに道理を追ひ廻つて際限もなく二回までも同じ潮流を追ふて遂に其潮流の中に落ち自分を縛して死漢となる憐れさよと抑ゆ忽然として 活せば。百川倒流して闘澎々 然し百尺竿頭に一歩を進めて大死一番したならば百川一時に逆流して音を立てゝ疏通し去らんどうしても一旦行くべき處に行きついて更に轉身して來ればこそ駄目であるとの意

【評唱】「投子投子。機輪阻てなし」と。投子尋常道ふ世間のものたちが云ふには 投子は實頭なりと。然し忽然として山を下ること三歩し驀直にと云ふ意。人あり僠に問ふに、如何なるか是れ投子實頭の處と道ば、僠作麼生か抵對せん如何に應答するか。古人道く。機輪轉ずる處作者作家本分の人も猶ほ迷ふと。他投子の機輪、轉轆々地にして全く阻隔なし。所以に雪竇云く。「一を放つて二を得たり」と。見ずや僧問ふ。如何なるか是れ佛。投子云く佛と。又問ふ。如何なるか是れ道。投子云く道と。又問ふ如何なるか是れ禪。投子云く禪と。又問ふ。月未だ圓かならざる時如何。投子云く三箇四箇を呑却す三四分を缺くと云ふ意。圓かなる後如何。七箇八箇を吐却すと滿月の後亦一、二分を缺くとの意 投子人を接化すること常に此の機鋒を用ゆ。今亦此僧に答ふるにも。只是れ一箇の是の字を用ゆ。此僧兩回とも打たる。所以に雪竇「彼に同じく此に同じ」と。四句以上の四句を以て一時に投子を頌し了はれり。末後に此僧を頌して道く。「憐むべし限り無く潮を弄するの人」と。此僧敢へて旗を撥き鼓を奪ふて道く。和尚屎沸碗鳴の聲をすること莫れと。又道く。和尚を喚んで一頭の驢と作し得てんやと。此れ便ち是れ潮を弄する處なり。此僧伎倆を做し盡す、依然として投子の句中に死在す。投子便ち打つ。此僧便ち是れ畢

竟じて還つて潮中に落ちて死す。故に雪竇此僧を救ひ出して云く。忽然として活す。便ち與に禪床を掀倒せば、投子も也須らく倒退三千里すべく直に百川倒流して闞漲々たることを得んと。唯禪床を震動するのみにあらず。亦乃ち山川岌嶪高天地陡頓暗たらん。苟も或は箇々此の如くならば、山僧且く退鼓を打たん。諸人什麼の處にか向つて安心立命せん。

第八十則　趙州の孩子六識

【本則】舉す。僧あり趙州に問ふ。初生の孩子還つて六識を具ふや也無しや 説明は評唱に委しき故就いて見るべし。趙州云く急水流上に毬子を打す 急流上にてまりをつく樣なものだ擬議を容れぬとの意。僧後に投子に問ふ。急水上に毬子を打すと意旨如何。子云く念々不停流と。

【評唱】此六識 眼耳舌鼻身意の六根が色聲香味觸法の六塵に對して心的作用を呈し來るを六識と云ふ 敎家に立てゝ正本と爲す 凡て佛敎學の心理上の問題の根本となれり 山河大地日月星辰も其れに因て生起ずる所以なり 一切萬法は唯心の所造と說く故に。來る時生ずる時 先鋒先づ生ず と爲り。去る時 殿後死する時六識が最後に死すとなり と爲る。故に古人云く三界唯心、萬法唯識と。若し佛地を證すれば、八識 六識に末那と阿賴耶との二を加ゆ を以て轉じて四智 大圓鏡智等の四種の智 と爲す。敎家に之を名を改めて體を改めずと謂

ふ 唯識宗にては上の六識の上に更に第七識と第八識の二を加へて八識と立つ此の中第六識と第七識との二つは佛地に達せざる中に既に其名改まりて第六識は妙觀察智となり第七識は平等性智となる第八識は佛地に到つて大圓鏡智となるを云ふ而も共に其體性。六根六塵六識。是三の中前塵客觀は分別を會得せず。勝義根神經は能く六識を發生す。六識能く色の分別を顯はす 色即外境に對して種々に分別す。即ち是れ第六の意識なり。第七識は末那識と云、能く去つて世間一切の影事 第八阿賴耶識の變現せる影像を云ふを執持し。人をして煩惱せしめて自由自在を得ざらしむ。皆最れ第七識の用なり。第八識に到て亦之を阿賴耶識と謂ふ。亦之を含藏識とも謂ふ。こは一切善惡の種子習性を含藏するが故に。此名あり。此僧かゝ敎意を知るが故に、故らに將ち來て趙州に問ふ。道く初生の孩兒還つて六識を具するや也無しやと。これ初生の孩兒は六識を具し、眼能く見、耳能く聞くと雖も、然も未だ曾て六塵色聲香味觸法を分別せず。好惡長短、是非得失、他恁麼かゝる初生の時は總て知らざるが爲なり。學道の人復嬰孩の如くならんことを要す。榮辱功名逆情順境都へ他嬰兒を動かし得ず。即ち眼色境外を見て盲に等しく。耳に聲を聞いて聾と等し。癡の如く兀に似たり。其心動かざること須彌山の如し。這箇は外境に對して盲聾の如くなる處は 是れ衲僧家の眞實に力を得るの處なり。古人石頭大師草菴の歌の中に 道く衲被蒙頭にして萬事休す。此時山僧都て不會と 心地泯絶の境なるを云ふ 若し能く此の如くならば、方に少分の相應あらん 本分事に相應する處あらん。而も此の如くなりと雖も、奈何せん一點

も也他其癡兀なるかを瞞欺することを得ざることを。山は舊に依つて是れ山。水は舊に依つて是れ水。造作なく緣慮なし。日月の太虛に運つて未だ曾て暫くも止まらざるが如し。亦我れ日月許多の名相ありと道はず。天の普く蓋ふが如く、地の普く擎ぐるに似たり。無心なるが爲めの故に、所以に萬物を長養す。亦我れ天地自分で許多の功行ありと道はず。天地無心の爲め故に、所以に長久なり。若し有心ならば則ち限齊あらん。得道の人も亦復此の如し。無功用の中に於て功用を施す。一切の違情順境皆慈心を以て攝受す。這裏に〻到て。古人尙自ら呵責して、了了了の時了すべき無く。玄玄玄の處直に須く呵すべしと一切了却して更に了すべきなし此了性も亦。乜し、向上の域には玄妙も亦立せずとの意。又道く事々通じ物々明かなるも、達者之を聞て暗裏に驚くと正位には事物の明顯を許さず。又云く聖に入り凡を超へて聲を作さず。臥龍長く怖る碧潭の淸きことを達人は無心の明鏡死水裡に住せず。人生若し長く此の如くなるを得ば大地那ぞ能く一名を留めんと若し無心にも尙ほ住せざれば盡大地。然も恁麼なりと雖も。更に窠窟を跳何物か是れ凡聖の名を留めんとの意出して始めて得べし。豈に見ずや敎中華嚴經に道ふ。第八不動地に入りし菩薩大心。無功用の智を以て、一微塵の中に於て大法輪を轉ず。一切時中、行住坐臥に於て、得失に拘らず、任運自然に薩婆若海大智慧海に流入すと。衲僧家這裏〻に到て、亦執着すべからず。但時に隨て自在なるべし。即ち茶に

遇ふては茶を喫し。飯に遇ふては飯を喫す。這箇こ向上の事に於ては。箇の定法の字を着執するも也得ず。箇の不定法の字を着くることも也得ず。石室の善道和尙衆に示して云く。汝小兒の出胎の時を見ずや。何ぞ曾て我れ看敎を會すと道はん。恁麼〻の時に當て亦有佛性の義、無佛性の義を知らず。長大するに及んで、便ち種々の知解を學んで、出で來つて便ち我れ能くし我れ解すと。是れ客塵煩惱なることを知らざるなり。十六觀法の中に嬰兒行を最と爲す。哆々啰々の時赤兒の未だ言葉を習はんと。學道の人の分別取捨の心を離るゝに喩ふ。故に嬰兒を讃歎して況喩して之を取らしむ。若し嬰兒是れ道と謂はゞ、今時の人錯まつて會せん。南泉云はく。我れ十八上回也にして作活計大無心を云ふを解すと。趙州云く、我れ十八上回也にして、破家散宅大無心の意を解すと。曹山、僧に問ふ。菩薩定禪定中に香象の河を渡るを聞いて歷々地なりと。什麼の經にか出たる。僧云く涅槃經經中に云く夫れ香象は深河と雖ども地に付いて渡る故に聲なし聲無しと雖ども深信の菩薩は能く聞き淺根の菩薩は聞かずとあり。山云く。定前に聞くか十地の位階ある中初地より七地に至る間を定前と云ひ八地より十地に至るを定後と云ふ。定後に聞くか。僧云く和尙流れり。山云く灘下に接取せよと。又楞伽經に云く、相生は執礙、想生は妄想、流注生は則ち妄を追ふて流轉すと。若し無功用の地に到るも、猶流注相の中にあり。須らく是れ第三の流注生相を出得して、方に始て快

活自在なるべし。所以に潙山、仰山慧寂に問ふて云く、寂子・仰山の名如何。仰山云く和尚他性心の見解を問ふか、他の行解を問ふか。若他性心の行解を問はゞ、某甲知らず行解は階級を踐んで漸次に惑を斷じて悟境に到るを云ふ故にかゝる事は關知せず。若し是れ見解ならば、一瓶の水を一瓶に注ぐが如しと初地と十地と別ならず平等一味なりとの意。若し此の如くなることを得ば、皆以て一方の師と爲るべし。趙州云く危水上に毬子を打つと、早く是れ轉轆々地自在たり。更に急水上に向て打するまりを時。貶眼すれば便ち過ぐ。譬へば楞伽經に急流水の如し之のぞむを望めば恬靜たりと云ふが如し水流は刻々に急流するも一類相續するを以て。古人云く晉譯の華嚴經中に譬へば駛流靜かにして急走せざるが如くに見えるなり水の如し。水流れて定止なし。各々相知らず。諸法も亦是の如しと。趙州の答處意渾て此れに類す。其僧又投子に問ふ。急水上に毬子を打すと意旨如何。投子云く念々不停流と。自然に他の問處と恰好なり。古人の行履行綿密にして答へ得て只一箇に似たり趙州の答處。更に計較を消用ゐせず。儞纔かに他趙州投子に問へば、早く儞が落處を知り了れり。孩子の六識然も無功用なりと一意なり雖も、爭奈せん念々停らずして、密水の流るゝが如し。投子恁麼に答ふ。謂つべし深く來風を辨ずと。雪竇の頌に云く。

【頌】六識無功用なる所を以て一問を伸ぶ。作家曾て共に來端を辨ず六識が六識の作用をしてもそれが色即是空、空即是色と云ふように無功用中の功

用であるがゝる意を經義中より持ち來つて此僧がかく一問を發したので。茫々たる急水に毬子を打すこれは趙州の答處ある其れを趙州でも投子でも共に所問の底意を見拔いての接化である

を頌。落處停らず誰か看ることを解せん投子の念々停らずと云ふた其不停流の當體は誰れか知ることを得んとの意そは沒蹤跡の消息であるからだ

【評唱】「六識無功一問を伸ぶ」と。古人の學道養ふて這裏ゝに到る六識無功用。之を無功の功と謂ふ。嬰兒と一般なり。眼耳鼻舌身意ありと雖も、而も六塵外境を分別することなし。蓋し無功用なればなり。既に這般の田地境界に到て、便ち龍を降し虎を伏し。坐脫立亡立つたまゝで死す。今人の如きは但目前の萬境を持て一時歇却す。何んぞ必ずしも八地以上十地の修階の中にて八地の位を不動地となす外境都て滅亡して諸の虛妄を離るゝ位なりにして方に乃ち是の如くならん一心生ぜざれば萬法咎なし何ぞ十地。然も無功用の處なりと雖も、舊に依て山は是れ山。水は是れ水なり。故雪竇前面に四十一則の處に頌して云く、活中に眼あつて還つて死に同じ。藥忌何ぞ作家を鑒みるを須ひんと。蓋し趙州投子は是れ作家なるが爲の故に。云く「作家曾て共に來風と辨ず。茫々たる急水に毬子を打す」と。投子道く、念々不停流と。諸人還つて落處を知るや否や。雪竇末後に人をして自ら眼を着けて看せしむ。是故に云く「落處停らず誰か看ることを解せん」と。此は是れ雪竇の活句。且く道へ什麼何の處にか落つ。

第九卷

第八十一則　藥山の塵中の塵

【垂示】 旗を攙き鼓を奪ふ。千聖も窺ふこと莫し譎詐萬根錯節と云ふも同じ曲折して解し難き處を坐挫也斷して、萬機鋒到らず此師家が學人を接する機鋒の孤峭なるを明す學人の根據を奪取して敵をして再び立つ能はざらしむるの手段は千佛萬聖も窺ふに地なく如何なる難問を呈し來るも直下にやす〳〵と答辯する處は如何なる機鋒も當るべからずとの意是れ神通妙用にあらず。亦本體如然にもあらず。これである亦自然であるとも云へぬやがて是れ向上の大機大用である。且く道へ。箇の什麼何に憑てか恁麼かゝの奇特自由自在を得たるとの意。

【本則】 擧示す。僧あり藥山澧州藥山の惟儼禪師石頭大師の弟子に問ふ。平田淺草原野に塵鹿群を成す塵は鹿の王。如何んが塵中の塵を射得てん。山云く箭を看よと口を開けば瞻を看るで問端の歸趣を知るが故に引く手は見せず直下に箭先を看と云ふ是れ已に汝の胸倉に射透つて居るではないかと云ふ。僧身を放つて便ち倒るかうなつては塵中の塵を氣取れる此僧は死ぬより手は。山云く侍者這此のあんばい塵の何物たるかは評中に委し往いて見るべし。山云く泥團を弄する漢什麼死漢を拖き出せと此れ此僧の死中に活を得る。僧便ち走る死中に活を得た。山云く死中に活を得るや否やを試みるのである。と云ふ氣だらう

の限りかあらんつまらない奴だ相手になつて居れば限りがないと抑ゆ。雪竇拈じて云く、三歩には活すと雖も、五歩には須らく死すべし此れ此僧に對する判定である即ち走り出た處は中々よいが僅かに三歩か四歩位は活き居るであら。うが五歩となつては死んでしまうと十分に活きる手段がないので死漢たることが知れるとの意。

【評唱】 此公案本則の問答洞下門下曹洞に之を借事問事に寄せて本分上の事を問ふのを云ふと謂ふ。又之を辨主問師家を試みると問ひみ云ふも謂ふ。用ひて當機當面の機を明す。鹿と塵とは尋常射易し。唯塵中の塵あり。是れ鹿中の王なり。最も是れ射難し。此塵鹿常に崖石の上に於て其角を利ぐ。鋒鋩の隸利なるが如し。身を以て群鹿を護惜す。亦近傍すること能はず。此僧亦惺々なるに似たり。引き來つて塵中の塵を藥山に問ふ。用ひて第一機宇宙の本體を明す。山云く箭を見よと。作家の宗師妨げず奇特なることを。其機用擊石火の如く閃電光に似たり。豈に見ずや。三平大顛の弟子初め石鞏馬大師の弟子に參ず。鞏才に來るを見て、便ち弓を彎く勢を作して云く、箭を看よと。三平胸を撥開して云く、此は是れ殺人箭か活人箭か。鞏弓弦を彈ずること三下す。三平便ち禮拜す。鞏云く、三十年一張の弓、兩隻の箭。今日只半箇の聖人を射得たりと云ふて、便ち弓箭を拗折す。三平後に大顛に擧似す。顛云く既に是れ活人箭。什麼としてか弓箭上に向て辯ず弓弦は物の生命を破るもの活人の理。三平無語一分本智に契ふも未だ圓明ならざれば事に觸れて凝滯なき能はずなし此れに向つて辯ずるは何故ぞ。顛云く三十年の後、人の此話を擧せんと要するも也得難しと。法燈法眼大師の弟子頌あり云く、古へ石鞏師あり。弓矢を架して坐す。是の如くすること三十年。知音一箇

も無し。三平的に中り來る。父子相投和す。子細に返つて思量すれば、元伊石是れ梁射棚也を射ると、石鞏の作略藥山と一般なり。三平頂門に眼を具して、一句下に向て便ち的旨に中る。一に藥山の箭を看よと道ふに似たり。其僧便ち塵と作つて身を放つて倒る。這の僧也作家に似たり。只是れ頭あつて尾なし。既に圈纆を做して藥山を陷ゐれんとす。爭奈せん藥山は是れ作家一向に逼りて將ち去ることを。山云く侍者這の死漢を拖き出と。これ陣を展べて向前するが如くに相似たり。其僧便ち走る。也好し是なることは則ち是。爭奈ん脫洒ならずして脚に粘し手に粘することを。所以に藥山云く、泥團を弄する漢什麼の限かあらんと。藥山當時若し後の語

泥團を弄す云云の句　なくんば、千古の下人の檢點に遭はん。山云く箭を看よと。這の僧便ち倒る。且く道へ是れ會か不會か。若し是れ會と道はゞ、藥山什麼に因てか却て恁麼に道ふ。泥團を弄する漢と。這箇の泥團云云の語は最も惡辣なり。正に僧の德山に問ふに似たり。學人鏌鋣の劒に仗て師の頭を取らんと擬する時如何。山德山頸を引いて近前して云く囚物を擧げたり推したりする時に出す聲を云ふえーと云ふあんばい。僧云く師の頭落ちぬと。德山低頭して方丈室に歸る六十六則の評にありたり。又巖頭、僧に問ふ六則。什麼の處よりか來る。僧云く西京より來る。巖頭云く黃巢過ぎて後曾て劒を收得するや否や。僧云く收得す。巖頭頸を

引いて近前して云く囚。僧云く師の頭落ちぬと。巖頭呵々大笑す則解六十六。這般かゝるの公案都て是れ陷虎の機なり。正に此に類す。恰も是れ藥山他僧を管せず。只識得し破らんが爲に、只管に逼りて將ち去る。雪竇云く、此僧三步は活すと雖も、五步には須く死すべしと。此僧甚だ箭を看ることを解して、便ち身を放つて倒ると雖も、山云く侍者此死漢を拖き出せと、僧便ち走る。雪竇道く、只恐くは三步の外活きざらんことを、當時若し五步の外に跳出せば、天下の人便ち他を奈何んともせじと。作家の相見須らく是れ賓主始終互換して間斷あること無くして、方に自由自在の分あるべし。這の僧當時既に始終すること能はず。所以に雪竇の檢點に遭ふ。後面に亦自ら他自分の語を用ひて頌して云く。

【頌】塵中の塵。君看取せよ　此塵中の塵とは法身佛とも眞如法性とも又は本分上の事とも本來の面目とも稱する主人公であるが此主中の主さへ一箭で以て射止めさへすれば參學の能事了れりであるさあ此主人公は君即ち參學の人。一箭を下す。走ること三步　藥山が箭を見よと云ふた所は一箭を下したもので此際此僧塵となりて倒れ又藥山の云よ自ら實參實究しねばならぬとの意。ふを待つて直下に走り出して活きんとせるを頌す五步に若し活せば。群を成して虎を趁はん　此僧惜いかな三步までは活きて働いたが徹底して活きることを知らなかつたし若し五步以後に於ても十分の働きが有りしならば自ら數。多の麁群を率ゐて虎の如き藥山を追ふたであらうとの意。正眼從來獵人に付す　結局正眼の宗師たる藥山は立派な獵人で人を接する自在なりとの意。雪竇高聲に云く箭を看よと　此れ雪竇老人藥山と同道唱和して自ら第一人となりて座下の學人に箭を看よと云ふ此箭の話は決して昔し話してはない諸人何にと見えるかなと奬勵したもの法身の面

目は諸人の面門に出入して居るでは。なかいそれが見えぬのかとの意。

【評唱】「塵中の塵。君看取せよ」と。衲僧家須らく是れ塵中の塵たる底の眼を具し。塵中の塵たる底の頭角あり機關あり作略あるべし。任是れ翼を揷む猛虎、角を戴く大蟲ありとも、也只身を全うして害を遠くることを得んのみ猛虎も尚此塵中の塵を恐るとの文意、底意は盡十方界。只是れ塵中の塵たる本來の面目の支配を受くるとの意　這此僧當時身を放つて便ち倒る。自ら云ふ我は是れ塵と。山云く侍者這の死漢を拖き出せと。僧便ち走る。也甚だ好し。爭奈せん只三歩を走り得ることを。若し五歩にして活せば群を成して虎を趂はん。雪竇云く、只恐くは五歩せば須く死すべしと。當時若し五歩の外に跳得し出でゝ活きん時。便ち能く群を成し去つて虎を趂はん。其塵中の塵の角の利なること鎗の如し。虎も見て亦之畏れて走る。塵は鹿中の王。常に群鹿を引いて虎を趂ふて別山に入らしむ。雪竇後面次に藥山に亦當機臨機應變出身の處あることを頌して、「正眼從來獵人に付す」と。これ藥山射を能くすることと獵人の如く、其僧は塵の如しと云ふの。雪竇是の時、因に上堂して此語を擧示して、束ねて一團の話となして、高聲に一句を道ふて云く。箭を看よと、坐者立者一時に起つことを得ざりき。

第八十二則　大龍の堅固法身

【垂示】竿頭の絲線、具眼は方に知る。格外の機、作者家作方に辨ず　主客相對する時の一挨一拶に於て一方が他を勘檢し釣らんとするも具眼の者は忽ちに其底意を勘破す又普通の格式を超へたる。且く道へ、作麼生何か是れ竿頭の絲線。格外の機用を以て臨むとも作家の漢ならば直下にそれを辨別す機なる。試みに擧す看よ。

【本則】擧す、僧あり大龍大龍山の智漢禪師白兆の弟子逢磨十四世の法孫に問ふ、色身肉身は敗壞す。如何なるか是れ堅固の法身。龍云く、山花開いて錦に似たり。澗水湛へて藍の如し評唱及び頌に就いて其底意を見よ

【評唱】此事若し言語上に向て覓めば、一に棒を掉つて月を打つが如し。且得沒交渉どうして分るもの の意。古人首山分明に道ふ。親切契當を得んと欲つせば、問を將ち來つて問ふこと莫れ。何が故ぞ、問は答處に在り。答は問處に在りと答は問端に其答處に執して旨を失ふなとの意。此僧一擔の莽鹵を擔ふて一擔の鶻突に換へて問處兩端に落ちて色身の別に法身を認め幻化の空身即法身なることを知らないとの意、箇の問端を致す。已敗缺少なからず。若し是れ大龍にあらずんば、爭でか蓋天蓋地なることを得ん。他恁麼に問ふ。大龍恁麼に答たふ。これ一合相にして更に一絲毫頭をも移易せず本分の一相無相の支境を以て本位を動ぜずして答へ了れりとの意なり。一に兎を見て鷹を放ち、

孔を看て楔を着くるに似たり。三乗十二分教佛一代の說法の分科の名目還つて這箇かゝの時節ありや直截けんの處なり。也妨げず奇特なることを、只是の言語答語無味にして人の口を杜塞す。是故に道ふ。一片の白雲谷口に横ふ。幾多の歸鳥夜巢に迷ふと。有者は道ふ邪解を擧ぐ。只是れ口に信せて答へ將ち去ると。若し恁麼に會せば盡く是れ胡種族佛種族の意を滅するの漢ならん。殊に知らず、古人の一機心未だ動かざる之を機と云ふ一境已に客觀に表した手段には、枷を敲き鏁を打破す。一句一言皆是れ渾金璞玉なることを鍛錬を假らざる純金琢磨を歴ざる。珠玉の言句である。若是れ禪僧の眼腦ならば、有時は把住し有時は放行す。照用同時にして、人境を俱に奪ひ。雙收雙放にして時に臨んで通變す。若し大用大機なくんば、爭でか恁麼へのやうに天を籠め地を罩ることを解せん。大に明鏡の臺に當つて胡來れば胡現じ漢來れば漢現ずるに似たり。此公案花藥欄の話二十九則にあり一般なり。然も意却て同じからず。這の僧の問處明かならず色身と法身とを兩般と。なす故に明無しと云ふ大龍の答處恰合なり。來問の機を打破して直に本分を呈露するが故に。見ずや僧あり雲門に問ふ。樹凋み葉落つる時如何。門云く體露金風と二十七則。此れ之を箭鋒相拄ふと謂ふ僧の問處具眼の故に答も亦端的にして相應す。這の僧大龍に問ふ。色身敗壞す如何なるか是れ堅固法身。大龍云く、山花開いて錦に似たり、澗水湛へて藍の如しと。一へに君は西秦に向ひ、我は東魯に之往くが如し此れ大龍は問端に拘らず直に本分を以て答ふ

との意。他僧既に恁麼に行く、我大龍は却て不恁麼に行く前と同意。れ他の雲門の答處と一倍相對して相返く。那箇は雲門の答話は恁麼に行く故に却て見易し。這箇大龍の答へは却て不恁麼問處に順ずに行く。故に却て見難し。大龍妨げず三寸の舌甚だ密なり。雪竇の頌に云く。

【頌】問曾て知らず。答還つて不會此僧の問端色身即法身なることを知らず法身を以て一物珍重の思ひなして問ふた而して其答は言語同斷心行處滅の本地の風光より不會の當體を提げて答へたもの。月冷かに風高し、古巖寒檜此れ答處の本地の風光を頌し來たもの。笑ふに堪へたり路に逢道の人に逢はゞ語默を將て對せずと此れは香嚴の志閑禪師が譚道頌中に路に逢道の人に遭へば語ることも默することも共に出來ないと云ふたが今大龍の見地より見れば其樣なことは笑ふべきことだと揚げたもの。手に白玉鞭を把て、驪珠盡く擊碎す色身の外に堅固な法身を認むる妄想を大龍はかの一句の。擊碎せずんば。瑕類を增さん若し一物珍重の兩般の會を破らざれば却て白玉鞭にて擊破したのである法身を驪珠に喩へたもの。國に憲章あり、三千條の罪若し師家たるものがかゝ法律があること故必らず一時に三千條の罪に問はれんとの意

【評唱】雪竇頌し得て最も工夫あり。前來第二十七則に雲門の話を頌するに、却て云く。問ひ既に宗あり、答も亦同じき收と。這箇本則の頌には却て不麼麼雲門の話と同じからず故に。却て云く。「問ひ曾て知らず。答還つて不會」と。これ大龍の答處傍瞥傍邊の事を以て其事を明すを云ふにして直に是れ奇特なり。分明に是れ誰か恁麼に問ふ此僧が問ふたのでは。これ未だ問はざる已前に、早く敗缺を洩れ了れり。他大龍の答處俯して

能く恰好なり。機宜に應じて道ふ。山花開いて錦に似たり、澗水湛へて藍の如しと（此れ色身と法身と東れて本分上に歸した所を恰好と云ひ機宜に應ぜりと云ふたものである）。爾諸人如今作麼生か大龍の意を會せん。答處傍瞥にして直に是れ奇特なり。所以に雪竇頌出して人をして月冷かに風高く、更に古巖寒檜に撞着すと道ふことを知らしむ。且く道へ他の意作麼生か會せん。雪竇也他の人の道理を作さんことを怕れて、却て云く、「笑ふに堪へたり。路に達道の人に逢ふて、語默を將て對せざることを」と。此事且く是れ見聞覺知にあらず。亦思慮分別にあらず。所以に云く的々兼帶なく（一切萬法凡て兼帶せず自々皆獨露獨尊の狀態にして更に他の按排に係らざる處言語思慮の及ぶべきにあらずとの意。）路に達道の人に逢ふて、語默を將て對せず（と云ふ句は。）此は是れ香嚴智閑禪師の頌なり。獨運何ぞ依賴せん一法獨立なり。これを雪竇引いて用ひたるなり。見ずや僧あり雲門に問ふ。語默を以て對せずと、未審什麼を以てか對せん。州云く漆器を呈すと（外面は此僧を抑へ裏面は本分を現ばしたるもの。）這箇（此の香嚴と趙州の話を指す）便ち適來の話（本則の話）の大に同じ。爾が情塵意想に落ちず（汝の思慮の及ばざる處なりとの意）一に什麼（何にか似たる。）喩へば手に白玉の鞭を把て、驪珠盡く擊碎す（如し。）是の故に祖令（祖師の正令）の當に行じて十方を坐斷す。此は是れ劍刃上の事なり（智劍一揮して一法を立せず即ち他の出頭を許さず。）須らく是れ恁麼（斯の如きの）作略あるべし。若し不恁麼ならば總て從上（從來）の諸聖に辜負せん。這裏（擊碎の處）に到て要ず些子の事なくして自ら好處なり

かく一法を立せざる處に。自然に好風光ありとなす）便ち是れ向上の人の行履安心の處なり。既に擊碎せずんば必ず瑕類を增さん」と。便ち漏逗（破れ目など出來て用ひ能はざるとの意）を見んなり（畢竟じて是れ作麼生（何か是なることを得ん。「國に憲章あり。三千條の罪」と。五刑の屬ひ三千。不孝より大なるは莫し（不孝の罪を最大とす）。憲は是れ法。章は是れ條。三千條の罪一時に犯し了らん。何んが故そ此の如くなる。只本分事を以て人を接せざるが爲なり（師家の人を接するには本分の事を以てすべきもので若し其祖令を犯せば其罪尤も大なりとの意）。若し是れ大龍ならば必らず恁麼ならざることはせない

第八十三則　古佛と露柱と相交はる

【本則】舉す、雲門衆に示して云く。古佛と露柱（機）と相交はる。是れ第幾機ぞ。自ら代つて云く、南山に雲を起し。北山に雨を下す。（機は心理上の動機を云ふたもの吾人の精神の働きには色々と階段のあるもので花に對して美情を覺え悲哀を懷ける心の前には月亦悲し凡て吾等の外境に對し思慮分別して樣々に名を付するのであるが今雲門は機外の消息を通じたものであるから機の邊際には落ちないのであるそこの樣子を暫く古佛と面前の柱と相對して感應道交する有樣は精神の働きの何番目の機に當るかと問はれたのである雲門下九十餘員の弟子ありと雖も流石に答ふるものは一人もなかつた故に自ら代つて云く南山に雲を起し北山に雨下ると南北の山の交渉を現はされた是れ語異なるも意は古佛云云の意と同じ蓋し暫く情解すれば一法と諸法との交渉を示されたものとしたものか即ち無心にして任運自然に相應すれば事として可ならざるはなく萬事我指呼に歸すとの意

【評唱】雲門大師の下に八十餘員の善知識を出す。遷化死去の後十七載にして、塔を開いて之を觀れば、儼然として故の如し死して十七年を經るも其死體生るが如し。他雲門の見地識明白にして。機境支機の境に臨む處迅速なり。大凡垂語訓誡の語別語代語共に直下に孤峻なり。只此公案本は殊則に擊石火の如く閃電光に似たり。直に是れ神出で鬼沒すると云ふ。慶藏主云く、一大藏教還つて這般かへの說話ありやと。如今の人多く情解の上に向て活計を作して云く。佛は是れ三界欲界色界無色界の導師、四生濕生卵生體生化生の四種の生類即ち一切の生物を云ふの慈父なり。既に是れ古佛、什麼としてか却て露柱と相交はる。若し恁麼かくの如くに會せば、卒に模索不着ならん途に知るを。有者は喚んで無中に唱出すと作す。ぼんやりと云ふたもの。殊に知らず宗師家の說話は、意識を絕し情量を絕し、生死を絕し法塵を絕して、正位の第一機の支域に入つて更に一法を存せざることを。されば爾纔に道理計較を作して、便ち脚を纏ひ手を纏はん。且く道へ他の古人雲門意作麼生如何。但只心境をして一如合體ならしむれば、好惡是非も他其人を撼動することを得じ。此に於便ち有と說くも也得たり。無も也得たり。機用あるも也得たり。機なきも也得たり。這裏こに到て心境二者となりて對立せは拍拍是れ令なり一拍一唱皆な是れ本分の露現なり正令なり。五祖法演先師道く、大小の雲門膽小なり。若し是れ山僧ならば、只他に向て道ん第八機と。他雲門道ふ。古佛と露柱と相交る

是第幾機ぞと。一時の間且く目前に向て包裹す第一機を用ひて目前の境を包容含裹したもとの意僧問ふ未審意旨如何古佛と露柱と交渉すると云。門云く一條の條、三十文に買ふと。他雲門乾坤を定むる底の眼あり。既に人の會得するふ意如何無し。後來自ら代つて云く、南山に雲を起し北山に雨を下すと。且く後學の爲に箇の入路を通す。後學の爲めに一線道を通じ。て註解を與へたものとの意。所以に雪竇他雲門の乾坤を定むる處を拈じて、人をして見せしむ。若し纔に計較を犯して分別を以て。箇の鋒鋩を露さば義理の途を辿らば。則ち當面直に蹉過せんら誤まる。只他の雲門の宗旨に原いて、他雲の峻機を明めんことを要す。所以に頌に云く。

【頌】南山の雲。北山の雨。四七、二三面たり相覩る南山に雲起れば北山に雨ふる此の無心に相ひ應ずるの大機大用は印度の四七、二十八代の祖師並に支那の二三か六の初祖達磨より六祖曹溪大師に至る六代の祖師達が代々面のあたり相承し來りたる正。法である、否な祖々の面々相承と南山の雲北山の雨と古佛と露柱との相見は別ではないとの意。新羅朝鮮國裏に曾て上堂す。大唐支那國裏に未だ鼓を打たず新羅と大唐とは遠く離れて居ると思ふ遠近の思ひをしてはいけん何となれば法界平等の姿なればなり故に新羅に上堂して法を說くに其報告として大唐に鼓を打つと云へるのであるとの底意なるも雪竇文句を巧にしてかく云ふたもの即ち文意は遠いから關せずとの意なり蓋し此に至りては遠い近い關不關の言語の及ばざる心行處滅の意を示さんとしたもの。苦中の樂。樂中の苦。誰か道ふ黃金糞土の如しと明中に暗あり暗中に明ありで色即是空空即是色なり今露柱と古佛との交はりは任運無作の妙用とすれば一點の情塵なければ强いて黃金を糞土とする必要もなからう黃金は黃金でよし糞土は糞土で其用を全うするのであると。の意即ち無心にして相應じて物々其眞を失はずとの意末句は張耳と陳餘との故事なり評中に委し。

【評唱】「南山の雲。北山の雨」と。これ雪竇帽子を買ふに先頭を相し。風を看て帆を使ふやり方。

劒刃上、意慮に涉らざる處の意に向て爾が爲に箇の註脚を下す。直に得たり四七、二三面り相覩ることを。これ也錯まつて會すること莫れ。元來此れ只古佛と露柱と相交はる。是れ第幾機ぞといふことを頌し了れり。更に後面次に路を劈開し、葛藤句を打作也して他門の意に見えさしめんとして、「新羅國裏に曾て上堂す。大唐國裏に未だ鼓を打たず」と。かく雪竇は電轉し星飛ぶの處に向つて。便ち道ふ。苦中の樂、樂中の苦」と。これ雪竇七珍八寶を堆一堆して、這裏心境一如の中に在き了れるに似たり。所以に末後に這の一句子あり。云く「誰か道ふ黃金糞土の如し」と。此一句は是れ禪月大師の行路難の詩なり。雪竇引き來つて用ひたるもの。禪月云く、「山高く海深くして人測らず。古往今來轉た靑碧。淺近輕浮與に交はることを莫れ。地卑うして只荊棘を生ずることを解す。誰か道ふ黃金糞土の如しと。張耳、陳養此二人初めは共に刎頸の交りありたるも後權力を爭ふて互に豺狼の如し消息を斷ず。行路難行路難君自看よ」と。

第八十四則　維摩の不二法門

【垂示】是と道ふも是の是とすべきなく、非と言ふも非の非とすべきなし。是非已に去つて

得失兩つながら忘ず。已にかく得失を亡して分別なければ宇宙萬象は如々として天眞爛漫に現れ來るが故に淨躶々赤灑々たり。且く道へ、面前背後是れ箇の什麼ものぞ然し得失を忘じたからとて天は高く地は低く山高く川長しで元來自分の性質は失はない客觀は前後に羅列して歷々分明として昧まされない前步は後步と別にして同一とされないとの意。即ち或は箇の衲僧作家出で來つて道はん。面前は是れ佛殿三門。背後は寢堂方丈室と。且く道へ此人還つて眼を具すや也無しや。若し此人を辨得すれば、爾に許す古人を見來ると本則の維摩老人こそ即ち是れと本則を呼び出したもの。

【本則】擧す、維摩詰は梵語譯して淨名又文殊師利に云ふ梵語譯して妙吉祥と云ひ大智慧の代表者問ふ。何等か是れ菩薩不二に入るの門此れは維摩經中の不二法門品と云ふのを題目とし來つのである此れは淨名居士が一日病床にある時佛陀は數多の大弟子に病氣にやらせようとせられしに何れも見舞の使者たるを辭せしかば遂に大智慧の文殊菩薩が使命を以て赴くことゝなつた故此に此の大問答となつたのである。文殊曰く我が意の如くんば、一切の法に於て、無言無說、無示無識知識の知る處にあらざるが故にに示すべきなし又人に敎へらるべきにあらず言說を絕し心行全く滅するものなり即ち宇宙の現象千差にして一にあらず而も其本體界の消息は一味平等にして二三等と云ふことを得ず即ち二にして一、一にして二と云ふ有樣で此れが謂ゆる不二の法門である此れを悟るのが不二の門に入ると云ふものだとの意。是に於て文殊師利維摩詰に問ふ。我等各自に說き已る。仁者當に說くべし。何等か是れ菩薩入不二の法門文殊を始めとして三十二名の菩薩達が各自に不二の法門に入ることに對して所見を述べ了りたれば更に居士の所見を聞かまほしと文殊が代表となりて問ふたのである。此れに對して居士一字をも說かず無言のまゝで居たのであるが此れ即ち默雷の如しで無言の當所是れ入不二法門を說き了れりとの意を示す　雪竇云く。維摩什麼

とか道ひし。復云く勘破了と維摩の無言の樣子此の雪竇には。ちやんと分かつて居るぞとの意

【評唱】維摩詰諸大菩薩をして、各々不二の法門を說かしむ。時に三十二の菩薩皆二見の有爲生滅の法無爲不生滅の法眞諦俗諦の二諦を以て、合して一見と爲して不二の法門と爲す。後に文殊に問ふ。文殊云く我が意の如くんば、一切の法に於て、無言無說、無示無識なり。諸〳〵の問答を離る。是を不二の法門に入ると爲すと。蓋し三十二人菩薩の著は言語を以て言を遣るが爲めに種々に言詮を以て其消息を通ぜんとしたる。文殊は無言を以て言を遣て、一時に掃蕩言詮を拂ひ去りて總て言語を要せず。是れを不二の法門に入ると爲すと。殊に知らず靈龜尾を曳きて迹を拂へば又更に痕を成すことを文殊は無言無說と云ふて言說を拂へりと思ふも其無言無說等と云ふ處が更に第二の言。又は掃箒の塵を拂かが如くに相似たり。塵去ると雖も箒の迹猶存す。迹を存するにあらずやとの意末後結局依然として蹤跡を餘す。是に於て文殊却て維摩詰に問ふて云く、我等各自に說き已る、仁者當に說くべし。何等か是れ菩薩の不二の法門に入るとなすと。維摩詰默然たり。若し是れ活漢ならば、終に死水裏に去て浸却せじ直に維摩の玄旨を知つて一點の跡を認めざるべしとの意。若し恁麼の見解を作さば死水裡に陷る樣なる見解ならば。狂狗の塊を逐ふに似たらん。雪竇亦良久と說かず。亦默然據坐と說かず。只急々の處維摩の問に髮を容れずして那邊の消息即ち本分事を通じ來た處に去つて云く、維摩什麼とか道ひしと。然し雪竇恁麼かくのに道ふが如

くんば、還つて維摩を見るや眞實維摩と相見して其堂奧を窺ひ得たものと言へるか。夢にも未だ見ざること在らん此は暫く雪竇を抑へて宗乘を高尙にし來つたもの。維摩は乃ち過去の古佛なり嘉祥大師云く維摩は金粟如來の後身なりと亦眷屬家族あり妻を金姬と云ひ子を善思と云ひ女を月上と云ふ。佛釋迦の宣化敎化を助く。不可思議の辨才を具し、不可思議の境界あり、不可思議の神通妙用あり。されば方丈の室中に於て、三萬二千の獅子の寶座を容て、八萬の大衆に與ふるに亦寬狹ならず。且く道へ、是れ什麼何の道理ぞ。喚んで神通妙用と作し得んや否や。且く錯つて會することを莫れ。若し是れ不二の法門ならば、唯維摩等と同得同證して。方に乃ち相共に證知せん。獨り文殊のみ與に酬對すべきことあらんや維摩に相見し應對するもの。豈に啻に文殊のみならんや。然も恁麼かくのなりと雖も、雪竇の檢責を免れ得んや也なしや本則の末句は是れ雪竇の檢責なるが此檢責は文殊も亦免れざるべしとの意。雪竇也這の二人維摩文殊と相見せんことを要して云く、維摩什麼とか道ひしと。又云く勘破了と。爾具く道へ、是れ什麼の處か是れ勘破の處只這の些子雪竇底意の得失に拘らず、是非に落ちず、萬仞懸崖の如し。向上に性命を捨て得て、跳り得て過ぎ去らば、爾に許す親しく維摩を見ることを。如若し捨て得ざれば大に羝羊の藩に觸るゝに似たらん身體自由を得ざるを云ふ。雪竇故然舊よりとして是れ性命を捨得する底の人。所以に頭出して云く。

【頌】 咄這の維摩老、生を悲しんで空しく懊惱す　雪竇先づ咄の一字を以て維摩の權實の機用を一時に截斷して月白く風清からしめたもの而して此維摩居士は衆生に病あり是故に我病を示す衆生若し煩惱なくば我れ亦病滅し去らんと云はれて衆生を悲愍して權病即ち假りの病を示さるゝのであるが元來法の本體より見れば皆解脫の境界で病むべき衆生もなければ救ふべき佛もなし迷悟得失は皆二見對立より起る影豪幻想である然るに病あることを示すなどゝは是れ。咄せらるゝ罪狀である人々分上豐かに具はる何ぞ他の安排を要せんとの意。疾に毘耶離國に臥す。全身太だ枯槁す。七佛の祖師來る　文殊は過去七佛の師と稱さる今其人。一室且く頻りに掃ふ。不二の門を請問す　維摩が維摩の病氣見舞に來たのである　當時便ち靠倒す　一室とは方丈の室なり一丈四方の小室にて今に禪家に方丈となりて傳はれり四疊半の茶室の如き之れに形どりしものなり今文殊が來ると云ふので維摩は方丈の室を掃ふて接待をするのであるが此は維摩の一切諸法を空靈して一點の塵をも存せざる境界を表したもの此へ文殊等を請じて不二の法門を問ふたのである時に文殊等皆各自の意見を述べて後に維摩の意見を聞かんと維摩に靠れかゝりて維摩を殺倒せんとせし有樣を當時便ち靠倒すと。頌す。靠倒せず。金毛の獅子討ぬるに處なし　然るに維摩は中々そんなことでは倒れない金毛の獅子である からだと美む其默然として一言をも答へぬ處默雷の如しで窺ふことを得ないとの意。

【評唱】 雪竇道く、「咄這の維摩老」と、頭上劈に先づ一咄を下して什麼をか作す。これ金剛王寶劒を以て當頭直下に直截したるなり　こは圜悟の自問自答これで其意雪竇が先づ第一に。須らく朝に三千棒を打ち、暮に八百棒を打ちて始めて得べしこは圜悟が更に雪竇の咄破の仕方が手弱いことを云ふたので宜し。維摩が維摩の第二第三に落草せるを咄したものだとの意。梵語には維摩詰と云ふ。此支那譯には無垢稱と云ひ、亦淨名といふ。乃ち過去の金粟如來なり　此事思性三。味經に出づ見ずや僧あり雲居の簡和尚に問ふ。既に是れ金粟如來。什麼してか却て釋迦如來の會中座に

於て法を聽くや。簡云く、他維摩人我人我の執着を爭はず。大解脫の人にして、成佛、不成佛に拘らず これ大解脫の門には成佛と。云ふも早く是れ閑事なり　若し他修行して務めて佛道を成就すと道はゞ、轉た沒交渉誤まれり。見ずや圓覺經に云く、輪廻情解の心を以て輪廻の見地を生ず。如來の大寂滅界に入らんとせば、終に至ること能はずと。永嘉大師云く、或は是或は非。人識らず逆行順行天も測ること莫しと是非を亡し迷悟を超えたるの人は順逆自由にして佛祖も窺ふことを得ずとの意　若し順行すれば則ち佛果の位中に趣き、若し逆行すれば則ち衆生の境界に入ると衆生を救ふ爲めに曲て人間界乃至地獄界に生る。壽延禪師道く、直饒儞磨鍊して、這の田地に安心の地到ることを得るとも、亦未だ汝の意に順ずべからざること在らん　最早やこゝならばと云ふ處に達しても尙自分が思ふまゝに行動するは難し行ふ處皆法則となると云ふ譯には行かぬこれ悟の上。即ち直に無漏の羅殺一纒の微少なる無明をも斷盡したにも尙大悟あればなり　聖身を證せんことを待つて、始て逆行順行すべしと始て順逆の間に入りて自由を得脚下黃金地とならんとの意。所以に雪竇道く、「生生衆生を悲んで空しく懊惱す」と大悟徹底の人故逆行して衆生界に入りて濟度すと。維摩經に云く、衆生病あるが爲に我も亦病ありと。懊惱は則ち悲絕なり。「疾に毘耶離城に臥す」とは、維摩疾を毘耶離城に示すとなり。唐高宗の時。王玄策西域に使して、其居維摩の居りし所を過ぎ、遂に手板を以て縱橫に其室を量りしに、十笏を得たり　當時の人劍の代りに笏を帶びしが故に其笏で計りしに四方共に十笏なり約一丈なり　因つて其室方丈と名く。全身太だ枯槁す」とは、因に　佛陁此事を普曜經に因に說き玉へりとの意　身の病を以て廣く爲に說

法して云く。是の身は無常無強、無力無堅にして、速朽の法物なり、信據すべからず。苦を爲し惱みを爲す、衆病の集まる所。乃至五陰十界十二入の共に合成する所なりとの意を頌したもの、此身は色受想行識の五陰が集まりて出さて居るもの十八界十二處は。「七佛の祖師來る」と、文殊は是れ過去七佛の祖師なり。世尊釋迦の五陰の開合の差のみ同一のものなり

旨を承けて彼に往いて疾を問ふ。「一室且く頻りに掃ふ」と。これ方丈の內皆所有ものを除去して唯一榻床を留めて、文殊の至るを等て、不二の法門を請ひ問はんとするなり。所以に雪竇道く、「不二門を請問す、當時便ち靠倒す」と。維摩口匾擔に似たり言はんとして言はざる姿。如今の禪和子禪僧便ち道ふ。無語是れ靠倒の處と。且く錯つて定盤星を認むること莫れ秤の目盛りを盤星と云ふ物の輕重は其目盛りにはない秤皿の上にある物の方にある其れを知らんで何時秤の目盛ばかりな。雪竇萬仞懸崖の上に拶到して心思の及ばざる處に到りて、却て見て居て一方が御留守になつて居るから分らんのであるとの意。

云「靠倒せず」と。一手は擡げ一手は搦ゆ前に文殊の爲めに靠倒せられんと云ひ。他雪竇這般かゝの手脚腕ありて直に用ひ得て玲瓏たり言外の旨を頌出するを得たり。此は前面本則の末句に拈じたる、維摩什麼とか道ひしと云ふことを頌す。「金毛の獅子討ぬるに處なし」と、但當時のみにあらず。即今也恁麼なりかくの如くに。還つて維摩老を見るや否や。盡く山河草木叢林皆變じて金毛の獅子と作るとも、討るに處なし。

也模索し着得ざらん。

第八十五則　桐峰庵主の大蟲

【垂示】世界を把定して自己の掌中に纖毫を漏さず。世界を收めて盡大地の人。鋒を亡じ舌を結ぶなんとも手なければどう言ふて。是れ衲僧作家の正令」。頂門に光を放ちて、四天下を照破するは、是れ衲僧の金見ることも出來ぬ

剛の眼睛なり」。又鐵を點じて金と成し。金を點じて鐵と成す。忽ち擒へ忽ち縱す。是れ衲僧の柱杖子禪僧の携へて居る七尺の棒」。更に天下の人の舌頭を坐斷して天下の人をして一言も發するを得ざらしむ。又直に氣を出す處なく、倒退三千里なることを得る。是れ衲僧の氣宇象なり」。且く道へ、總に不恁麼上述の樣でない其れ等の手段とは全く反對の場合なる時。畢竟是れ箇の什麼何人ぞ、試みに擧す看よ。

【本則】擧す、僧あり。桐峰庵主臨濟大師の弟子の處に到て便ち問ふ。這裏こゝら近邊では忽ち大蟲に逢はん時又作麼生どうしたものか此は庵主深山に庵を結んで居るのであるから何時如何なる處で大蟲に逢ばんとも知れぬと云ふ問ひであるが此れは借事問又は勘驗問であつて此僧中々の作家であることが前後の問答にて分る大蟲とは何ぞ是れ宇宙の本體即ち本來の面目を指す。庵主便ち虎聲を作す。僧便ち怕るゝ勢を作す。庵主呵々大笑す。

僧云く這の老賊。庵主云く老僧を奈何ともせじ。僧休し去る。雪竇云く、是なることは則ち是なり。兩箇の惡賊、只耳を掩ふて鈴を偷むことを解すと これ雪竇の判定である蓋し此問答頭ありて尾なし互に陷穽を設けて他を陷ぬれんとし

だ結局それ何にの役にも立たぬ互ひに弓なく形をした丈ですんで居るではないかとの意。

【評唱】 大雄宗派下に臨濟の下にと云ふ意なれど臨濟は百丈禪師(大雄山に住す)の弟子なるが故に大雄宗と云ふたもの四庵主を出す。大梅、白雲、虎溪桐峰なり。看よ他の兩人此僧相峰と恁麼こんに眼親しく手辨することを。且く道へ、諸訛此問答の腎を下し難き要處は什麼の處にか在る。古人の一機一境一言一句。然も出在手段を用ふること時に臨むと雖も、若し是れ眼目周正なれば、自然に活潑々なり。雪竇拈じて人をして邪正を識り得失を辨ぜしむ。然も此の如くなりと雖も、他の達人分上に在ては、得失に處すし雖も却て得失なし本則の如き言句作略得失ありと雖ども其實詣の處に到つては更に得失なし。若し得失を以て他の古人を見ば、則ち沒交渉涉遠して遠し。如今の人須らく是れ各々窮めて、得失なき處に到つて、然して後に得失を以て人を辨ずべし。若し一向に言句を揀擇する處に去つて心を用ひば、又幾時に到つてか了ずることを得去らん。見ずや雲門大師道く、「行脚修の禪僧の漢。只空しく遊州獵縣すること莫れ。只閑言語を提搦することを得んと欲して、老和尚の口動ずるを待つて、便ち禪を問ひ道を問ひ、向上向下如何んぞ如何んと大卷大きなに手帳に抄寫し將ち去つて、肚皮裏に壓向して卜度し、到る處の火爐邊に三箇五箇頭を聚め、擧つて口喃々地多言の貌にして、便ち道ふ。這箇は手帳中の語句を指す是れ公才の語は公道の上才、或は公侯官家の語。這箇は是れ身に就いて打出する

の語人を釣り出すの意。這箇は是事上に道ふ底の語事相に付いて云ふ語喩へば大蟲を問へば虎聲をなすの類。這箇は是れ體裏の語と屋裏を體究するの語。儞が屋裏の老爺父母なり共に自家の主人翁を體す。飯を噇却し了つて、只管らに夢を說いて便はち道ふ。我れ佛法を會し了れりと。將に知んぬ恁麼の行脚修行は、驢年にも何年たが休歇し去ることを得んやと歸家穩座の期なけん」。古人暫時の間の拈弄、豈に勝負得失是非等の見あらんや。桐峰、臨濟に見ゆ。其時桐峰は深山に在つて庵を卓つ。這僧彼の中庵中に到つて遂に問ふ。這裏こゝ、忽ちに大蟲に逢はん時、又作麼生どうした。峰便ち虎聲を作す。也好し事虎に就いて便ち行ふもの。這僧也錯を將て錯に就くことを會して、便ち怕るゝ勢を作す。庵主呵々大笑す。僧云く這の老賊。峰云く老僧を奈何せんと。是なることは則ち是なるも、二り俱に了せざることを大蟲の活機用全。千古の下、人の點檢に遭ふ。所以に雪竇道く、是は則ち是。兩箇の惡賊只耳を掩ふて鈴を偷むことを解すと、即ち他の二人皆是れ賊なりと雖も、機に當つて却つて用ひず。所以に耳を掩ふて鈴を偷むもの。此二老百萬の軍陣を排排列して、却て只掃箒を鬪はしむるが如し。若し此事本分上の事を論せば、須らく是れ人を殺すに眼を貶せざる底の手脚あるべし。若し一向に殺して活せずんば人の怪笑に遭はんことを免れず、頌に云く。

【頌】之を見て取らざれば、之を思こと千里。好箇の斑々。爪牙未だ備ず　以上四句にて本則の問答を頌し了る一二の句は天の與ふる所を取らざれば却て天の禍を受くと云ふのと同意で此僧が怕るゝ勢ひをした時に桐峰は一棒を與へて咬み殺してしまはなければ即ち把住し來られば開放したまゝでしまりがつかんし又桐峰が老僧を如何せんと云ふた時に此僧に休し去つたのは矢張り轉身の處がなく開放したまゝでおさまりが付いていないことを貶したのであるされば此兩人は共に好箇の毛色をなして斑々と立派の虎の紋彩はありながら惜むべきことには爪牙を欠いて居るから折角の問答も何等の効力なく相思ふて千里。君見ずや、大雄山下に忽ち相逢ふ。落々廣大雄威の貌たる聲光皆地に振ふ此れは大雄山の隔があるのである

の主人たる百丈禪師と其弟子黄檗との問答の虎頭に騎つて虎尾を收めたる樣子を擧げて本則の問答との相違せることを頌したもの即ち此百丈と黄檗との兩箇の虎の戰ひは實に其聲と云ひ其毛彩と云ひ光澤と云ひ四方を拂ふの氣慨も見える。

大丈夫見るや也なしや、虎尾を收め虎鬚を捋るを　此れは又潙山と仰山との問答の始終を全うするを擧げて比したもの。

【評唱】「之を見て取らざれば、之を思ふこと千里」と、こは正しく嶮處に當て都て使ふこと能はずとの意（嶮處とは機を用ふる處を云ふ即ち全體の意は對手の機用に乘じて自己の本分を呈し來ること能はずとの意）。他主の老僧を奈何せんと道ふを等待て、好し本分の草料を與ふるに當時此僧老僧云々と云ひし言下に於て一喝を下して本分向上の活作用ありしならば首尾全うして好かりしに。當時若し此の手脚手段を下し得ば、他庵主須らく後語あるべし庵主又更に一轉語ありしならん。然るに二人共にそうでなくして二人只放放行つことのみを解して、收把住むることを解せず。即ち之を見て取らずんば早く是れ白雲萬里とな。更に什麼の之を思こと千里とか說んや豈に啻に千里の隔り「好箇斑々、爪牙未だ備らず」と。是なることは則是頌に言ふ通りなれど　なるも、箇の大蟲也牙を藏し爪を伏することを解す。爭奈せん人を咬むことを解せざることを　頌の通りでもよいが彼

等二人に爪牙を備へざるにはあらず只人を咬むの活作用なきなりと圜悟の批評なり。「君見ずや大雄山下に忽ち相逢ふことを。聲光皆地に振ふ」と。こは百丈一日黄檗に問ふて曰く、什麼の處よりか來る。檗云く山下に菌子を採り來る。丈云く還つて大蟲を見るやなしや。檗便ち虎聲を作す。丈膝下に於て斧を取て斫る勢を作す。檗約住把住して便ち掌す。丈晩に至つて上堂して云く、大雄山下に一の虎あり、汝等諸人出入に切に須らく好く看るべし。老僧今日親しく一口に遭ふと。後來潙山仰山に問ふ。黄檗の虎の話作麼生如何。仰云く和尚の尊意如何。潙山云く、百丈當時合に一斧に斫り殺すべきに、什麼に因てか此の如くなるに到ると云ふたのか却て一口に遭ふ。仰山云く然らず。潙山云く子又作麼生。仰山云く唯虎頭に騎るのみにあらず、亦虎尾を收むることを解す。潙山云く寂子仰山の名は甚だ嶮崖の句　意路不到の句慧寂なれば　との意稱讃の語ありと。雪竇引用して前面の公案本則を明せしなり。聲光落々として大地に振ふと云ふ。這の些子此の聲光轉變自在にして句中に出身の路あらんことを要す。「大丈夫見るや也無しや」と、還つて見るや否や。「虎尾を收め虎鬚を捋づ」と、也須らく是れ本分なるべし。任儞虎尾を收め虎鬚を捋づとも、未だ免れず一時に鼻孔を穿却せられんことを　此は圜悟が他の出頭を許さゞるを云ふたもの

第八十六則　雲門の「光明の在るあり」

【垂示】　世界を把定して絲毫をも漏さず、衆流を截斷して涓滴を存せず　師家が自己の掌裡に宇宙の萬象を把住して掌握すれば毛一條と雖ども漏洩はしない否なかゝる有形のものゝみなす無形の精神現象たる一切の心的作用の八萬四千の煩惱とも云はるゝ衆流をも斷絶し盡して一滴の微心をも存立を許さないとの意、むくの如くにして無念無想の不動の境界に安住した時は言詮不及の所なるが故に　口を開けば便ち錯り。擬議分別すれば即ち差ふ。且く道へ、作麼生如何か是れ透關底の眼上述の如き絲毫も漏さず涓滴をも存せないと云ふ樣な少しの隙間もない牢關を縱横に通過する人はどう云ふ具眼の人か必らずかゝる人の言語動作は大光明を放つに違ひない。試みに擧す看よ。

【本則】　擧す、雲門垂語垂誡して云く、人々盡く光明の在るあり。看る時見えず暗昏々。作麼生か是れ諸人の光明。自ら代つて云く、厨庫臺所三門と。又云く好事も無きには如かずと人々日夜見聞覺知して居る厨庫乃至三門が諸人の光明ではないか分別得失の念を忘して見聞し覺知し來る處本來の面目は光明を放つて居るとの文意然かし又其見解に滯てはならぬと云ふので如何なる大光明を放つ色々の手段の好事も畢竟無いのに勝ることはないと一切を盡蕩して沒蹤跡ならしめんとて又云く云々と云ふたもの更に其底意は頌並に評唱に參ずるを要す

【評唱】　雲門室中に垂語して人を接す。儞等諸人脚跟下に各々一段の光明あり。今古に輝騰して迥かに見知を絶す。然も光明なりと雖も、恰も問着せらるゝに到て人に問はれて又會せず、豈に是れ暗昏々地にあらずや。二十年垂示するに都て人の他雲門の意を會するなし。香林後來代語を請

ふ。門云く厨庫三門と。又云く好事も無きには如かずと。雲門尋常の代語は、只一句なり。然るに此には什麼として這裏こゝでは却て兩句なる。前頭の一句厨庫三門儞諸人が爲めに、略一線路を開て儞をして見せしむ。若し是れ箇の漢英靈の漢ならば、聊か擧着するを聞いて剔起して便ち行かん直下に雲門の底意を領し去らん意の。他雲門人の此に滯在せんことを怕れて、又云く好事も無には如かずと。依前として儞が與に掃却す。如今の人纔かに光明を擧着するを聞いて、便ち去て瞠眼盲目にして云く、那裏あは是れ厨庫、那裏こは是れ三門と。且得沒交涉適當せざるの意なり。所以に道ふ鉤頭の意を雲門の識取せよ。定盤星を認むること莫れと語句上にありと認むることなかれとの意。此事眼上識眼にあらず。亦境の上萬境にあらず。須らく是れ知見を絶し得失を忘れ、淨躰々赤灑々にして、各々當人分上に究取して始めて得べし。雲門云く日裏白日に來往し日裏に人を辨ず。忽然として半夜日月燈光なきに、曾て到る處は則ち故らに是分かり。未だ曾て到らざる處にて、一件の物を取らんに、還て取り得んや否やと。參同契に云く明中に當つて暗あり。暗相を以て觀るとなかれ。暗中に當つて明あり。明相を以て遇ふことなかれと本心の妙光暗に非ず明に非ず遙かに一切の根塵を絶し識知の境にあらざることを知らしめたもの。若し明暗を坐斷せば、且く道へ箇れ什麼ぞ。所以に圓覺經に道ふ、心華發明して十方刹刹土即ち世界の意を照すと。盤山云く光境を照すにあらず。

境亦存するにあらず。元來本體界上に於ては光境俱に忘ず、復是れ何物ぞと。又云く三平の頌此見聞に即して見聞にあらず本體は妙用たる見聞によりて明かなるも見聞の間に。餘の聲色の君に呈すべき無しされば一切の相狀中に向つあらず能く一切の相狀を離れたるものなればなり て本體法性の消息を求むるも遂に得べからず故に君に示すべき聲色の相貌なしと云ふ。箇の中若し了悟せば全く無事、體用何ぞ妨げん分と不分とし體の外に用なく用の外に體なし即ち平等にして差別にして平等の體性なれば見聞に即して見聞にあらざ。但末後の ること明かなりされば時に體を云ひ又時に聲色の用を擧ぐるも自由なりとの意此頌本具の光明を頌したもの

一句雲門の好事も也無きに　本分向上の無作無功動の立脚地に根據して其上に萬事のこ

は如かずと云ひし一句を會得取し了て却て前頭の向上厨庫三門に去つて游戲せよ

とを建立し來らば是れ大。畢竟じて裏頭末句の好事も無きに　人分上の事であるとの意。

無住の本を以て一切の法を立すと　宇宙の本體は無住にして住し無作にして作なりされば吾人は何等の報酬の念なくして世の大業に從事すべきなり故に報賞の念一度起り來れば宇宙絶體界の感

應を絶つに。這裏此無住の住相の中に去つて光影を弄し、精魂を弄することを得ず　光影精魂は共に本體。又無事至るとの意。

の會解を作すことを得ず　されば云ふて無相無住に粘着せば本體界の消息と遠し遠して是れ無住なれど も住して世相此の如くなればなり要は本體のことは言詮思議の及ばざる所なり。古人道く、寧ろ有の見有相の見解を起すこと須彌山多大の意の如くなるべくとも、無の見無相の見解を起すこと芥子許

些少の意の如くなるべからずと寧ろ有見に落つるとも無見即ち空見に落る勿れとの意。二乘の人二乘聲聞の人即ち器局の狹少なる人多く偏に此見空見に墜つ。

雪竇の頌に云く。

【頌】自照孤明を列す。君學人が爲に一線道を通す　人々各自皆自分の光明を以て他の世話にならずして宇宙萬象を照破して解脱界の主人公となつて居る其の支旨を

知らぬから雲門が色々と世話を燒いて血路を開てくれたのである自知自覺して見れば自照孤明なることを知。るのである他の力に賴らざるが故に自照である又其靈光は絶對にして對立を絶するが故に孤明であるとの意。花謝し

て樹に影なし。看る時誰か見ざるの相を離れて居るから明相の思ひなしてはいけぬ即ち花も落ち日も暮れて樹の影も見えなくなつた此れを暗いと思ふのは明暗の情。見不見。倒まに牛に騎つて佛殿に入る此故に明中に暗あり暗

中に明ありて見とか不見とか云ふ樣な二物對立のものでない自己自然の本分は見不見悟不悟迷不迷と云ふが如き二見に渡らない解脱的のものである今雲門は厨庫三門と云はれたが此雪竇は眞黑の牛の脊に後ろ向きに騎つて佛殿裡の暗中に入ると云ふて雲門の頭上を踏んだあんばいである。之れ雪竇は身を沒して沒蹤跡の處を示したもの

【評唱】「自照孤明を列す」と。自家各人脚跟下本此の一段の光明あり。只是れ尋常用ひ得て暗

し。所以に雲門大師爾が興めに、此の光明を羅列して爾が面前に在く置くの意。且く作麼生如何か是

れ諸人の光明。即ち厨庫三門。此は是雲門の孤明を列ぬる處なり。盤山道く心月孤圓にして光萬

象を呑むと此の心元來對待を絶す故に孤と云ふ十方に周徧して缺く。這箇心月便ち是れ眞常獨露なり。然して

後に君が興めに一線を通ず、亦人の厨庫三門の處に着在せんことを怕る。厨庫三門は則ち且く

從却す他に任すとの意。朝花亦謝して樹又影なし。日又落ち月又暗し。盡乾坤大地黑漫々地なり。諸人

還て見るや否や、看る時誰か見ざる。且く道へ是れ誰か見ざる人皆見ること。這裏黑漫々のときに到りて

明中に當つて暗あり。暗中に明あり。皆前後の歩の自ら見るべきが如し即ち前歩は明に後歩は暗とすれば後歩進んで前歩となり前

歩退く時後歩となる相互に進退交謝。雪竇道く、「見と不見」と。好事も無きには如ずと云ふことを頌す。して其用を全うするに喩へたもの

「倒まに牛に騎つて佛殿に入る」とは、これ黒漆桶裏眞黒の漆桶の中に入ると云ふことで本分正位の玄域を示す。に入り去るをいふ。須らく是れ儞・自ら牛に騎つて佛殿に入り。是れ箇の什麼何の道理ぞと道ふことを看るべし。

第八十七則　雲門の藥病相治す

【垂示】明眼の漢窠臼隱れ家と見れば學者の第一原理の如き宗教家の宗義等皆これなり或は情意の偏頗と見るもよしを沒す隱れ家逃げ場又は情見なし。有時は孤峯頂上に草漫々。有時は鬧市裏頭に赤灑々〻る明眼の宗師家は向上の一路即ち大智慧光明の立脚地に居て他の出頭を許さない孤峯頂上の獨尊の處に居りながら落草して人の爲に如何なる勞をも惜まない又或時は衆生濟度の爲に都城に入り煩惱の衢に進んで方便を以て說法する中にも所謂笑中に刀ありて自己の獨尊を犯さないのである。かゝる師の活作略は忽ち若し忿怒の那吒尭頂の修羅王恐ろ、三頭六臂を現じ。そうかと忽ち若し日面佛月面圓滿の相貌。普攝慈光大慈悲心を放つ。思ふと又更に一塵中に於て一切身を現じ、隨類の人と爲つて、泥に和し水に合す觀音の應身の如く三十三身に身を現して衆生の機根の種類に隨つて敎化。若し夫れ忽ち向上の竅穴也を撥着示すれば、佛眼も也覷れども見着す。設使千聖出頭し來るとも也須らく倒退三千里すべし向上の機關を開展して佛祖の頭上を踏み行く段になれば佛祖と雖ども窺ふの地なし。還つて同得同證の者ありやかゝる境界に進みたる人ありや本則の。試みに擧す看よ。雲門は即ちこれなりとなり

【本則】擧す。雲門大師衆に示して云く。藥病相治す。盡大地是れ藥。那箇か是れ自己と疾病は治し易しと雖ども藥病は治し難し盡し衆人に煩惱の病あるが故に佛法の藥にて治療するのであるが今度は其佛法と云ふ藥に取りつかれて窠臼に陷る此病は情見なれば中々治し難い即ち佛病祖病をも治して藥病二つ乍ら忘れて始めて健全の人となるのであるかく藥病を治せし上は盡大地是れ藥で宇宙の萬法皆一相無相の平等海中の個々の波瀾と咲き來るのである然し又此に膝を卸してはならぬ何となれば盡大地是れ藥なれば又盡大地病とも見られ又毒とも見らるゝからである故に此に何が是れ自己か我れかと究明して百尺竿頭に更に轉身の妙用がなくてはならぬ盡し物其自身は無相のものにして藥毒の相を離れ時處位に依つて其名相を生じ來るが故に此れは藥此れは毒此れは我彼れは他と二見對待の見を絕して藥來れば藥に任せて之に應じてこそ盡大地自己の一隻眼たるものと云ふべきである

【評唱】雲門道く、藥病相ひ治す。盡大地是れ藥。那箇何にか是れ自己と。諸人還つて出身の處ありや否やい雲門の句下に死了せな。二六時中日璧立千仞なることを管取せよ人々の本分事は古今に亘りて獨立獨歩なることを知れとの意。德山の棒、雨點の如く頻りに。臨濟の喝、雷の奔るに似ることは則ち且く致置也く。釋迦は自から釋迦、彌勒菩薩は自から彌勒なり人々獨尊のものとの意。未だ落處を知らざる者は、往々に喚んで藥病相投するの會解を爲し去る是れ雲門の意。世尊四十九年三百餘會也。機に應じて敎へを設く、皆是れ病でないとの心に應じて藥を與へたもの。即蜜果を將て苦き葫蘆に換ゆるが如くに相似たり。既に汝諸人の業根惱煩を淘つて去つて、灑々落々たらしむ。已に無病無毒の境界に進んだと すれば盡大地悉く藥なり故に盡大地是れ藥。儞什麼の處に向つてか觜一句を挿まん。若し觜を挿み得ば一口を開いて何とか云ふことが出來ればこの儞に許す身を轉じ氣を吐く處あつ

て、便ち親しく雲門を見ることを。爾若し回顧躊躇せば、醬を挿み得ざることを管取せん 既に擬議分別に渉れば一句を云ひ得ること能はずと雲門爾が脚跟底に在らん 浙角雲門の上乗の垂誡も其旨に契當する分なの意、かく一句をも云ひ得ざるようでは くば終に泥上の花とならん益なけんとの意

藥病相ひ治すとは、也只是れ尋常の語論。爾若し有に着すれば爾が與に無と說き。爾若し無に着すれば爾が與に有と說き。爾若し有にあらず無にあらずに着すれば、爾が與に糞掃堆上に去つて丈六の金身佛身を現じて頭出頭沒せん 全身汝が爲に浮沈す。只如今盡大地森羅萬象乃至自己一時に是れ藥なり。恁麼かゝの時に當つて、却つて那箇どれを喚んでか是れ自己とせん。爾一向に喚んで藥と作さは墨守せば。彌勒下生にも也未だ夢にだも雲門の意を見ざること在らん 彌勒の此世に生れて衆生を救ふのは百萬年の未來なれば未來永劫と云ふ意 畢竟如何んか鉤頭の意雲門垂示の底意を識取せん。定盤星を認むること莫れ 株を守つて兎を待つの愚をなすなか。文殊菩薩一日善財童子をして去往也つて藥を採らしめんとす。先づ云く、是れ藥ならざるものを採り持ち來れと 是れが藥でないと云ふ。ものを採り來れとの意 善財徧く採るに是れ藥ならざるものなし。却り來つて白して云く、是れ藥ならざる者なし。文殊云く是れ藥なる者を將ち來れと、善財乃ち一枝草を拈じて、文殊に度與す。文殊提起して衆に示して云く、此藥亦能く人を殺し亦能く人を活すと。今此の藥病相ひ治するの話。最も看難し深意ある。雲門室中に尋常人を接する手段其底意。尤も看難し 金鵝長老

一日雪竇を訪ふ。他金鵝は是れ一箇の作家。乃ち臨濟派下の尊宿なり。雪竇と此藥病相ひ治するの話を論ず。一夜天の光くるに至つて、方に能く善を盡す此の話を。這裏此話を論する時に至つて學解思量計較總て使ふことを着得ず。雪竇後に頌あり頌を作つて。他金鵝に送る。道く、藥病相ひ治すの話は見ること最も難し。萬重の關鎖太だ端なし。金鵝道者來つて相訪ふ。學海の波瀾一夜に乾くと。雲竇後面次に頌に頌し得て最も工夫あり。他の意亦竇位に在るか、亦主位にあるか 雪竇の意雲門の意を頌するか果亦自己の主人公を頌したのか分らん自ら見るべし人々自ら高く眼を着けて見よ。頌に云く。

【頌】盡大地是れ藥。古今何んぞ太だ錯まる 全體盡大地是れ藥と云ふが抑も雲門が第一に錯まつて居る又其後のものが其言葉に付き纏ふて自由を得ないから益々錯まるに至るのである元來人々病だの藥だのと云ふ必要はない健康體であるではないか只妄情の爲めに自ら凡夫と思ひ悟を向ふに見るのである藥の佛法禪道を忘れてこそ全快であつて健康體の健康體たる所以である。門を閉ぢて車を造らず、途に通ずれば自から寥廓たり 門內で車の轍を計らずとも一定の規律によりて車を作れば自然に外の車の轍に合する譯であるが今はそれを反對に門を閉ぢて車をも作らず即ち修行等の功勳を借らず車を造るの勞なしそんな一定の據る處即ち執着はない即ち至道は無何難で人も大手を振ふて通れるのである其樣子は萬里片雲を絕したる寥廓たるものであるとの意。錯々、鼻孔遼天も亦穿却す。雪竇此に一轉し來つて上述の言說も本分の上より見れば亦是れ錯りであつたと蹤跡を拂ひ自ら第一機の上より如何に鼻が天につかへる程自慢の作家でも其鼻頭を穿つて自由にはさせないぞというふたのである。

【評唱】「盡天地是れ藥。古今何ぞ太た錯る」と、爾若し喚んで藥の會解をなさば、古へより今に

至つて一時に錯り了らん。雪竇云く、有般の漢或は大梅常禪師の脚跟を截斷することを解せずして、只管に道ふ。程臨終の道程を貪ること太だ速かなりと。他雪竇雲門の脚跟を截つことを解す雪竇は雲門の句下に死せず直に雲門の頭上を踏んでかく頌したとの意。これ雲門の這の一句、天下の人を惑亂するが爲なり。雲門云く、柱杖子本分向上を表はす是れ浪現成を表はすならば、儞に許す七縱八横なることを本分と現成とを受用して自在なるを云ふ。盡大地是れ浪ならば、看よ儞が頭出頭沒することをと盡大地が涙とは現成の一邊なるを用ひて。「門を閉て車を造ず、途に通ずれば自ら寥廓たり」と。これ雪竇儞が爲に一線路を通じたもの。儞若し門を閉ぢて車を造り門を出で、轍に合ふと云はゞ、箇の甚の事をか濟ん人々自己の大車元來自在なり若し修に依つて悟を得る。と云はゞ已に宗旨に背く何ぞや修證不二なればなり我が雪竇這裏我が宗家にては門を閉ぢて車を造らず元來本分の大車は脫體現成。脫體現成にして修を借らざればなり門を出づれば自然に寥廓の大車故自たり事々處々皆同成にして異轍なければなり。他雪竇這裏こゝに略些子の縫罅玄旨のけぢめを露はして人をして見せしむ。又更に連忙卒急に却て道ふ。錯々誤也と。前頭盡大地是れ藥の句も也錯、後頭邪箇是れ自己の句も也錯。誰か知らん雪竇が一線路を開くも也錯なることを。然も鼻孔遼天什麼としてか也穿却すと云ひ。會せんと要すや。且く參せよ三十年。儞に柱杖子本分向上の事を喩ふあらば我れ儞に柱杖子を與へん錦上更に錦。儞若し柱杖子本分の活作用無んば、免れず人に鼻孔を穿却せらゝることを。

第八十八則　玄沙の接物利生

【垂示】門庭の施設。且く恁麼に二を破して三と作す師家が學人を接化するに用ゆる手段方法のことを門庭の施設と云ふさてその手段たるやこう云ふ風に二を破して三と作すで有を破つて無と說き無を破つて有と作すこともあり又須彌山の大を芥子の小に容れると云ふようなこともあつて初めより一定の規律を立せず機に臨んで自由自在なりとの意。入理の深談也須らく是れ七通穿八達穴なるべし又玄旨を談ずる場合にても自由自在であるとの意。當機敲點にして、金鎖玄關を擊碎す當機の機は機根にして學人の程度に應じて敲點即ち問答往來して金鎖玄關たる法執を打破するのである即。令正に據つて行ず。直に得たち向上の玄域に安住して百尺竿頭に退歩を學ばしめさせて自由の境に導くのである。令に法執を打破して一。且く道へ。諸訛其曲折し切を空盡し來り以て學人をして沒蹤跡の地に到らしむり蹤を掃ひ跡を滅することを

緊要の處は什麼の處にか在る。頂門の眼一隻を具する者。請ふ試みに看よ。

【本則】擧す、玄沙師備、雪峯の弟子衆に示して云く、諸方の老宿師家盡く道ふ。接物利生と學人を接化し學人を利益すとの意物も生も此。忽ち三種の病人盲と聾と啞との病を兼れたものの來るに遇はゞ、作麼生如何か接化教せん。患盲の者では學人のことは拈鎚竪拂子他又見ず鎚を拈起しても又は拂子を立てゝ教化。患聾の者は語言三昧他又聞かず盲目であつても耳が聞えれば佛祖の言教を聞いて悟ることもあろう盲目の上へ。患啞の者は伊學人をして說かしむるに、又聾者とあつては臨濟大師の一喝でもなんとして見ようがない。說き得ず盲聾の上に啞者であればなんともして見ようがない若しも啞でなければたとひ盲聾のもの。學人を且く作であつても其知見を語らしめてなんとか方便を以て悟らしめることも出來ようかとの意

麽生か接せん。若し此人を接し得ずは、佛法に靈驗なしと。僧あり（此玄沙の語を以て雲門に請益教へを乞ふ）す。雲門云く汝禮拜せよ。僧禮拜して起つ。雲門柱杖を以て拄撞也かんとす。僧後へに退く。門云く汝是れ患盲にあらず。復近く前へ來れと喚ぶ。僧近前す。門云く是れ患聾にあらず。門乃ち云く還つて會すや否や。僧云く會せず。門云く、汝是れ患啞にあらずと。僧此に於てか省悟了あり。

【評唱】玄沙參して情塵意想を絶し、淨躶々赤灑々地（胸中に一物なく洒々たるを云ふ）の處に到りて、方に恁麽くの如くに道ふことを解す。是時諸方の列刹（諸寺）相望む（玄沙の德風を仰ぎ望むとの意）。尋常衆に示して道く、諸方の老宿盡く道ふ接物利生と。忽ち三種の病人の來るに遇はん時作麽生（如何か接せん）。患盲の者は拈鎚豎拂するに他又見ず。患聾の者は言語三昧にして他又聞かず。患啞の者は他をして說かしむるに又說くことを得ず。且く作麽生か接せん。若し此の人を接すること得んば、佛法靈驗なしと。如今の人若し盲聾瘖啞の會解を作さば模索不着（玄沙の意言外に超出するが故に）。所以に道ふ句中に向つて死却することなかれと（須らく是れ言外の意を領すべしとの意）。須らく是れ他の玄沙の意を會して始めて得べし。玄沙常に此の語を以て人を接す。僧あり久しく玄沙の處にあり。一日上堂（法座に上て法を說く）す。僧和尙に問て云く、

三種病人の話、還て學人が道理を說くことを許さんや也無しや。玄沙云ふ許さんと。僧便ち珍重して下り去る。沙云く不是不是と。這の僧他の玄沙の意を會得す。後來法眼云く我れ地藏和尙（玄沙の弟子）の這の僧の語を擧示するを聞きて、方に三種の病人の話を會すと。若し這の僧會せずと道はば、法眼什麽としてか却て恁麽そんなに道ふ。若し他會すと道はゞ、玄沙什麽と爲してか却て道ふ不是不是と。一日地藏道く某甲聞く、和尙に三種の病人の話ありと、是なりや否や。玄沙云く是。藏云く珪琛現に眼耳鼻舌あり。和尙作麽生か接せん。玄沙便ち休し去る（豈に言詮を容れんやと云ふあ。若し玄沙の意を會得せば、豈に言句上に在んや。他（地藏等）の會する底自然に殊別なり。後僧あり雲門に擧似す。門便ち他（玄入）の意を會して云ふ。汝禮拜せよ。僧禮拜して起つ。門柱杖を以て拄く、這の僧後へに退かんとす。門云く汝是れ患盲にあらず。復近前來と喚ぶ、僧近前す。門云く、汝患聾にあらず。乃ち云ふ會すやと。僧云く不會。門云く汝患啞にあらずと。其僧此に省悟（入）あり。當時若し是れ箇の漢（英靈の漢）ならば、他（雲門）の禮拜せよと道ふを待つて、便ち興めに禪床を掀倒せば、豈に許多の葛藤（言句）あることを見んや（這の僧此の作略を缺く故に。雲門許多の言句ありとの意）。且く道へ雲門と玄沙との會處、是れ同か是れ別か。他の兩人の會處都べて只一般なり。看よ他の古人（玄沙・雲門）出で

來て、千萬種の方便をなす。意鈎頭上にあり言句を以て離言の旨を會せしめんが爲なりとの意。多少か苦口叮嚀なる。只諸人をして各々此の一段の事自己を明らむ大事を明らめしむ。五祖老師云く一人は說き得て不會。一人は却て會して說くことを得ず。二人若し來參せば如何か他を辨得せん。若し這の兩人を辨ずること得ずば、人の爲めに粘を解き縛を去り得ざること在らんを管取せよ。若辨得せば纔に門に入を見て、我れ辨得底の人を指す便ち草鞋を着て儞學人が肚裏に向て走ること幾遭也し了れり心肝五臟を見破。猶ほ自ら省せずんば、什麼何の碗をか討ね出で去らん此の如く說示して自省すること能はず。且く盲聾瘖啞の會を作すことなくんば好し。所以に道ふ維摩弟子品の文。眼に色を見て盲の如くに等しく、耳に聲を聞て聾の如に等し。又云く長沙の岑の偈滿眼色を視ず、滿耳聲を聞かず。文殊權化常に目に觸れ滿目色を視ざると顯現す。觀音耳根に塞ると聞根の流を返へし妙に眞門に復す是れ觀音の三摩地なりき了々として本智るの意。いて聾の如くに相似て、方に能く玄沙の意と多きことを爭はざらん玄沙の意と多く相違せざれとの意。諸人還て盲聾瘖啞底の漢子の落處を識るや、雪竇の頌を看取せよ。

【頌】盲聾瘖啞。杳として機宜を絕す。此頌は盲聾啞の三病を直に本分の消息性質として不見不聞不說の本體即ち法身佛として頌出せり即ち此不思議不可說の如來は一切の機宜即ち思慮言詮を超絕した。天上天下。笑ふに堪へたり悲しむに堪へたり人々各自は此本分圓成の眞の盲啞聾るものであるとなり即ち不見不聞不說の境界に在りながら見えもし聞えもし言ひもすること出來ると思ふのが間違いであるそれはほんの表面の事で宇宙人生の本體は不見不聞不說の當體で而もそれが人々自己の境界であることを知らないとは笑ふべく又悲しむべきことだとの意。離婁正色を辨せず。師曠豈に玄絲を織らんや離婁と師曠とのことは評中にあり要するに如何に眼が銳ても又如何に耳が利きても此の不見不聞の法身如來の正色玄絲は到底見もし聞きもすること。は出來ないとの意。爭か如ん虛窓の下に獨坐して。葉落ち花開く自ら時あらんには されば寥ろ明窓淨案の下に胡座して一切の分別思慮を絕し見るともなく聞くともなしに無事底の境界にあれば此時一切の事相は澄み渡る心の明境裡に無邊の風光を呈し來らんげに秋窓の下には千葉紅葉し春窓の前には百花香しく物々時節因緣の純熟を待つて本地の風光を露現し來るであろう。復云く還つて會得すや亦無しや。無孔の鐵鎚雪竇かく頌し來つて人の無事甲裏に落ちて鬼眼睛を弄することを憂ひ更に一轉し來て其蹤跡を掃はんとしてかく言ひ添へたのである彼の鐵鎚も孔があれば紐を通して用ひもせられようが孔の無い鐵鎚では用ひようがない其無孔のものを學人に與へて百尺竿頭に更に一步を進めしめんとの意なり

【評唱】盲聾瘖啞杳として機宜を絕すと。儞が見ると見ざると、聞くと聞かざると、說くと說かざるとを盡して、雪竇儞が與めに掃却し了れり。直に得たり盲聾瘖啞の見解、機宜計較一時に掃却し了て儞をして意路を着る處無からしむ此に到りて一時に杳として絕えて總て不用着なることを一切の消息總て絕が故に更に何物有つて之を用ふることを得んやと。這箇向上の事這箇とは機宜計較杳として絕する處なり是れ佛祖不傳の眞域なるが故に向上の事と云ふなりの意。「天上天下笑ふに堪たり悲しむに堪たり」ば。雪竇一手は擡げ一手は搦へたもの。且く道へ箇の什麼をか悲む。笑ふに堪たり。是啞却て啞ならず、是聾却て聾ならず。悲むに堪たり明々として盲にあらずして却て盲し。明々として聾ならずして却て聾することを。離婁正色を辨せず、靑黃

赤白を辨ずること能はず、正に是れ瞎す。離婁は黄帝の時の人なり。百歩の外に能く秋毫の末を見る。其の目甚だ明なり。黄帝赤水に遊で珠を沈む。離朱をして之を尋ねしむるに見へず契詣をして之を尋ねしたるに亦得ず。後に象罔をして之を尋ねしめて方に之を獲たり。故に云く象罔到る時光燦爛。離婁行く處浪滔天と。這箇香として機宜を絶する處の高處の一着。直に是れ離婁が目も亦他、高處の一着の正色を辨ずることを得ず、師曠豈に玄絲を織らんや。師曠は周の時絳州晋の景公の子なり。師曠字は子野。善く五音六律を別つ。山を隔て、蟻の鬪を聞く。時に晉と楚と覇を爭ふ。師曠唯琴を鼓し風絃を撥動して、楚必ず功無きことを知る。然も是の如くなりと雖も、雪竇道く他師曠尚ほ未だ玄絲を識らざることありと。聾せずして却て是れ聾底の人なり。這箇こ高處の玄音。直に是れ師曠も亦識ること得ず。雪竇道く、我れ亦離婁と作らず、亦師曠と作らず、爭か如ん虚窻の下に獨坐して、葉落ち花開く自ら時あらんにはと。若し此の境界に到らば、然も見ると雖も見ざるに似。聞くとも聞かざるに似。説くとも説かざるに似たらん。即ち飢えば即ち喫飯し、困すれば即ち打眠す。任他あれ葉落ち花開くことを。葉落つる時は是れ秋。花開く時は是れ春。各々自ら時節あり。雪竇爾が與めに一時に掃蕩し了れり。又一線道を放つて云く、還て會すや也なしやと。雪竇力盡き神疲れて、只箇の無孔の鐵鎚意路不到の處に喩ふを道ひ得り。這の一句急に眼を着て看ば方に見るべし。若し擬議せば又蹉過せん。師圜悟拂子を擧して云く、還て見るや。遂に禪床を敲くこと一下して云く、還て聞くや否や。禪床を下て云く、還て說き得るや否やと。

第八十九則　雲巖、道吾に手眼を問ふ

【垂示】通身是れ眼にして、見ること到らず通身即ち全身悉く眼であるならば眼眼を見ず。通身是れ耳にして、聞くこと及ばず今は身體全體が耳であるから見ること到らずと云ふたのである。通身是れ耳に着す。通身是れ心にして鑒み出さず身體全體が心であるから普通の心ではない即思慮分別の照鑒力はないそれ以外の不思量の思量である」。通身は即ち且く止く、忽ち若し眼なくんば作麼生して か見ん。耳なくば、作麼生か聞かん。口なくんば作麼生か說かん。心なくんば作麼生か鑒せん前述の通身云々のことは今問はず見聞覺知を離れて如何んが生活せんかとなり。若し箇裏に向つて一線道を撥轉し得ば、便ち古佛と同參已たり此見聞覺知を離れたる無心向上の境に更に一線道を開發し百尺竿頭に一歩を進める所謂退歩を學ぶの人ば活達自在の人で古佛と同道唱和の人である即ち五欲六塵の境に入つて。參は且く止く、且く道へ箇の什麼何人にか參せん閑悟は更に轉一轉して古佛に參することの濟度の活作用をなし得るのである

は今は止き現在如何なる人に參すべ。きかと本則に申き付けたのである

【本則】舉す。雲巖、道吾に問ふ。大悲菩薩千手觀音許多の手眼を用ひて什麽かせん。吾云く人の夜半に背手にして枕子を摸るが如し。巖云く我れ會せり。吾云く汝作麽生が會得ず、巖云く徧身是れ手眼。吾云く道ふことは即ち太煞道ふ。只八成を道ひ得たり是は即ち是なるも未だ十成即ち完璧でない。巖云く師兄作麽生如何。吾云く、通身是れ手眼と通身と云ひ徧身と云ふ共に同意である只夫れ雲巖は雲巖の立場あり道吾は道吾の立場ありて各々一頭地を行ひて他の出頭を許さないのであるからこう云ふ樣に道吾は云ふたのである共に徹底せる達人の問答なのである

【評唱】雲巖は道吾と同じく藥山惟嚴禪師に參ず、四十年脇席に着けず。藥山曹洞宗派の一宗を出開すことは、三人あつて法道盛に行はるれば行はれたなり。即ち雲巖下の洞山。道吾下の石霜。船子下の夾山や無しや。百丈云く一切の語言文字俱に皆宛轉して自己に歸すと。雲巖常に道吾に隨つて咨問參請決擇す。一日他道吾に問て道く、大悲菩薩許多の手眼を用て什麽をか作とす。當初好し他雲岩の與めに劈脊直下に便ち棒打てせば、後に許多の葛藤言句あることを見るを免れん。道吾慈悲にして、斯の如こと能はず打たな。却て他雲巖の爲に道理を說く。意は他をして便ち會せしめんことを

要す。却て道ふ人の夜半に背手して枕子を摸るが如しと。深夜燈光無き時に當つて、手を將つて枕子を摸る。且く道へ眼什麽の處にかある。他便ち道ふ我れ會せりと。吾云く汝作麽生か會す。巖云く徧身是れ手眼。吾云く道ふことは即ち大煞だ道ふ、只八成を得たり。巖云く師兄又作麽生。吾云く通身是れ手眼と。且く道へ徧身底が是か、通身底が是か。爛泥に似ると雖も却て脫灑なり。如今の人多くは去て情解を作して道ふ。徧身底は不是、通身底は是と。只管に他の古人の言句を咬で、古人の言下の於て死し了れり。殊に知らず古人の意言句上に在らざることを。此れ皆是の事已むを獲ずして之を用ふ。如今注脚を下し格則を立して道ふ。若し此の公案を透得すれば、便ち罷參の會を作すと云ふて。手を以て渾身を摸り、燈籠露柱を摸つて、盡く通身の話會を作す。若し恁麽に會せば、他の古人を壞すること少からず。所以に道ふ、他學人活句に參じて死句に參せざれと。須らく是れ情塵情想即塵意想を絕して、淨躶々赤灑々地にして、方さに大悲の話を見得するに可なるべし。見ずや、曹山僧に問ふ。物に應じて形を現はす、水中の月の如くなる時如何。僧云く鑪の井を覷るが如し。山云く道ふことは即煞道ふ、只八成を道ひ得たり。僧云く和尙又作麽生。山云く井の驢を覷るが如しと。便ち此の意に同じ。爾

若し語上に去て見ば、總て道吾雲巖の圈續を出づることを得じ。雪竇作家にして更に句下に向つて死せず、直に頭上に向つて行く。頌に云く。

【頌】 徧身是手眼。雲巖の徧身是れ手眼。通身是手眼。道吾の通身是れ。拈じ來つて猶ほ十萬里に較る。徧身通身是れ手眼と拈提してそれで大菩薩の當體當用を知らんとせば早く是れ十萬の隔。翅を展べて鵬騰す六合の雲。風を搏て鼓蕩す四溟の水。此二句は雲巖と道吾との通身徧身と云ふた其機合意氣は彼の九萬里もある大鵬が翅を展べて天地の雲を振動し四大海の水を一時に動搖さするが如き大力用ありと美む。然し千手眼の大悲菩薩の妙用の廣大無邊なるに比すれば其大鵬の作用も單に一點の塵埃の空中に散して居ると同じであると云ふので。是れ何の埃々ぞ忽ちに生ず。忽焉として生じた一點の塵に過ぎない。那箇の毫釐細微ぞ未だ止まざる。かく大悲菩薩の大願力は廣大なれば徧身とか通身とか云ふが如き微少なるものに執着して何時まで止まずに迷ふて居るのかと雲巖等を抑ゆ。君見ずや、網珠範を垂れて影重々。此網珠の引證に付いては評中に委し要する處一個の球中に十法界を羅列する萬象の影を宿して盡十方界のもの互に圓融交參して居る有樣は徧身手眼通身手眼の比ではないかくてこそ千手菩薩の妙用の當相の幾分かを詮表する。棒頭の手眼何れよりか起る。彼の德山や臨濟や棒喝を下す活手段は抑も何處よりか來ることが出來ようとの意。と云ふに皆この廣大ななる大悲菩薩の手眼より來るのであると。咄此の語は上述の說話を一時に把住し拂ふて沒蹤跡の處を示さんとしたもの。の意。是れ大悲菩薩の當體當用はとても言詮の及ばざるものなるを以てなり。

【評唱】 「徧身是通身是」と。背手して枕子を摸る底便ち是、手を以て身を摸る底便ち是と道ふて、若し恁麼かゝの見解を作さば、盡く鬼窟裏識情の窠中に向て活計を作すもの。畢竟徧身通身都べて不是。若し情識を以て去て他の大悲の話を見んと要せば、直に是れ猶十萬里に較れり。遠し

て遠。雪竇一句を弄し得て活せしめて道く。「拈じ來る猶十萬里に較れり」と。後句に雲巖道吾の奇特の處を頌して云く。「翅を展て鵬騰す六合の雲。風に搏て鼓蕩す四溟の水」と。大鵬、龍を呑むに翼を以て風を搏て浪を鼓す。其水開くこと三千里、遂に龍を取て之を呑む。雪竇道く徧若し大鵬にして、能く風に搏ち浪を鼓して、也大煞だ雄壯なるも、若し大悲千手眼を以て之大鵬を觀ば、只是れ些子の塵埃忽ちに生ずるに相似たり。又一毫釐の風に吹れて止まざるに似て相似たり。雪竇道く徧若し手を以つて身を摸て用ひて手眼と作さば、何の用を作すにか堪へん。此の大悲話上に於て直に是れ未在悟ら。所以に道ふ。是れ何の埃壒ぞ忽に生ず那箇の毫釐ぞ未だ止まず」と。雪竇自ら謂らく、作家にして一時に迹を拂ひ了れりと。爭奇ん後面に舊に依つて漏逗して箇の論子老婆談を說くことを。依前として只圈續裏にあり物外に出づると。「君見ずや網殊範を垂れ影重々」と。雪竇帝網明珠を引て以て、範を垂ることを用ふ。手眼且く道へ什麼處に落在す。華嚴宗中に四法界を立つ。一には理法界、一味平等を明すが故、眞空の法中に理あるを理法界と云ふ。二には事法界、理を全うし事を成ずる事を明すが故眞空の法に差別の事あるを事法界と爲す。三には理事無礙法界。理事相融して大小無礙を明すが故。四には事々無礙法界。一事徧く一切事に入り。一切事徧く

一切事を攝して、同時に交參の無礙なることを明すが故なり。所以に道ふ一塵纔かに擧ぐれば、大地全く收ると。一々の塵、無邊法界を含む。一塵既に爾り諸塵も亦然り。網珠は乃ち天帝釋の善法堂前に摩尼珠を以て網を爲る。凡そ一珠の中に百千珠を映現し。百千珠俱に一珠の中に現ず。交映重々にして主大珠伴小珠無盡なり。此を用ひて事々無礙法界を明せり。昔し賢首國師立て丶鏡燈の諭へを爲す。十鏡を圓列して中央に一燈を設く、若し東鏡を看れば則ち九鏡の鏡燈歴然として齊しく現ず。若し南鏡を看も則ち鏡々如然たり。所以に世尊初め正覺を成じて菩提大覺の道場を離れずして、徧く忉利の諸天に昇り、乃至一切處に於て七處九會座に華嚴經を說く。雪竇帝網珠を以て事々無礙法界を垂示す。然して六相の義甚だ明白なり六相とは一眞法界の體にして名義に六種の相ある。即總一には總相なり一法界の當體。即別二には別相なり理體は一なりと雖ども種々差別の義あるを云ふ。即同三には同相義種々あり の緣起なるも故に。即異四に異相此は多異相望するを異と云ふ種々差別の義同一體。即成五には成相此は一多緣起して和合せ なりと雖ども各々其宜しきに隨つて相混雜せざるを云ふ。るを成と爲す種々緣起の義共に法界 總相の體を成す。即壞六には壞相此は諸法各々本位に住するを壞と云ふ謂く諸法の義。故に一相を擧ぐれば則ち六相 するを云ふ。各々其自位に住する時は其一體を成するを得ず故に壞相と云ふ。 俱に該ぬ。但衆生日に用ひて知らざるが爲なり。雪竇帝網明珠を拈じて、箑を垂れて此大悲薩菩 の話を況ふること直に是れ此の如し。爾若し善く此網珠の中に向つて、柱杖子支旨を明め得て、

神通妙用、出入無礙ならば、方に手眼を見得すべし。所以に雪竇云く。「棒頭の手眼什麼りか起る」と。爾をして棒頭に證取し。喝下に承當せしむ、只德山の門に入れば便ち棒するが如き。且く道へ、手眼什麼の處にか在る。臨濟の門に入れば便ち喝す。且く道へ手眼什麼の處にか在る。且く道へ雪竇末後に什麼としてか更に箇の咄の字を着くるや。

第九十則　智門の般若體

【本則】擧す。僧あり智門雪門の弟子此碧巖集の頌を作つた雪竇の師匠である に問ふ。如何なるか是れ般若の體般若とは梵語智慧と譯す故に般若の體とは智慧の體のことである此。門云く蚌明月を含む此れ俗說を借り來りて示したもの今は蚌蛤には用はない明月の光りの無念無想にして盡乾坤照破せは吾人の心靈の光耀を云ふたのである ざる限なきを。僧云く、如何なるか是れ般若の用智慧の體はそれで分りましたが智慧の効用は如何でござると問ふ。門云はく、兎子懷取つたもの 胎と此れ又俗說を以て答ふ是れ亦兎に用はない矢張り月光の任運無作にして一切萬象を照して自由自在なるを示すされば問ふ方では智慧の體用を二つにして問ひ智門は共に中秋の月の光輝として答ふ蓋し體用二者別にあらざればなり

倘評唱に入りて。
參究せられよ。

【評唱】智門道ふ「蚌明月を含み、兎子懷胎す」と、都て中秋の意を用ふ。然も此の如しと雖も古人の意却て蚌兎の上にあらず只事を借て般若の靈光。他智は是れ雲門會下の尊宿なり。一句語に須 偏滿の處を示すのみ

らく三句を具すべし。所謂函蓋乾坤の句。截斷衆流の句。隨波逐浪の句なり。亦安排を消用せず安排を用ひずして一句の中此の三句を具すとの意。自然に恰好なり適當すとの意なり。便ち嶮處本分喰峻に去て這の僧の話に答へて、略些子の般若靈光の意鋒鋩を露はす、妨げず奇特なり。然も恁麼斯の如くなりと雖も、他の古人智門去て光影を弄せず覺知の上に於て分別をなさずして直に根元を截斷し了れりとの意。只儞が興めに些少なの路頭を指して人をして見せしむ。這の僧問ふ。如何なるか是れ般若の體。智門云く蚌明月を含むと。漢江に蚌を出だす。蚌中に明珠あり。中秋の月の出るに到り、水面に於て浮んで口を開いて月光を含む。感じて珠を產す。合浦縣の產物の珠是れなり。若し中秋に月あれば則ち珠多く月無ければ則ち珠少なし。如何が是れ般若の用。門云はく兎子懷胎と。此意亦異なることなし。兎は陰大に屬す。中秋の月生ずるに口を開いて、其光を呑で便ち懷胎す。口中より兒を產む。亦是れ月あらば則ち多く。月無ければ則ち少し。他の古人智門答處許多の事無し。他只其意を借りて月光徧滿の意般若の光を答ふ。然も恁麼なりと雖も、他の意言句上にあらず自ら是れ後人言句上蚌兎等なりに去て活計を作す。見すや盤山道く心月孤圓にして光萬象を含む。光鏡を照すにあらず、境亦存するにあらず、光境俱に亡す、復是れ何物ぞと。如今の人但瞠眼にして目瞎んで光と作す。只情上に去つて解を生せば、

空裏に橛を釘ん。古人道く汝等諸人六根門頭に、晝夜大光明を放ち、山河大地を照破す。只眼根より光を放つのみに止ず。鼻舌身意も亦光を放つと。這裏〻に到りて直に須らく、六根下を打疊して一星事一點の情謂の無く。淨躶々赤灑々地にして、方に此の話の落處を見るべし。雪竇正に恁麼此のに樣にに頌出す。

【頌】一片虛明凝寂謂情を絕す。人天此より空生を見る。虛凝とは吾人の本心の靈光、凝寂にして常恒不斷なるも而も自在に一切を照破する作用あるを云ふかく此本心は不思議にして一切の思議言語を絕するものである此れを十分に會得すれば人間界及び天上界の人々は空生の義を悟了するに至るであろう空生の事第六則にありたり。蚌玄兎月也を含む淡淡々たる意。曾て禪家に與へて戰爭法戰を作さしむ智門の答處は實に意味深遠であるが此支旨を悟了するには幾度かの法戰を經更に三十年の實參の實證を要することだとの意蓋し此支旨たる人々自悟自證すべきものたるを云ふたものである。

【評唱】「一片虛凝謂情を絕す」と、雪竇一句に便頌し得て好し。自然に古人門の意を見得す。六根湛然たり、是れ箇の什麼ぞ。只這此の一片虛明にして凝寂なり、天上に去て討ぬることを消用也せず。必ずしも別人に向て求めざれ、自然に常光現前す。是の處壁立千仞なり絕相絕名にして攀攀すること得ざる故に。謂情は即ち是れ言謂情塵を絕すとの意。法眼の圓成實性のに頌に云く、理極て情謂を忘ず、如何が論齊することを得ん。到頭霜夜の月任運に前溪に落つ、果熟して猿を兼て重く。

山遙にして路の迷ふに似たり。頭を擧ぐれば殘照あり。元是れ住居の西と。所以に道ふ。心は是れ根。法は是れ塵。兩種心法は猶鏡上の痕の如し。塵垢盡る時光り始めて現す鏡明現前。心法雙ながら忘して性即眞なりと。又道ふ三間の茅屋に從來住す、一道の神光萬境閑なり。是非を把り來て、我を辨ずることなかれ。浮生穿鑿相關らずと。只此の頌亦た一片の虛凝にして謂情を絶することを見る。「人天之れより空生を見る」は。見ずや須菩提佛弟子巖中に宴坐す。諸天花を雨ふらして讃歎す。尊者云く空中に花を雨して讃歎するもの、復是れ何人ぞ。天云く我は是れ楚天なり。尊者云く、汝何が故に讃歎す。天云く我れ尊者の善く般若波羅密多智慧を以て彼岸に到るとの意旨を說き給ふことを重んず。尊者云く我れ般若に於て未だ嘗て一字を說かず、汝奈何ぞ讃歎するや。天云く尊者無說、我は乃ち無聞。無說、無聞是れ眞の般若なりと云ふて、又復地を動かし花を雨ふらす。看よ他の須菩提善く般若を說くことを。且つ般若の體用と說かず。若し此に無說の上に於て見得せば、便はち智門の明月を含み、兎子懷胎すと道ふことを見るべし。古人の意言句上にあらずと雖も、爭奈せん答處深々の旨あることを。雪竇「蚌玄兎を含む深々たる意」と道ふことを惹き得たり深旨あるが故に雪竇深々の句を用ひたりとの意。這裏智門答處に到りて、曾て禪家に與へて戰爭法論を作

さしむ。天下の禪和子禪僧闊浩々地に商量して、未だ嘗て一人も夢にだも見ざることあり。若し智門並に雪竇と同參已たらんことを要せば、須らく是れ自ら眼を着て始めて得べし。

第十卷

第九十一則　鹽官の犀牛の扇子

【垂示】情を離れ見解を離れ。縛を去り粘を解く。向上の宗乘宇宙の本體を掌裡に入れて自ら主中の主となり佛を超へ祖を越えて佛祖と雖ども出頭を許ざるの地位に獨座せるを云ふを提起し。正法眼藏佛祖單傳の直指の宗旨を扶竪することは。也須らく十方齊しく應じ、八面玲瓏にして、直に恁麼上逃の如きの田地境遇に到るべし。且く道へ、還つて同得同證同死同生底のものありや否やかゝる如上の境遇に安住し試みに擧示す看よ。

【本則】擧す。鹽官杭州鹽官の齊安國師馬大師の弟子此國師の弟子義空禪師は禪僧として始めて渡來せり一日侍者を喚び、我が與に犀牛の扇子を將ち來れと。侍者云く、扇子破れぬ。官云く扇子既に破れなば、我に犀牛兒を還へし來れと。侍者對ふる無し。後に投子云く鹽官は扇子の相狀形式が破れたら其内容たる本體はどうなつたか、それをしつかりと見よとの直指をしたのに侍者は何等の解答がなかつたから後に此れを聞いた投子大同禪師は侍者に代つて云ふたのである以下皆代語並に批評なり將ち出んことを辭せず。恐らくは頭角全からざることを鹽官は扇子が破れたなら犀牛兒を持つてこいと云ふるゝのは宇宙の本體たる眞如法性を持ち來れと云ふのだから將ち往かんこともないが若し何とか言詮に表はせば其全分を全うすることは出來ない何故かと云ふに此法性の本來の面目たるや人に傳へることも出來ねば人より教へられて受取らるべきものでもない人々冷暖自知のものだそれを持つて行けば最早や眞理そのものゝ全部ではないとの意雪竇拈じて云く、我は全たからざる底の頭角を要す投子は全部ならざる不完全の本體なと云はれるがそんな不完全の否な否。石霜慶諸禪師云く、若し和尚に還へさば即ち無し人々具足の犀牛兒だもの渡してなるものか、なやりとりの出來ないものでござると云ふ工合。雪竇拈じて云く犀牛兒猶在り處が古今常在溝壑に塡塞するも人。資福如寶禪師一圓相を畫き中に於て一の牛の字を書す。雪竇拈じて云く適來の機用に落ちざるまでさ。資福の樣なそんな立派な牛があるの。保福從展禪師云く和尚年尊御老體なり。さつきから什麼としてか將ち出さゝる資福の樣なそんな立派な牛があるのならなぜ早く出さないのかと贊成す別に人を請せば好からん和尚は老年で老耄せられた樣子だからもう私しには侍者の役が務まらんどうしてよいやら六ケ敷いではないか前には扇子を云ひ今亦犀牛兒と云ふ前後矛盾して居るどうか別人を以て侍者として犀牛兒なりなんなりと御求めになつたらようござん。

しようとあの侍者が和尚に云へば好かつたにとの侍者に代つての代語　雪竇拈じて云く。惜むべし勞して功なしと保福は侍者に閑暇をとれと云ふのだがそれでは永の苦勞が無になるうとの文意。

【評唱】鹽官一日侍者を喚び、我が與に犀牛の扇子を將ち來れと。此事自己を明む一大事言句上に在らずと雖も、且く人の平生の意氣作略を驗せんことを要せば、又須らく此の如く言に籍て顯はすことを得べし。臘月三十日臨終の時に於て、力を着け得て主と作り得ば生死の間に處し生死の。萬境樅然闇かたりとも、之を覩て動せずんば、謂つべし無功の功、無力の力と此絶對の境には功動力用の造詣するあるなし一切の行動皆無作の妙用なり此事を合點すれば生死の繫縛を脱す。鹽官は乃ち齊安禪師なり。古時犀牛の角を以て扇を爲くる。時に鹽官豈に

犀牛の扇子の破れたるを知らざらんや、こは故らに侍者に問ふたもの。侍者云く扇子破れぬと。看よ他の古人鹽官十二時中日常に裏許自己を究むに在つて、撞着磕着の意接觸すとの意鹽官云く扇子既に破れなば、我に犀牛兒を還へし來れと、且く道へ他犀牛兒を要して什麼かせん。也只人の落處安心を知り得るや也なしやと驗せんとしたもの。投子云く將ち出でんことを辭せず恐くは頭角全たからざらんことを。雪竇云く我れ全からざる底の頭角を要すと。亦句下に向つて便ち機用を投せり雪竇又投子の句に付いて自己の機用を呈したもの意味は本則中に説明せり石霜云く、若し和尚に還せば即ち無し。雪竇云く犀牛兒猶在りと。資福一圓相を畫いて中に於て一の牛の字を書す。他資福は仰山に承嗣するが爲に、平生境致分機境にして凡て形ち身振りを以て本分の事を明して人を教化するを云ふを以て人を接して、此事自己を明むる大事を明さんことを愛す。此を評して雲竇云く、適來什麼として か將出さざると。又これ他資福の鼻孔を穿ち了れり雪竇資福を把住して出頭。保福云く、和尚年尊老年なり別に人を請せば好しと。此語道ひ得て穩當なり。前の許さずとの意三則の語は投子石霜資福の語は却て見易し皆第一頭より自己の玄機を。然るに此の一句の語は遠意あり犀牛兒の玄機を表漏洩せしものなるが故に此の保福の面に弄して居ない即ち本分の。然し雪竇は亦之を打破し了れり雪竇は保福の頭上を行いて。其の出頭を許して居ない。山僧闡悟自身舊日慶藏の説に觸れずして用ゆるが故に主の處に在つて理會して道く。和尚年尊老耄せり。頭始也を得ては尾終也を忘る。適來さきづは扇子

を索め、如今は犀牛兒を索む前後を忘却するを證して。執侍を爲し難し。故に云く別に人を請せば好しと。雪竇云く、惜むべし、勞して功無きことをと。此れ皆是れ下語評語の格式なり。古人此事自己を明らむ大事を見徹して、各々不同なりと雖も、道得し出で來れば百發百中なりとす途を異にして千差なり中すること。須らく出身の路有りて句々血脈を失せざるべし。如今の人問着問はるすれば只管に其撰一なり道理計較を爲す分別慮知す。所以に十二時中日人々咬嚼參學して滴水滴凍歩々實地を踏んでならしめて、箇の證悟の處を求めんことを要す。看よ他の雪竇一串に頌して云へることを。

【頌】犀牛の扇子用ゆること多時。問着すれば元來總に知らず此犀牛の扇子は朝夕任運無作に用ひ來つて居る本心佛性であつて無始以來個々圓成のものである然るに其扇子佛性の體相及び効用如何と云ふ段になると不思議〳〵で言詮を以て顯はすことを得ずこれ元來總て知識を以て知るべからざるものなるが故なり文意は侍者の無對なる處を頌したものなるも底意は本則の四大老を始めとし何人も窺知を許さない本體の消息であるとの意。限りなき清風と頭角と、盡く雲雨の去つて追ひ難きに同じ此は此四大老達が各自本分の犀牛兒を拈弄せる處實に清風腋下に起るの感あるが然し其何等の執見なく沒蹤跡の活用たる有樣は恰かも朝雲暮雨の忽ち生じて忽ち散ずると一般で雲雨の去つて追ひ難きが如しだと美む清風は扇子に因み頭角は犀牛と云ひしより用ひたもの雪竇復云く、若し清風再び復し頭角重ねて生せんことを要せば、請ふ禪客各々一轉語を下せ雪竇座下の人達に對して若し四大老の拈提せる當時の事を追想せんとならば。問ふて云く、扇子破れなば我に犀牛兒を還へし來れと大衆に向つてさあ〳〵一つ一轉語を下。時に僧あり出でゝ云く、大衆參諸人も亦清風を起し來るつて犀牛の扇子を用ふるに足る一轉語を下せとなり。

堂し去れと我等既に言ひ了れり須らく叢堂即ち各自に室に還るべき。雪竇喝して云く、鉤を抛つて鯤鯨を釣らんとするに、箇の蝦蟆此の僧のひよこ〳〵出で來て主人の眞似をする處を抑へて云ふたもの を釣り得たりと云ふて便ち下座法座より下るす。

【評唱】「犀牛の扇子用ゆること多時。元來問 着すれば總に知らず」と。人々箇の犀牛の扇子あり。十二時中日全く他犀牛即ち本體の用を の力を得たり 心靈の妙用により て行動す 什麼としてか問着すれば總て知らざる。侍者投子乃至保福も亦總に知らず。且く道へ雪竇還つて知るや否や。見ずや無着菩薩 文殊菩薩を訪ふ。茶を喫するの次で、文殊玻璃の盞子を擧起して云く。南方に還つて這箇 これがあるかと云ふことなれど底意は本分眞性の求むべきありやとの意ありや。着云く無し心性を求むるに得べからず 珠云く尋常什麼を用てか茶を喫すと。着無語此玻璃の盞子と犀牛の扇子と同意の問端なり故に今此に出す 若し這箇此公案問答 の落處を知り得ば。便ち犀牛の扇子に限りなき清風のあることを知得し。又犀牛の頭角の崢嶸高く聳ゆなることを見ん。四箇の老漢恁麼上述の如くに に道ふ。恰も朝雲暮雨の一び去つて追ひ難きか如し蹤跡を沒すとの意。雲竇復云く、若し清風再び復し、頭角重ねて生ぜんことを要さば、請ふ禪客一轉語を下せと。即ち問ふて云く扇子既に破れなば、我に犀牛兒を還へし來れと。時に一禪客あり出でゝ云く、大衆參堂し去れと。這の僧主家の權柄を奪ひ得

たり。道ひうることは也慇だ道ふ、只八成を道ひ得たり 第一機上の手段。 若し十成を要せば便ち與に禪床を掀倒せよ かくてこそ頭角崢嶸に。爾且く道へ、這の僧犀牛兒を會するか會せざるか。若し會せずんば、却て恁麼如くの に道ことを解せんや。若し會せば雲竇何に因てか伊を肯はざる。即ち什麼としてか道ふ。鉤を抛つて鯤鯨を釣る、只箇の蝦蟆を釣り得たり」と。且く道へ畢竟じて作麼生如何。諸人無事分別を離れて にして拈掇して看よ 雪竇の底意を拈掇。 して清風凜々たらん

第九十二則　世尊一日陞座す

【垂示】 絃を動ずれば曲を別つ。千載にも逢ひ難し。兎を見て鷹を放つ。一時に俊を取る 以上は賓主互に知音たることの難きを云ふ一二句は音樂の喩へを取る即ち音樂に湛能なるものは一絃の彈音を聞いて其曲の何たるを知る樣な知己を得るは困難である又兎狩に於て兎を見てすぐ鷹を放つには俊發でなければならぬ、今師家が學人を接するに當りても賓主互に作家の俊發の相見でなくてはならぬ。一切の語言を總べて一句と爲し。大千沙界を攝包して一塵と爲す。此の二句は師家の作略を述べたもの。同死同生。七逆穴八逆 此二句はかゝる師家の知音となりて同生同死の。還つて證據するものあるや否や 上述の如き賓主互に知己となりて法を擧揚する證據となるもの試みに擧す看よ。 ゆ

【本則】 擧す。世尊釋迦牟尼世尊 一日陞座堂上す 法座に上り。て說法す 文殊白槌して云く、諦かに法王の法を觀

すれば、法王の法は是の如しと。世尊便ち下座す白槌は印度傳來の最も古風の鳴り物で禪宗に於ては多くの僧に告知する時にそれを鳴らして知らせるのである太い柱樣のものを八角に削つて立てゝ臺となし其上の表面を小さなさいづちで打くのである諦かに法王の法を觀ずれば法王の法は是の如しと云ふのは禪林に於て問答をなし了つた時に證明の語として大衆に告げることになつて居る然るに今文殊は佛陀が法座に上ると直に未だ一言の說法なきに却て終結の證明をしたのである、そこで佛陀は最早や說法了れりと云ふので下座をされたのである是れ眞法の說くべきものなく人に敎へらるべきものでないとの意を示したもの即ち文殊は世尊の心底を見破り。てかくやつたのである

【評唱】世尊未だ拈花せざる已前。早く這箇の消息あり世尊が靈山に於て華を拈するに獨り迦葉のみ其玄旨を悟れりと云ふが未だかゝる事のない以前から常恒不斷に拈華微笑の消息即ち敎外別傳の。始め鹿野苑初めて此宗たる消息は歷然としてあつたのである幾曾か金剛王寶劒旨傳の玄を用ひらる。より終り拔提河雙林に於て逝去に至るまで、略ある作家の作の漢あつて綽透也ば當時衆中に衲納の氣息ある底得し去らば、他世尊の末後に花を拈ずる一場の狼籍を免れ得しならん拈花已前に已に此消息はあるのだからそれを合點して居れば何にも後に靈山に於ける拈花の故事の樣な餘計なことはなかつたであろうにとの意蓋し本分の上より見れば拈花の如き既に是れ玄機を漏洩せるこどで第二第三に落ちた落草談なれば一場の狼籍と云ふ。世尊良久の間に、文殊に一拶せられて便ち座を下る。那時其時也這箇この消息あり。又釋迦摩竭の室を掩ひて說法。淨名維摩居士口を杜づ默然として言を說かず一。皆此の這箇これに似て、則ち已に說き了れり。肅宗皇帝の忠國師に問ふて、無縫塔を造るの話の如き前にあり。又外道、佛に問ふに、有言を問はず、無言を問はざるの話是れ又前の如き。看よ他の向上の人の行履行解何幾也動ぞ曾て鬼窟裏情慮理屈の穴に入つて、活計分別を作

んや。有者は云ふ、意ろ默然の處に在りと。有者は道ふ、良久の處に在り。有言は無言底の事を明し。無言は有言底の事を明す。永嘉大師道く、「默の時說き、說の時默す」と云ふにあらずやと永嘉の語を證となすとの意。總て恁麼風にそんなに會せば、三生六十刼をふるも未だ夢にだも見得ざること在らん。儞若し便ち直下に承當し得去らば、更に凡あり聖あることを見ざらん。「是の法は平等にして高下あること無し」金剛經の文句。日々三世の諸佛と手を把つて共に行かん。後面次に雲竇の自然に見得して頌出することを看よ。

【頌】列聖叢中作者知らば、法王の法合斯の如くならざらん。會中若し仙陀の客あらば、何ぞ必しも文殊一槌を下さん前の二句と後の二句とは同意を對句にしたもの列聖叢中とは釋尊の八萬の大衆中の意、此中に若し作者又は仙陀の客あればかく釋尊は法令を行じ玉はず又文殊の白槌を打つことも餘計なことであつたろうとの意仙陀は仙陀婆の略梵語なり此の字に四義を含むと云ふ鹽、器物、水、馬の義あり涅槃經の菩薩品に或る王の侍臣に怜悧の人あり此王常に仙陀婆を持ち來れと云ふに他の侍臣は其語の鹽なるやはた水なるや等のこと分らざりしが獨り此侍臣は其意を體して決して問違はざりしと云ふ今こゝの仙陀の客とはこの人を云ふたのである

【評唱】「列聖叢中作者知らば」と、靈山の八萬の大衆は皆是れ列聖なり。文殊普賢乃至彌勒の主佛伴菩薩同會同坐す。須らく是れ巧中の巧。奇中の奇にして、方さに他の落處世尊の底意を知るべきなり。然るに雪竇意に謂へらく、列聖叢中一箇も人の有ることを知る無し向上の事を。若し箇の作家の者な

らば、方に不恁麽なることを知らん世尊陞座せず文殊白槌す。何が故ぞ文殊白槌して云ふ。諦かに法王の法を觀ずれば、法王の法は是の如しと。又雪竇道く、「法王の法令斯の如くならじ」と。何が故ぞ此の如くなる。當時會中に箇の漢作家あつて、頂門に眼を具し、肘後に符神符あつて、世尊の未だ陞座せざる已前に向て、覷見得し破らば、更に何ぞ必ずしも文殊白槌せん。當時若し箇の仙陀婆あつて、世尊未だ陞座せざる已前に向て透り去らば、猶些子本分の志旨に に較れり、世尊更に陞座す。便ち下り去る。已に是れ便宜を着けえずして了れり本分の利を得ずして空しく下り去る。那んぞ文殊の更に白槌するに湛へん一會の大衆眞源を領せざる。妨げず他の世尊の一土の提唱を鈍置することを正眼に見來れば世尊の陞座もこれ錦上の花にして餘計のことなりされば。故に白槌して注解を下す。且く作麽生か是れ鈍置の處。文殊の白槌して注釋を下したるのは世尊を鈍置すと云ふものとの意。

第九十三則　大光舞を作す

【本則】擧す。僧あり大光潭州の大光山の居晦禪師石霜の弟子に問ふ。長慶云く齋食時に因て慶讃すと、意旨如何七十四則にあり。大光舞を作す此七十四則の金牛。と同道唱和である。僧禮拜す。光云く箇の什麽を見てか便ち禮拜すと。僧舞を作す。光云く這此の野狐精と此の妖怪人眞似なし。やがつてと云ふ樣子。

【評唱】西天印度の四七二十八代の列祖唐土の二三達摩の初祖より六祖まで。只這箇の些子種々あり大光の舞亦然り諸人還つての落處を知るや否や。若し知らば此過似て非なる野狐禪の過誤を免れ得ん。若し知らずんば舊に依て只是れ野狐精なり。有者は道ふ、是れ大光の舞は他此僧の鼻孔を裂轉し來つて人を瞞ずと。若し眞個に恁麽 如くの ならば、何の道理をか成せん。大光能く人の爲にす、他の句中に出身の路あり。大凡宗師は須らく人の與に、釘を抽き楔を拔き、粘を去り縛を解くべし。方に之を善智識と謂ふ。大光舞を作す、這の僧禮拜す。末後に却て舞を作す。大光云く這の野狐精と。是れ此僧を轉破ずるにあらず。此僧畢竟じて的當的確にして適當なるを知らずして、只管に舞を作す。遞相に恁麽舞を作さばならば、幾時に到つてか休歇し去ることを得んや此の野狐精と云ふことを知らしめんとして。大光道く野狐精と。此語金牛を截斷すした語であるとなり、妨げず奇特なることを。所以に道ふ、他學人活句に參じて死句に參せざれと。雪竇只他大光の這の野狐精と道ふことを愛す。所以に頌出す。且く道へ此の野狐精と藏頭白、海頭黑七十二則にありたり。と是れ同か是れ別か。還つて知るや否や。是れ皆處に觸れて渠本來の面目に逢ふ彼等の用處其の一なりとの意。雪竇の頌に云く。

【頌】前箭は猶輕く、後箭は深し。誰か云ふ黃葉是れ黃金と此前箭とは大光が先づ舞をなせしを云ふ此の舞の機鋒はさほど手ひどくもなかつたが

最後に放つ箭の這の野狐精と云ふ一言は其の脚跡を斷絶した力がある黄葉黄金の話は涅槃經にある喩でかく大光が舞を して見せたりするのは畢竟啼いて居る小供の啼を止めるまでのものである然るに此僧は其舞を却て本分のことゝ誤認し て己れ亦其眞似をするに至つては此涅槃經の喩を知らぬと云ふもの要するに曹溪六祖大師の傳へられた宗旨が此僧。曹 の思ふ樣に機輪展轉の活用がないものであつたならば天下の參禪の人達は平地に於て溺死するに至らんと云ふので。

溪の波浪云ふ機用を如し相似たらば同一轍。限りなき平人平地の人陸沈せられん沈む放に陸沈と云ふ。沈むべきでないのに。

【評唱】「前箭は猶輕く、後箭は深し」と。大光舞を作す是れ前箭。復云く這の野狐精と、是れ 後箭なり。此は是從上來從來の爪牙なり此の如きの志機を以て天下。「誰か云ふ黄葉是れ黄金」と。仰 山衆に示して云く、汝等諸人各自に回光返照せよ。吾言を記すること莫れ。汝等無始劫來過去の幾 億年前より明本性の光明に背いて暗妄識迷暗に投ず。妄想の根深くして卒に頓みに拔き難し。所以に假りに方 便を設けて汝が麤識迷妄の情を奪ふ。黄葉を將て小兒の啼を止むるが如し。密果を以て苦葫蘆に換ゆ るが如くに相似たり。古人權に方便を設けて人の爲にす。其啼止むに及んで黄葉の金に非らざ るを說くなり。世尊一代時教を說く、也只是れ啼迷妄の情を止むるの說あり。這の野狐精只他の業識 業力によりて得たる妄情を換へんことを要す。業識を轉じて眞性。中言に返へすとの意に於て權大光の舞實此の野狐精 あり。也照用あり。方に 衲納の巴鼻眼目と云ふに同じ即本分上の作用あり。若し大光の作略を會得せば、虎の翼を挿むが如けん。「曹溪の波浪如し 相似たらば」、即ち儻忽ち四方八面の學者只管に大家學人此の如くに舞を作して一向に恁麼そんな風に舞 をしたならば

ならば、限りなき平人も陸沈せられん。即ち什麼の救ふ處があらん治術の期なけんとなり

第九十四則　楞嚴經の「若し不見を見ば」

【垂示】聲前の一句、千聖不傳。面前の一絲念、長時無間。聲前の一句とは未だ心に動機起らず從つて聲 色に表はれない以前の一句との意即ち未兆の 支機は佛祖も傳ふる能はず人々冷暖自知のもので各自に開發すべきものである此の不傳の眞際並ひに面前の一絲即ち花を見 て花と知り茶に遇ふて茶を喫する任運自然なる無作の一絲即ち心念（絲と云ふたのは我々の行動は恰かも知れざる背後より 絲にて引かれて働くようなものであるとの喩也）は過去幾億年の前より未來の未來際を通貫して活潑々。淨躶々、赤灑 地に働き三世古今即ち無限の時間空間を一念の中に攝めて居つて宇宙の大精神其まゝの現成であるから灑にして、露地清淨の地の白牛法身佛陀たり宇宙の眞相たる平等一味の丸出しで明鏡の一點の塵をも止めざるが如し是れ即ち清淨の法身佛であるとの意。眼卓朔卓立、 耳卓朔たる金毛の獅子は則ち且く置く獅子の耳を聳やかし眼をそばだてゝ全威を全うせる處即ち。且く道へ 作家の活作略は言詮の及ばざる所なるが故に今は論ぜず 作麼生か是れ前述露地の白牛なる。

【本則】擧す、楞嚴經に云く、吾が不見の時に何ぞ吾の不見の處を見ざる。此經は阿難の爲に佛が說かれた經にして 從來尤も多く人に愛讀せらるゝ經である今此に引用された文も佛が阿難に教誡せられたる一節である此れは評唱にもあ る通り此文の前に容觀の事物には種々名相あるも見る方の主觀より云へば何人も差別はない佛の見るのも衆生の見るのも平等一味である是れが汝の眞性であると敎へて更に此問答に入つたわけである即ち見ると云ふことは客觀の物に屬す るが故に我が見る處を汝が知るを得んとせば其反對なる不見即ち絶對眞性なるものゝ知見を超絶せることは自ら汝に知 れる譯ではないかと反詰せられたのである。若し不見を見知り得ると云はゞ、自然に彼は不見の相に非らず知見に上るものなれば知見

を超絶せる眞性其物にあらずとの意。然るに若し吾が不見の處を見ずんば、自然に物に非らず若し全く不見の處即ち見性、法性と云ふものは知見すべからざるものでありとせば其れは自然に知見に上りて。見らるゝ物でなく絶對の法身であらうとの意。云何ぞ汝に非らん眞見即ち見性は汝の眞性でなければならぬとの意。

【評唱】楞嚴經に云く、吾が不見の時。何ぞ吾が不見の處を見ざる。若し不見を見ば自然に彼見性即法性の不見の相に非ず。若し吾が不見の地を見ずんば、自然に物に非ず。云何が汝に非らんと。雪竇此に到つて本則に於て。經文を引いて盡さず全文を引用せず。全く引かば則ち其底意を見るべし。經に云く若し見是れ物ならば、則ち汝も亦吾の見を見るべし。若し同じく見るものを名づけて、吾を見ると爲さば、吾が不見の時何ぞ吾が不見の處を見ざる、若し不見を見ば自然に彼の不見の相にあらず。若し吾が不見の地を見ずんば、自然に物に非らず。云何が汝に非ざらんと。辭多くして錄せざりしなり。阿難の意に道く。世界の燈籠露柱皆名あるべし。亦要ならず世尊此の妙精元明見性即ち本體を指出して、喚んで什麼ものと作して、我をして佛意を見せしめんと。世尊云く。我れ香臺を見る。阿難云く我も亦香臺を見る。即ち是れ佛見なり佛見と異らずとの意。世尊云く我れ香臺を見ることは則ち知るべし。我れ若し香臺を見ざるとき、儞作麼生か見る。阿難云く我れ香臺を見ざるとき即ち是れ佛を見奉る。佛云く我が不見と云はば、自ら是れ我れ知る、汝が不

見を云ふことは自ら是れ汝知る。他人の不見の處儞如何か知ることを得んと眞性は自悟。古人云く這裏に到りて、只自知すべし人の與めに說くこと得ずと。只世尊の吾が不見の時何ぞ、吾が不見の處を見ざる。若し不見を見ば自然に彼の不見の相にあらじ、若し吾が不見の地を見ずんば、自然に物にあらず、云何が汝にあらざらんと道ふが如くんば。若し見を認めて物ありと爲すと道はゞ、未だ迹を拂ふこと能はず。吾が不見の時羚羊の角を掛くるが如し。聲響蹤跡氣息都て絶す、儞什麼の處に向てか模索せん。經の意初めは縱破、後は奪破。雪竇敎眼を出超出して頌す。亦物をも頌せず。亦見ると見ざるとをも頌せず直に只見佛を頌す。

【頌】全象全牛瞽眼病殊ならず、從來の作者作家共に名摸す全象全牛のこと評中にあり要するに全象を見ると云ひ全牛を見ずして解くと云ふ上手なものではあるが其見るとか見ないとかと云ふ處が已に共に眼病であつて二見對待の眼病者と異ならない古今共に名摸して何とかかとか云ふて批評をし來つたが皆徒然のことであると抑へたもの。如今黃頭老陀佛を見んと要せば。刹々塵々半途に在り眞の釋迦如來を見んとするにはかゝる見とか不見とか云ふものを一切離れて見なければならぬ彼の刹土即ち世界は無量無邊にして百千萬億の世界には各々一々佛ありて一佛土となつて居るがその佛は其れが報身應身の佛で其本體たる眞佛即法身佛ではないされば法身無相佛はまだ〳〵見ることは出來ぬ尙半途にあると云ふものとの意

【評唱】「全象全牛瞽殊らず」と。衆盲象を摸て各異端を說く。涅槃經師子孔品に出でたり。僧仰山に問ふ和尙人の禪を問ひ道を問ふを見て、便ち一圓相を作して中に於て牛の字を書す、意

何にかある。仰山云く這箇也是れ閑事是れ實法にあらず。忽に若し會得せば外より來らず本具なる。忽に若し會せずんば決定して識らざらん。我れ仰山且く儞に問はん。諸方の老宿儞が身上に於て、那箇か是儞が佛性と指出する。爲復語底が是か默底が是か是不語不默底の是なることなしや。爲復總に是か。爲復總に不是か。儞若し語底是と認めば、盲人の象尾を摸着するが如し。若し默底是と認めば、盲人の象鼻を摸着するが如し。若し不語不默底是と認めば、盲人の象耳を摸着するが如し。若し總に不是と着するが如し。若し物々都て是と道はゞ、盲人の象の四足を摸着するが如し。若し總に不是と道はゞ、本象を拋て空見に落在す。是の如く象盲の所見、只象上に於て名邈差別す。儞ぢ好からんことを要せば、切に象を摸すことなかれ。道ふことなかれ見覺是と。亦道ふことなかれ不是と。祖師云く菩根本樹なし。明鏡亦臺にあらず。本來無一物爭か塵埃に染ることを得んと。又云く道本形相なし。智慧即ち是れ道。此の見解を作す者是れを眞の般若智慧と名くと。明眼の人は象を見て其の全體を得。佛の見性の如きも亦然り。全牛と云ふは莊子に出でたり。庖丁牛を解く未だ嘗て其全牛を見ず。理に順て解く刀を游ばしむること自在なり。更に手を下すことを須ひず、纔かに目を擧する時、頭角蹄肉一時に自ら解け了る。是の如くすること十

九年、其刄の利こと新に硎より發するが如し。之を全牛と謂ふ。然も此如く奇特なりと雖も、雪竇道く縱今此の如きなることを得るも、此全象全牛眼中の瞥と殊ならず。從來の作者共に名模すと。直に是れ作家なるもの也。裏頭眞佛眞性に去て摸索し着す。迦葉より乃至西天此の土の祖師、天下の老和尙皆只是れ名摸す。雪竇直截して道ふ、如今黃老頭を見んと要すや。所以に道ふ見ん要せば即ち見よ、更に尋ね覓めて方に見んと要せば、則ち千里萬里なり。黃頭老は乃黃面老子なり。儞如今見んと要すや、刹々塵々半途にありと。尋常道ふ一塵一佛刹。一葉一釋迦と。盡く三千大千世界のあらゆる微塵只一塵の中に向て見るも、恁麼の時に當て猶半途にあり。那邊更に半途の在るあり。且く道へ什麼の處にかある。釋迦老子尙ほ自ら知らず、山僧をして作麼生か說得せしめん。

第九十五則　長慶の三毒

【垂示】有佛の處も住することを得ざれ。住着すれば頭角生ず凡て如何なるものでも執れて住着れば其處に一物珍重の人となりて角か生へて自由を失ふものである我は佛なり。無佛の處も急に走過せよ。走過せざれば草深きこと一丈ならん有佛已に然りと住するも亦同じ故にかく云ふ

無佛豈に然らざらんや我手裡佛法禪道の眞氣なしと住着する即ち凡聖迷悟一切を打ち拂ふた處が佛祖の立脚地であると膝を下せば本分の自己を沒却する草裡に墮せん蓋し自己本分の眞性は無住の住にして自在に行く處範となるもので固着的のものでない。即ち淨躶々赤灑々として、事事相即外に機心的發動なく客觀を離れて圭。機外に事なくとも主觀の外に客觀はないからだ。

と物心一如境智冥合神人一如を體得しても未だ免れず株を守つて兎を待つことを由は得られぬとの意。且く道へ總に不恁麽、作麽生如何か行履安心せん斯樣になにもかも拂ひ去つたならどうしたものか。試みに舉す看よ。

【本則】舉す、長慶慧稜禪師雪峰の弟子或時云く、寧ろ阿羅漢梵語評に委し煩惱の一切を斷盡した聖者に三毒貪慾、瞋恚、愚痴の根本煩惱なりありと說くとも、如來佛世尊に二種の語眞實の語と方便の說と云ふ表裏ある語の意ありと說かず。如來に語なしとは道はず、只是れ二種の語なしと是は佛には種々の語說ありと雖ども其差別ある所以のものが直に其まゝ唯一乘の法にして二もなく三もなしと說き玉ひたるを云ふ即ち本際の上より見れば元來物々全眞になるが爲なり圓成。保福從展禪師雪峰の弟子云く、作麽生か如來の語。慶云く聾人爭でか聞くことを得ん何な聾人であればならぬ。保福云く實參せ。保福云く情に知んぬ儞第二頭に向て道へることを未だ第一機には遠い即ち本地の風光ではないぞと抑ゆ。慶云く作麽生か如來の語。保福云く契茶し去れ茶でも飲んだがよいとの文意是れ保福の如來語である凡を問答は機合のもの故死んだ文字に表はれた言葉だけでは其場の機合が分らんものだが要するに如來の語。は知解に上るものではない。

【評唱】長慶保福雪峯の會座下に在つて、常に互に相ひ擧覺商量す。一日平常に此の如く說話して云く、寧阿羅漢に三毒ありと說も、如來に二種の語ありと說かずと。梵語には阿羅漢。

此には殺賊煩惱の賊を殺すの意と云ふ。功能を以て名を彰はす。能く九九八十一品の煩惱を斷じて。諸漏無明已に盡き、梵聖行已に立す。此は是れ無學更に斷ずべきなく學ぶべきことなきが故に無學と云ふ阿羅漢の位なり。三毒は即ち是れ貪瞋癡の根本煩惱なり。八十一品すら尙自ら斷し盡す、何かに況や三毒をや。長慶道く寧阿羅漢に三毒ありと說くとも、如來に二種の語ありと說かずと。大意如來に不實の語なきことを顯はんことを要す。法華經に云く此の一事實。餘の二は則ち眞にあらずと。又云く唯一乘の法のみありて、二も無く亦三も無しと。世尊三百餘會機を觀て敎を逗投合の意なりし。病に衆生の應じて藥を與ふ。萬種千般の說法畢竟して二種の語なし。他の意佛意這裏に到りて諸人作麽生か見得せん。佛一音を以て法を演說することは即ちなきにあらず、長慶要且つ未だ夢にも如來の語を見ざることあり。何が故ぞ大に人の食を說いて、終ひに飽くこと能はざるに似たり。保福他長慶の平地上に敎へを平生に敎へて說くを見て遂に問ふ。作麽生か是れ如來の語。慶云く聾人爭か聞くことを得んと。這の漢知んぬ他長慶幾れの時か鬼窟裏に在つて、活計を作し來らんと。保福云く情とに知ぬ。儞第二頭に向て道ふことを。果して其言に中れり。却て問ふ師兄作麽生か是れ如來の語。福云く喫茶し去れと。鎗頭倒に別人に奪却し了る。大小の長慶失錢遭罪。且く諸人

に問はん。如來の語還て幾箇かある。須らく知るべし。恁麼に見得して方に這の兩箇の漢の敗缺を見ることを如來に語ありと云ふ。既にこれ敗缺なり 子細に見點し將ち來れば、盡く保福長慶棒を喫するに合せん。一線道を放つて保福這の絶域に於て。他長慶のために理會せしむ。有底は云ふ保福道ひ得て是なり。長慶道ひ得て不是なりと。只管に語に隨て解を生じて便ち道ふ、得あり失ありと。殊に知らず古人二大老擊石火の如く閃電光に似ることを。如今の人他の古人の轉處に去て看ず。只管に句下に去て走て便ち道ふ、長慶當時便ち用ひず、所以に第二頭に落つと。保福云く喫茶し去れと、便ち第一頭地にありて云ふと。若し只恁麼此の如くに看ば、彌勒下生に到とも、也た古人の意を見ず。若し是れ作家ならば終に這般の見解を作さず。即ち這の窠窟句下に死却するを跳出して、向上に自ら一條の路あり。這本則の因緣徧身是通身是の因緣と一般なり。儞が計較是非の處無し。須らく是れ儞が脚跟下淨躶々地にして、方に古人二大俊の相見の處を見るべし。這箇の公案若し正眼を以て之を觀て、俱に得失なき處に箇の得失を辨じ。親疎なき處に這の親疎を分たば、長慶也た須らく保福を禮拜して始めて得べし。何が故ぞ。這箇の些子の巧處用ひ得て好し本分契當の用處保福用ひ得て巧妙なりと の意。電轉じ星飛ぶが如くに相似たり。保福妨げず牙上に牙を生じ、爪上に爪を生ずることを。頌に云く。

【頌】 頭たり第一第二用ひたもの第一頭第二頭と云ふべきを斯く轉倒して 月あつて波澄む。有處龍の居る淵には風なきに浪起る 第一頭地だの第二頭地だのと云ふ其の間に如來の無語の語を知らんとせば終に會するの期なしと云ふのが第一句の意次の三句は第一第二等の數量に落。ちない活物なるを喩へて頌したもの 稜長慶は名を慧稜と云ふ禪客、稜禪客長慶の名を云ふて。三月禹門點額に遭ふ 此の二句は長慶が如來の語にて倒まに保福の點檢に遭ひ却て如來の語を透過せざりし樣子を頌したもの即ち長慶は禹門三級の登龍門を登らんとして却つて保福の爲に落された處は彼の魚が三月桃花の咲く頃に禹門の三段の瀑布を透過して龍とならんとせしに力及ばずして禹門の下に落された樣なものだとの意

【評唱】「頭たり第一第二」と、人只管に第一第二を會せば、正に是れ死水裏に活計を作す。這箇保福喫茶し去れのところの機巧儞ち只第一第二の會を作さば、且く模索不着なることあらん。雪竇云く、「臥龍止水を鑒みず」と。死水裏豈に龍あつて藏れんや。若し是れ第一第二ならば、正に是れ止水裏に活計を作すと云ふ。須らく是れ洪波浩渺白流滔天の處に方に龍有て藏るべし。正に前頭に十二人則澄潭には許さず蒼龍の蟠ると云ふに似たり。道ふことを見ずや死水龍を藏さずと。又の話に道ふ臥龍長く怖る碧潭の清きことをと。所以に道ふ龍無き處は月あつて波澄み風恬かに浪靜かなり。龍ある處には風なきに浪を起すと。大に保福喫茶し去れと道ふに似たり。正に是れ風無

きに浪を起す。雪竇這裏に到りて、一時に儞が與に情解を打疊して頌し了れり。他雪竇餘韻あつて文理文章修理を成さしむ。依前として裏頭に就て一隻眼を着く、妨げず奇特なることを。却て道ふ「稜禪客稜禪客、三月禹門點額に遭ふ」と。長慶は是龍門を透る底の龍なりと雖も、却て保福に鼻頭に一點せらる。

第九十六則　趙州の三轉語

【本則】趙州衆に示す。三轉語 此に三轉語とあるは趙州がかく云ふたのではない或時の上堂の法語に云く「金佛鑪を渡らず、木佛火を渡らず、泥佛水を渡らず、眞佛屋裡に坐す乃至一心生ぜざれば萬法咎なし」とある。今雪竇が其始めの三句を取つて來て三轉語と名づけて一句づゝに頌を作りて三句となせしものなりされば此の則には三句あり。轉語とは學人の機根に投合して言へる語との意にしてそれが單に一句なれば一轉語なり二句あれば二轉語三句なれば三轉語と云ふ以下此に順ず。今此の本則には其三轉語の文句なし各々頌の頭句に用ひられたり

【評唱】趙州此の三轉語を示し了て、末後に却て道ふ。眞佛屋裏に坐すと。這の一句忒煞だ郎當惱なり。他の古人州一隻眼を出して、垂手して人を接す。略此の語三轉語を借つて、箇の消息自性眞佛の消息を通じて人の爲にせんことを要す。儞若し一向に正令を全提本分上の全機全用を提起せば、法堂前の草深きこと一丈ならん。

雪竇他の末後の一句眞佛屋裡に座す漏逗漏洩を機をすることを嫌ふ。所以に削り去りて只三句を頌す。泥佛若し水を渡らば則ち爛却し了らん。金佛若し爐中を渡らば則ち鎔却し了らん。木佛若し火を渡らば便ち燒却し了らん。什麼の會し難きことかあらん。雪竇一百則の頌古。計較葛藤す分別に渉り或は言語を弄すとの意。唯此の三頌直下に衲僧の氣息あり。只是れ這の頌也た妨げず會し難きことを。儞若し此の三頌を透得せば、便ち儞に罷參學の能事終れることを許さん。

【頌】泥佛水を渡らず。作つたものだから水に入れば蕩けることは分つたことだが世人は此泥佛が土に還つて始めて實在の本體界に歸するものと思ふから未だ水を渡ら。神光天地を照らす。雪に立つて如し休安心まずんば何人か彫僞り眞似せざらんず泥土其まゝで靈光を放つて居ると云ふことを表はす。即ち泥佛は泥佛のまゝにて神光を照らして居るが然し其性具の德用を自由に使用し得らるゝようになるには二祖大師が雪中に臂を斷ちたると同じく修行を要するのである只夫れ修して後悟を得るのではない只修せざれば其光明を用ひ得ないでたとへ用いたにしても誤用をするのである此れ修證不二の問題なるも要するに理論は兎もあれ實際に性具の光明を縱横に受用不盡の境域に達するのが歸着の所である若し修行を全く要せずとならば何人か彫僞せざらんで似て非なる僞物の悟り計りとなると意。

【評唱】「泥佛水を渡らず。神光二祖大師天地を照す」と。這の一句に頌すること分明にし了る。且く道へ什麼と爲してか、却て神光を引く。二祖初め生る時神光室を燭して霄漢天に亘る。又一夕神人現して二祖に謂て曰く、何ぞ此に久しき。汝當に得道すべき時至れり。宜く即ち南す

べしと。二祖神遇神靈の直遇を以て遂に神光と名く。久しく伊絡に居して、博く群書を極む。毎に嘆じて曰く孔老の敎へは禮術の風規なり。近ごろ聞く達磨大師小林に住すと。乃ち彼小林に往て晨夕參扣す。達磨端坐面壁して誨勵を聞くことなし。光自ら忖つて曰く、昔人道を求むるに骨を敲き髓を出す。血を刺して飢を濟ひ、髮を布きて泥を掩ふ。崖に投じて虎に飼ふ以上の三事蹟は釋尊の跡。古人へ尙を此の若し、我れ又何如ぞやと。其の年十二月九日の夜大に雪ふる。二祖砌下に立つ、明くる遲い積雪膝を過ぐ。達磨之を憫れみて曰く。汝雪に此に立つ當に何の事をか求むべき。二祖悲涙して曰く、惟願はくは慈悲甘露門を開いて、廣く群品を度し給へ。達磨曰く諸佛の妙道曠劫に精勤して、行じ難きを能く行じ。忍ばざるを、而も忍ぶ。豈に小德小知輕心慢心を以て、眞乘を冀はんと欲せば是の處はりあることなし。二祖誨勵を聞て道に向ふこと益々切なり。潛かに利刀を取りて自ら左臂を斷て達磨の前に致置なく。磨是れ法器なることを知つて遂に問て曰く。汝雪に立て臂を斷つ、當に何事の爲にすべき。二祖曰く某甲し心未だ安からず、乞ふ師安心せしめ玉へと。磨曰く心を將ち來れ、汝が與めに安せん。祖曰く心を覓むるに、了に不可得なり。達磨曰く汝が與めに安心し竟んぬと。後に達磨爲に其の名を易へて

慧可と曰ふ。後に三祖の燦大師を接得す。既に法を傳へて舒州の皖公山に隱る。後周の武帝佛法を破却し僧を沙汰するに屬して、師太湖縣の司空山に往來す。居に常の處無し、十餘載を積んで人の知る者無し。宣律師の高祖傳に、二祖の事を載ること詳ならず。三祖の傳に云く、二祖妙法世に傳らず、賴に末後依前として、他の當時雪に立ことを悟るに値ふと後四祖は二祖立雪の玄旨を悟るに値ひ三祖の妙法世にあらはるゝ云ふたもの。所以に雪竇道く、雪に立つこと如し休まずんは、何人か彫僞せざらんと。雪に立つて若し休まずんば、足恭僻貌諂詐の人皆之に效ふて、一時に只彫僞を成さば、則ち是れ諂詐の徒とならん。雪竇泥佛水を渡らざることを頌す。什麼としてか却て這の因緣を引き來て用ふる。他雪竇參得して意根下に一星事胸襟無一物の意無く、淨躶々地にして、方に頌し得ること此の如し。又傳太士の頌に云く、空手にして鋤頭を把り、步行にして水牛に騎る。人は橋上より過ぐ。橋は流れて水は流れずと。又云く石人の機汝に似たらば、也た巴歌を唱ふことを解せん。汝若し石人に似たらば、雪曲も應に須く和すべしと。若し此の語を會得せば、便ち他の雪竇の頌を會せん。

【頌】 金佛鑪を渡らず是は三轉語の第二句。人來つて紫胡和尙を訪ふ。牌中數箇の字。淸風何の處

にか無からん　金佛なる故に鑪鞴の中に入れば皆溶ける今は金佛の地金其まゝ佛である此法身佛たるや思議に渡れば早く背く其た紫胡利蹤禪師のことにて説明したもの、此和尚は南泉の弟子にて一疋の猛犬を飼ひ門前に碑を立てたること評中に細かなるが要は擬議に渡れば金佛との相見は出來ないと云ひ末句は宇宙の萬象其まゝが黄金佛たる法身の本體であつて本地清風は何れの處にも行き亘つて居るを云ふ。

【評唱】「金佛鑪を渡らず。人來りて紫胡を訪ふ」と。此の一句亦頌し了れり。什麼としてか却て人來りて紫胡を訪ふことを引く、須く是れ作家の鑪鞴にして始めて得べし。紫胡和尚山門に一の牌を立つ。牌中に字あり。云く紫胡に一狗あり。上は人の頭を取り中は人の腰を取り下は人の脚を取る。擬議せば則ち喪身失命すと。凡そ新到新たに來る僧を見ては便ち喝して云く、狗を看よと。僧纔かに首を回せば紫胡便ち方丈に歸へる。且く道へ什麼の爲めか、却て趙州を咬むことを得ざる。紫胡又一夕夜深して後架に於て叫で云く、捉賊々々と。黑地に一僧に逢着す。欄胸に捉住して云く、捉へ得たり捉へ得たりと。僧云く和尚是れ某甲にあらずや。胡云く是なるとは則ち是。只是れ肯て承當せずと。儞ぢ若し這の話を會得せば便ち儞ぢに許す。一切の人を咬殺して處々清風凜々たることを。若し也た然らずんば牌中數箇の字決定して奈何ともせじ。若し他牌中の辭を見んと要せば、但透得し盡くして方に見よ。頌に云く。

【頌】　木佛火を渡らず　三轉語の。常に思ふ破竈墮　和尚嵩山の懸。安國師の弟子。杖子忽ちに擊着す。方に知る我

に辜負することを　意前と同一なり破竈墮和尚のこと評中にあり、要するに何事にまれ業風に吹かれて性具の本佛に相見し受用せざる間は皆其自性に辜負するのであつるが一旦自覺し來れば大我と冥合して大我の應用無限なるを知らんとの意。

【評唱】「木佛火を渡らず。常に思ふ破竈墮」と。此の一句に亦頌し了れり。雪竇此の木佛火を渡らざるに因で、常に破竈墮を思ふ。嵩山の破僧墮和尚姓字を稱せず。言行測り叵し。嵩山に隱居す。一日徒を領して山塢の間に入るに廟あり甚だ靈なり。殿中に唯一竈を安ず。遠近祭祀して輟まず。物の命を烹殺すること甚だ多し。師廟中に入て柱杖を以て竈を敲くこと三下して云く。咄汝本塼土にて合成す。靈何れより來り。聖何より起て恁麼に物の命を烹殺すと云ふて、又乃擊こと三下す。竈乃ち自ら傾き破れて墮落す。須臾にして一人の青衣峩冠なるあつて忽然として師の前に立つて拜を設て曰く、我れは乃ち竈神なり。久く業報を受く、今日師の無生法を説くを蒙て、已に此の處を脱して生して天中にあり。特に來て謝を致す。師云く汝が本有の性なり吾れ强て言ふに非ずと。神再拜して沒す。侍者云く某甲等久く和尚に參侍す、未だ指示を蒙らず、竈神何の徑旨を得てか、便ち生天す。師曰く我れ只伊に向て道ふ。汝本と塼土より合成す。靈何れよりか來り聖何れよりか起ると。侍僧俱に對ふるなし。師云く會すや否

や。僧云く會せず。師云く禮拜せよ。僧禮拜す。師曰く、破なり破なり。墮なり墮なりと。侍者忽然として大悟す。後に僧あり安國師に擧似す。師歎じて云く此の子物我一如なることを會し盡すと。竈神此を悟ることは則ち故らに是。其の僧乃ち五蘊を以て身を成す。亦破なり墮なりと云へば、二神侍者とり俱に開悟す。且らく四大五蘊と、塼瓦泥土と是れ同か是れ別か。既に是れ此の如し塼瓦合成の竈神も悟り去り。五蘊身もまた開悟すとの意雪竇什麼と爲してか道ふ。「杖子忽に擊着す。方に知ぬ我れに辜負することを」と。甚に因てか却て箇の辜負と成り去る。只是れ未だ柱杖子法性に喩ふを得ざることあり眞性の木佛に契當せざるが爲なり。且らく道へ雪竇木佛火を渡らざることを頌す。什麼としてか却て破竈墮の公案を引く。老僧直截に儞ぢが與めに說く。他雪竇の意只是れ得失情塵意想を絶して、淨躶々地にして自然に他の親切の處を見ん。

第九十七則　金剛經の輕賤

【垂示】一第一義門を拈住し一第一義門を放つ。未だ是れ作家にあらず。一を擧ぐれば三を明らむ。猶ほこれ宗旨に乖く常に第一義門を以て把住し放行して自在なるを作家かと云ふにそうでない又一。直に天地陡遽也變遽に變を擧ぐれば三を知る伶俐のものでも尙金剛般若の玄旨に背くとなり否な〳〵

すし。四方絕唱天下の人皆聲を呑むもし。雷奔電馳して、雲行き雨驟く。湫を傾け嶽を倒し、甕の如くに瀉き盆の如くに傾くことを得るも、也未だ一半を提げ得ざることあり かくの如く如何に見事なるも未だ金剛般若の一半をも提起することを得。還つて天關を轉ずることを解し。地軸を移す底のものありや否や上述のことはたとひどうあろうとも悉く天地の間に於けること今は其根元たる天關地軸を轉移し迷悟凡聖を一掃し。試みに擧す看よ。

【本則】擧す、金剛經に云く、若し人の爲に輕賤せられんに此文の前に此經を受持し讀誦してと云句ありて本則の文に續くのであるされば此經を受持して而も尙人に輕んじ賤められることがあつたならばの意となる世の人に輕賤せらるゝを以ての故に。先世の罪業、則ち爲に消滅す底意評頌に入りて參ず。

【評唱】金剛經に云く若し人の爲に輕賤せられんに、是の人先世の罪業あつて、惡道に墮すべし。今世の人に輕賤せらるゝを以ての故に、先世の罪業則ち爲めに消滅すと。只平常の講究に據らば、乃ち經中に常に論ず文理の如き常談なり。雪竇拈じ來て這の意を頌す。敎家鬼窟裏の活計分別を打破せんと欲す。昭明太子此の一分を科して、能淨業障と爲す。敎中の大意此の經の靈驗を說く。此の如きの人先世に地獄の業を造る。善力强きが爲めに未だ受けず。今世の人に輕賤せらるゝを以ての故に、先世の罪業を消滅す。此の經故らに能く無量劫來の罪業を消し

て、重きを轉じて輕きと成し、輕きを轉じて受けざらしめ、復た佛果菩提を得せしむ。敎家に據らば此の二十餘張の經を轉ずるを、便ち喚で持經と作す。什麼の交渉かあらん。有底は道ふ經自ら靈驗ありと。若し恁麼ならば儞ぢ試に一卷を將て閑處に放在して看よ。他經の感應ありや也た無しや。法眼文益禪師云く佛地を證する者を此の經を持つと名くど。經中に云く一切諸佛及び諸佛の阿耨多羅三藐三菩提無上正徧智の法は皆此の經より出づと。且く道へ什麼を喚んでか此の經と作さん。是れ黃卷赤軸底是なることなしや。且く錯て定盤星を認むることなかれ株を守つて兎を得るなかれとの意。金剛は法體の堅固なるに諭ふ。故に物壞すること能はず。利用なるが故に能く一切の物を摧く。山に擬すれば則ち山摧け、海に擬すれば則ち海竭く、諭へに就て名を彰す。其の法亦然り此般若に三種あり。一には實相般若。二には觀照般若。三には文字般若。實相般若は即ち是れ眞智なり。乃ち諸人脚跟下一段の大事今古に輝騰して、迥に知見を絶す。淨裸々赤灑々たるもの是なり。觀照般若と云ふは即ち是れ眞鏡なり。二六時中放光動地して聞聲見色のもの是れなり。文字般若と云ふは即ち能詮の文字なり。即ち如今說者聽者且く道へ。是れ般若か是れ般若にあらざるか。古人道く人々一卷の經あり。又道く手に經卷を執らずして常に

此の如き經を轉ずと。若し此の經の靈驗に據らば、何ぞ止重きを轉じて輕からしめ、輕きを轉じて受ざらしむるのみならん。設令聖に敵する功能も未だ奇特とせず。見ずや龐居士金剛經を講ずるを聽いて座主に問て曰く、俗人敢て小問あり知らず如何問を許さん。主云く疑あらば請ふ問へ。士云く我相もなく人相もなし。既に我人の相無くんば、阿誰をして講じ阿誰をして聽かしめんと。座主對ふる無し。却て云く某甲文に依て義を解す此の意を知ずと。居士乃ち頷あり云く、我も無く亦人も無し。作麼疎親あらん。君に勸む座を歷ことを休めよの意。休講。爭でか直に眞を求むるに似ん。金剛般若の性外か一纖塵を絶す。我れ聞く幷に信受、總に是れ假りに名を稱ずと。此の頌最も好し分明に一時に說き了れり。圭峰四句の偈を科して云く、凡そ所有の相は皆是れ虛妄なり。若し諸相は相に非ずと見ば即ち如來を見んと。此の四句の偈の義全く佛地を證する者を、此の經を持すと名くと云ふに同じ。又道く若し色を以て我を見、音聲を以て我を求めんに、是の人邪道を行ひ如來を見上ることと能はずと。此亦四句の偈但中間其の義全きものを取る字句の中義全——備。するものを取るの意。僧晦堂に問ふ。如何が是れ四句の偈、晦堂云く話墮するも亦知ずと四句を認むる故に。雪竇此の經上に金剛經於て指出す金剛の正體を指出するの意。若し人あり此の經を持せんもの

即ち是れ諸人本地の風光本來の面目なり。若し祖令當行に據らば、本地の風光本來の面目も亦斬て三段と爲さん。三世の諸佛十二分教一揑を消用せず。這裏祖令當行のときに到りて、設使萬種の功能あるも此の經に萬功能。亦管得すること能はず。如今の人只管に經を轉じて都べて是れ箇の什麼の道理と云ふことを知らず。只管に道ふ我れ一日に多少をか轉得すと。只黄卷赤軸巡行數墨を認む。殊に知らず全く自己本心の上より起ることを。這箇唯是れ轉處の些子なり轉處は實に幽の意なりと。大珠和尚云く、空屋の裏に向て、數函の經を堆して看よ。他經の光を放つや否や只自家一念發する底の心是れ功德なるを以てなり。何が故ぞ萬法は皆自心より出ず。一念是れ靈なり。既に靈なれば即ち通ず、既に通ずれば即ち變ず。古人道く青青たる翠竹盡く是れ眞如。鬱鬱たる黄花般若に非ずと云ふことなしと。若し見得徹し去らば即ち是れ眞如。若し未だ見得せざれば、且く道へ作麼生か喚で眞如と作さん。華嚴經に云く、若し人三世一切佛を了知せんと欲せば、應に法界の性は一切唯心の造なることを觀ずべしと。儞ぢ若し識得し去らば、境に逢ひ緣に遇ふて主となり宗とならん。若し未だ明得すること能はざれば、且く伏して處分を聽け。雪竇眼を出して、大槩を頌して、經の靈驗を明めんと要す。頌に云く。

【頌】明珠掌に在り。功ある者は賞す　金剛般若の體性を明珠に喩へて云へたもの此譬喩は法華經の安樂行品より引用したものなり即ち輪王が諸國を降伏するに當り功勞の多少によりて各々賞を與ふるも唯髻中の明珠のみは他に與へないとのことであるが今雪竇は此明珠を掌中に收めて居るから何人にても佛地を證したものに與へてやるとの意。胡漢來らず。全く伎倆なし。伎倆既になし。被句之を窺ふの途を失す　此は金剛の性體たる明珠なるが故に森羅萬象何物と雖ども皆な映出するけれども今は胡人も來れば漢人も來ないによりて映し出す伎倆作用はない即ち本體上には胡漢凡聖迷悟罪不罪善惡等の一切の形象を泯絶せるを以て罪業の求むべきなく亦消滅等のことなし、即ち非善惡を泯絶し得失取捨の念其影を沒す。罪を以て寃の據るべき處なければなり。瞿曇瞿曇釋尊の名を呼び來つて。我を識るや世無しや　否な惡寃と云はずたとひ佛と雖ども全く伎倆を泯絶せる絶對の境界を窺ふことはよも出來まい此雪竇。復云く勘破了やて　これ佛寃を一齊に勘破して雪竇第一人となつたもの。那邊の向上地より消息を通じた樣子を云ふの。

【評唱】「明珠掌にあり。功ある者は賞す」と。若し人あつて此の經を持し得て、功驗あらば則ち珠を以て之を賞す。他功ある底の云ふ此の珠を得て自然に用ふることを會す順逆上に於て用ひ得て快なりとの意。即ち胡來れば胡現じ漢來れば漢現ず、萬象森羅縱橫に顯現す。此は是れ功勳なりと云ふ。法眼云く佛地を證する者を此の經を持すと名くと。此の兩句に公案を頌し畢れり。「胡漢來ず全く伎倆無し」と。雪竇鼻孔を裂轉す句の面目を換。也た胡漢あつて依る則んば儞ぢをして現ぜしむ。若し忽ち胡漢俱に來らざるとき又且つ如何ん。這裏に到りて佛眼も亦覷れども見へず。且く道へ是れ功勳か是

れ罪業か、是れ胡か是れ漢か。直に羚羊角を掛るに自由を失に似たり。道ふことなかれ聲響蹤跡氣息も也た無し。什麼の處に向てか摸索せんと。諸天をして花を捧ぐるに路無く、魔外をして潜に覷るに門無からしむるに至る。是の故に洞山和尚一生住院するに。土地神他洞山の蹤跡を覓むるに見ず。一日厨前に米麪を抛撒するあり。洞山心を起して曰く。常住の物色何んぞ輕んずること此の如きことを得たると。土地神遂に一見することを得て、便ち洞山禮拜す（これ一念纔に起れば鬼神の爲めに窺はるゝ隙を生ず。雪竇道く伎倆既に無しと。若し此の伎倆無き處に到らば、波旬惡魔も也た途を失せるを以てなり）しむ。世尊一切衆生を以て赤子と爲す。若し一人あつて發心修行すれば、波旬の宮殿之が爲めに振裂す。他便ち來て修行者を惱亂す。雪竇道く直饒波旬恁麼に來るも也須らく途路を失却して、近傍の處無かるべしと。雪竇更に自ら點胸肯して云く。「瞿曇々々我を識るや也た無しや」と。道ふこと莫れ是れ波旬と。任ひ是れ佛來るとも還て我れを識らんや也た無しや。釋迦老子尚ほ自ら見ず諸人什麼の處に向てか摸索せん。「復云く勘破し了れり」と。且く道へ是れ雪竇瞿曇を勘破するか瞿曇雪竇を勘破するか。具眼の者試に定當して看よ。

第九十八則　天平和尚の兩錯

【垂示】　一夏安居と云ひ四月十五日より七月十五日までの九十日間多數の僧衆禁足靜養して勞々饞舌專ら修道するを云ふ印度にては此三ヶ月間は霖雨なるを以て之を雨安居と云ふ　叫々の意として葛藤言語を打作成す。此垂示は百則の最終の吹毛の劒の垂示で百則の垂示が當則の垂示なりしを寫誤したるものと云ふ然し百則の垂示にも最終の垂示たる文勢あるにより今は此まゝとして置く兎に角九十日間の安居の間種々に言詮を用ひ來つての意。幾んど五湖の僧を絆倒纏繞す。色々言句を以て五湖の地方より集まり來れる僧衆を煩はしたのであるが意。覺ふ從來は總て百不能なりしことを今最終の拈提に臨んで從來の言說を一時に金剛の寶劒を以て截斷せば從來の一切の言說は何にも用に立つものでないことが明らかだと云ふて卑下をしながら底意は本分の地に於ては言詮を絕するとの意を表はしたもの。且く道へ、作麼生か是れ金剛の寶劒。眉毛を貶上動して、試に請ふの金剛鋒鋩を露はすを看よ。

【本則】　擧す、天平天平山の從漪禪師清溪の洪進禪師の弟子なり當時未だ修行中のことなれば此の事ありたり和尚行脚修業中の時西院思明禪師寶壽延沼の弟子臨濟大師の法孫となに參ず。天常に云く道ふこと莫れ佛法を會すと、箇の擧話の人を覓るに也無しと古人の公案を擧示し拈提するることを知つたものさ。一日西院遙かに見て召して云く、從漪天平の名と。天平頭を擧ぐ天平喚はれて更に此へ一人もないとの意。凡々に頭を擧ぐ　西院云く錯と。平行こと三兩步す活機あるを示そ。西院又云く錯と。天平近前す。西院云く適來前這の兩錯。是れ西院が錯か是れ上座が錯か。平云く、從漪が錯。西院云く錯と。

平休し去るどうも支旨が分らなかつたのである。西院云く且く這裏此に在て夏安居を過ごして、上座と共に這此の兩錯を商量せんことを待てと。天平當時便ち行く西院の下を辭した。後に住院住職し衆に謂つて云く、我れ當初に行脚の時。業風業報の力に吹かれて思明長老の處に到つて、兩錯を連下せらる。更に我を留めて夏を過して我と共に商量せんことを待たしむ。我れ恁麼その時錯とは道はず。我れ發足して南方に向て去りし時。早く知んぬ錯と道ひ了れることをと西院の下に至り商量問答して錯となつたのではなく已に行脚に出掛けた時に錯と道ふべきであるとの文意底意評頌に於て參すべし要する。に天平未だ出身の處なかりし故學人の爲に雪竇は頌古の題目としたのである。

【評唱】思明先づ大覺に參ず丸覺禪師は臨濟大師の弟子。後の前寶壽延沼禪師臨濟大師の弟子に承嗣す。一日問ふ化城方便門を踏破し來る時如何。壽云く利劍死漢を斬ず。明云く斬れりと。壽便ち打つ。思明十回斬ると道ふ。壽十回打て云く、這の漢甚の死急死期急遽を着てか、箇の死屍を將つて他の痛棒に抵すと云ふて遂に喝し出だす。其の時一僧あり寶壽に問て云く、適來問話底の僧甚の道理ありてか和尚方便して他を接すと。寶壽亦打て這の僧を趕ひ出す。後來俱趕ひ出されしに僧とのことに寶壽に承嗣す。思明一日南院に見ゆ。院問て云く甚の處よりか來る。明云く許州より來ると。院云く什麼を將ち得て來る。明云く箇江西の剣刀を將ち得たり、和尚に獻與す。院南院云く既に許州より來る。甚に因

りてか却て江西の剣刀ある。明院南院の手を把て掐一掐す。院云く侍者收取せよ。思明衣袖を以て拂一拂して便ち行く。院云く阿剌々急速の意阿剌々と。天平曾て進山主に參じ來る。他諸方に到つて此の蘿蔔頭の禪に參得して、肚皮裏に在くが爲めに、到る處に便ち輕々しく大口を開いて道ふ。我は禪を會し道を會すと。常に云く道ふことなかれ佛法を會すと、箇の擧話の人を覓むるに也た無しと。屎臭氣人に薫す。只管輕薄を放つ。且く諸佛未だ出世せず、祖師未だ西來せず。未だ問答あらず、未だ公案あらざる已前の如き、還て禪道ありやなしや。古人事已むことを獲ず、機に對して垂示す。後人喚で公案の因緣と作す。世尊拈花迦葉微笑す。後來阿難迦葉に問ふ。世尊金襴を傳ふるの外別に何の法をか傳ふ。迦葉云く阿難と。阿難應諾す。迦葉云く門前の刹竿を倒却着せよと。只未だ拈花せず阿難未だ問はざる已前の如くんば甚れの處よりか公案を得來らん。只管に諸方の冬瓜の印子に印定し了られて便ち道ふ。我れ佛法の奇特を會す。人をして知らしむることなしと。天平正に此の如く西院に叫び來りて連りに兩錯を下さる。直に得たり周惶惶怖して分疎不下なることを條理を分つを得ずとの意。有者は道ふ、箇の西來の意を說くも早く錯り了れりと。殊に西院の這此の錯の落處を知らず、諸人且く道へ什麼の處にか落在

す。所以に云ふ、活句に參じて死句に參せざれと。天平頭を擧ぐ已に是れ二に落ち三に落ち了れり。西院云く錯と。却て當陽（分明の意）の用處を薦得せず、只我己が肚皮裏に禪ありと道ふて、他に管すること無く又行くこと三兩步す。西院又云く錯と。却し舊に依つて黑漫々地なり（依然として其旨を會得せず。天平近前す。西院云く適來（前來）の兩錯是れ西院か錯か、是れ上座が錯か。天平云く從の天平が錯と。且喜すらくは沒交涉どうして當る。已に是れ（天平の應酬は）第七第八頭にし了れり（旨に遠して遠し。西院云く且く這裏此に在て夏安（居）を度し、上座と共に這此の兩錯を商量せんことを待てと。天平當時便ち行く（其時に西院の下を去つてしまつた。似ること則ち也似たり（作家の手段がある樣に見える。是なることは未だ是ならず（更に實詣の慮がない。也他天平を不是とは道はず。只是れ趕へども上らざると云ふもの（教へて悟入せざるを云ふのみとなり。然も是の如くなりと雖も、却て些子の衲僧の氣息あり。されば天平後に住院し、衆に謂つて云く、我れ當初行脚（修道）の時。業風に吹かれて、思明和尙の處に到つて、連りに兩錯を下され、更に我を留めて夏安（居）を度して我れと共に商量せんことを待たしむ。我れ恁麼の時の錯と謂はず。抑も我れ發足して南方に向つて去りし時、早く知んぬ錯と道ひ了れることをと（此の解本則中にありたり要するにまだ我慢が去らないの。這の漢天平を（指す）也煞だ道ふ只是れ第七第八頭に落つ（言ふことは言ふて。料掉（もまだ十全でない）肯信ぜざるの意）として沒交涉

（其旨に）遠し。如今の人他天平の發足して南方に向て去りし時、早く知んぬ錯と道ひ了れりと道ふことを聞いて、便ち去つて（言句の上に執着して）卜度（分別）して道ふ。未だ行脚せざりし時、自から許多の佛法禪道なし。行脚するに至るに及んで、諸方（の師家）に熱瞞せらる（師家の爲めに欺かれるに至つたとの意）ち未だ行脚せざる時も。地を喚んで天と作し、山を喚んで水と作すべからず。幸に一星事（胸中に一點の邪魔物もないの意）なしと（天平未だ修行に出かけない以前には佛法禪道などの煩ひは更になく山は高く海は深きまゝに誤まらざりしに修行に出て却て。若し總て恁麼（天下の人に欺かされて胸中落々たるを得ず佛法禪道の煩ひを生じたと云ふ意であると人が云ふがとの意）如くの（見解を有するものは佛法の器でないから寧ろ官吏となつて暮らしたがよ。）に流俗の見解を作さば、何ぞ一片の帽を買つて戴いて大家として時を過ごさゞる（此の如きいとの意支那では金錢で官吏を買ひ其官位に相當せる帽を戴く風習あり）は是れ這箇か、の道理にあらず。若し此事（本分の大事）を論ぜば、豈に許多般の葛藤（言詮）あらんや（本分上から是れば箇々壁立萬仞で何も言句に關ることなしと雖ども只之を如何なる場合にも用ふると用ひざるとによりて分るゝ丈のことだとの意）の禪道を擔ひ天下を遠て走るとも、明眼の人に勘破せられて、一點少も也使ひ着ず（佛道を得たとは云。雪竇次正に此の如くに頌出す。

へん

【頌】禪家流。輕薄皮相を愛す（誠實な旨とすべきに兎角現今は禪家の僧にして皮相觀を以て得たとして居るものが少くはないと彈呵したのであるどうしてそんなことで佛道が得られようかとの意）滿肚腹一參じ來つて用ひ着得ず。悲しむに堪へたり笑ふに堪へたり天平老。却て謂ふ當初

に悔くは行脚せしことをと此れは天平の折角山川を跋渉して行脚をなし十分叅禪をしながら只其誠實々着を缺くものからいざと云ふ段になりてはたとつきあたつて何とも自由がきかないのである而も却て初めから行脚をせなかつたらよかつた、なにも西院の處に行いて初て錯なる譯では。錯々。西院の清風頓にない元來錯の天地ならずや西院より聞くまでもないなど夢を語つて居るの笑しさよとの意。

銷鑠す　雪竇此に一轉し來つて其錫を自分に取りあげて錯を活用し來たもの錯なるかな錯なるかな盡大地錯の。復云く、忽ち箇の衲僧あつて出てゞ錯と云はんには如何にしたものか即ち我錯を奪取して却。雪竇の錯は天平の錯と何似ぞ其同か別かを參究せ。

よとの垂誡である

【評唱】「禪家流輕薄を愛す。滿肚に參じ來つて用ふること着ず」と。這此の漢天平を指す會することは則ち會す。只是れ用ひ得ず會して用ふること能はざれば。其機用に偏枯あるが爲なり尋常目に雲霄を視て道ふ、他天平自ら多少の禪を會得すと。而も烘爐裏師家に喩ふに向て總に烹るゝに至るに及んで、元來一點も使ふことを着ず本分の宗師に遇へば少。故に五祖演先師道く、一般一類の人あつて參禪すれば喩へ琉璃瓶裏に糍糕を搗くが如しも自由を得ずとの意くに相似たり。更に動轉することを得ず自由がきかん。抖擻し出さず。觸着すれば便ち破る。若し活潑潑地ならんことを要せば、但皮殼漏子の禪眞實の禪道に參せよ。直に高山上に向て、撲將下來するに、亦破れず亦壞せずと。古人風穴道く、說令言前に薦得會了するも言外の機を知るも。猶ほ是れ殼に滯り封に迷ふ封殼の中を出ずして自由なきを云ふ。直饒句下に精通するも、未だ途に觸れて狂見を免れずと。「悲むに

湛たり天平老。却て謂ふ當初悔らくは行脚せしことを」と。こは雪竇道く、悲むに堪へたり他天平人院に對して說き出さゞることを、又笑ふに堪へたり他天平一肚皮の皮膚の禪師千用禪を會して、更に些子其禪を使ひ着得ざることを頌したもの。錯々、這此兩錯に對して有者は道ふ、天平の會せざる是れ錯と。又有底或者は道ふ、無語底無語の處が是れ錯と。見解は什麼の交涉かあらん其意に契はず。殊に知ず這の兩錯の用處たる擊石火の如く閃電光に似たることを情思意想に落ちず。是れ他西院の向上の人の行履安心の處なり。劒に仗て人を斬るに直に人の咽喉を取つて、命根を方に斷ずるが如し。若し此劒刃上に向て行き得ば、便ち七縱八橫ならん。若しこの兩錯を會得せば、便ち以て西院の清風頓みに銷鑠することを見るべし。雪竇上堂して此話を擧示し了つて、意に道く、錯と。我悟れ且く儞に問はん。雪竇が這の錯。天平の錯と何似ぞ。且く參せよ三十年。

第九十九則　肅宗の十身調御

【垂示】龍吟ずれば霧起り、虎嘯けば風生ず本則の慧忠國師と肅宗皇帝との問答相應呼する樣は全く同氣相求め同聲相應ずるが如きであるを云ふ。出世の宗獻說法の旨、金玉相振ひ。通方自在の作略、箭鋒相拄ふ。此は國師の玄風擧揚は金石の曲の如く其皇帝を接化せる作略の妙用たる恰も弓矢の名人同志の箭が途中で互に相拄へ

るの妙あると一般であるとの意。徧界藏さず、遠近齊く彰れ、古今明かに辨ず 而して其活鱍潑たるや少しの障礙なく十法世界に其光輝を放つが故に遠近悉く彰れ古今辨せざる所なし。且く道へ、是れ什麼人の境界ぞ 此れ本則の忠國師そ。試みに擧示す看よ。

【本則】擧す、肅宗皇帝忠國師（慧忠國師、六祖大師の法を嗣ぎ肅宗（唐の玄宗皇帝の子）其子代宗二代の帝師たり）に問ふ。如何なるか是れ十身調御 調御とは佛の德號に十種ある中の一つで即ち佛十號の一であるこれは調馬師の馬を調御することの自在なる義を取つて佛陀が衆生を自由に濟度せらるゝに喩へたもの此の事評中に委し要は佛と云ふも同じ 師云く、檀越（梵語施主と譯す 今は帝を指す）毘盧法身の頂上を踏んで行け 毗盧は毗盧遮那の略梵語なり法身佛のことにて自性の天眞佛を云ふ人々各自具有の佛性である今國師は法身だと佛だと云ふ窠窟に陷り玉ふなとの垂誡である。帝云く寡人不會。國師云く自己清淨法身（前の毗盧遮那のこと）と認むることと莫れと帝は自己元來清淨法身なりとの見解なる故國師は自身即佛と思ふのが既に窠窟に陷いつて居るのだからそれを拂ふたのである蓋し自己即法身と思ふて居るのは未だ自己の外に法身を見て居ると云ふものなぜなればば自分に何にも不足はないのに法身だと餘計な所に力を入れる必要がないのではないか偏して居ては未だ本分に契はないのである

【評唱】肅宗皇帝東宮に在しとき。已に忠國師に參ず。後來即位して之を敬すること愈篤し、出入迎送躬自ら車輦を捧ぐ。一日這の問端を致し、來つて國師に問ふて云く。如何が是れ十身調御。師云く、檀越（梵語の陀那餘底の訛略 毘盧頂上を踏んで行けとも云ふ 檀越とは梵語の陀那餘底の訛略 毘盧頂上を踏んで行けとも。國師平生一條の脊梁骨硬きこと生鐵の如し。帝王の面前に至るに及んで、瀾泥の如くに相似たり 慈悲のために言語しに滯ることを仰ゆ然も答へ得て廉纖細なりと雖も、却て箇の好處あり。他道ふ儞ぢ會得せんと要せば、檀越須らく是れ毘

盧頂顎上に向つて行て始て得べしと。他帝却て鳶まず。更に道ふ寡人不會と。國師後面忍煞郎當慈悲にして、草に落て更に頭上底の一句を注して云く、錯つて自己清淨法身と認むることなかれと。所謂る人々具足箇々圓成なり。看よ他師一放後答一收前答八面敵を受くることを、道ふことを見ずや。善く師となる者は機に應じて敎を設け、風を看て帆を使ふと。若し只儞情に一隅を守らば、豈に能く回互せんや 有を以て無を顯はし無を以て有を顯はすことを得ずとの意。看よ他の黃檗老善く人を接することを。臨濟に遇着して三回、便ち痛く六十棒を施す。臨濟當下に便ち會し去る。裴相國が爲にするに及んで葛藤言句並に種々忍煞甚也し。此れ豈に是れ善く人の師と爲るにあらずや。忠國師善巧方便にして肅宗帝を接す。蓋し他八面に敵を受る底の手段あるが爲めなり。十身調御と云ふは、即ち是れ十種の他受用身、法報化三身即ち法身なり。何が故ぞ報化は眞佛にあらず。亦說法の者にあらず 說法は言說なし離るゝが故に 法身に據る時は則ち一片虛凝にして靈明寂照なり。大原の孚上座揚州の光孝寺にあつて涅槃經を講ず。游方の僧有り即ち夾山の典座役名なり。寺にあつて雪に阻てらる。因て往て講を聽く、講じて三因佛性 一に正因佛性は人々各自の本具の佛性を云ふ理體なり二に了因佛性とは本智に依つて了悟する德を云ふ三に緣因佛性とは悟入して一切の煩惱を解脫するの德なり三德法身 上の三因によりて得たる法身、般若、解脫の三果にして三因は果上に於て三秘藏となれるを云ふ と云ふに至て、廣く法身の妙理を談ず。

典座忽然として失笑す。孚乃目顧す。講じ罷て禪者を請せしめて問て云く、某素智狹劣にして文に依て義を解す。適來講ずる次で上人の失笑するを見る。某必ず短乏の處あらん。請ふ上人說け。典座云く座主問はずんば即ち敢て說かじ。座主既に問ふ。則ち言はずんばあるべからず。某し實に是れ座主の法身を識らざることを笑ふ。孚云く此の如く解說す。何の處か是ならざる。典座云く請ふ座主更に說くこと一徧せよ。孚曰く法身の理は猶ほ太虛の若し、竪に三際を窮め橫十方に亘る。八極に彌綸し二儀陰陽を包括す。緣に隨ひ感に趣ひて周徧ならずと云ふこと靡しと。典座曰く座主の說不是とは道はじ。只法身量邊の事を識得して、實に未だ法身を識らざることあり。孚曰く既に然も此の如くならば、禪者當に我が爲めに說くべし。典座曰く若し是の如くならば、座主暫く講を輟むること旬日にして、靜室中に於て端然として、靜慮して心を收め念を攝め、善惡の諸緣一時に放却して、自ら窮め究て看よと。孚一に言ふ所に依る。初夜より五更に入り、鼓角の鳴るを聞いて忽然として契悟す。便ち去て禪者の門を叩く。典座云く阿誰そ。孚曰く某甲典座咄して曰く汝をして大敎を傳持して、佛に代りて說法せしむ。夜半に什麼してか酒に醉て街に臥す。孚曰く自來の講經は生身父母の鼻孔を將て扭捏す。今日より已後更に敢て是の如くならじと。看よ他の奇特の漢。豈に只去つて箇の昭々靈々を認めて驢前馬後に落在せんや。須らく是れ業識を打破して一絲毫頭の得べき無かるべきも、猶を只一半を得ることあり未だ全體を得たりとなすに足らずとの意。古人道く纖毫も修學の心を起さざれば、無相光中に常に自在なり。但常寂滅底を識れ、聲色を認むることなかれ。但靈知を識れ忘想を認むることなかれと。所以に道ふ假使ひ鐵輪頂上に旋るとも、定慧圓明にして終に失せずと。達磨二祖に問ふ汝雪に立ちて臂を斷つ。方に何事の爲にすべきか。祖曰く某甲心未だ安からず。乞ふ師安心せしめ玉へ。磨云く心を將ち來れ汝が與めに安んぜん。祖曰く心を覓むるに了に不可得なり。磨曰く汝が與に安心し竟んぬと。二祖忽然として領悟す。且く道へ正當恁麼の時法身什麼の處にかある。長沙云く學道の人眞を識らざることは、只從前識神を認むるが爲めなり。無量劫來生死の本、癡人喚で本來の人と作すと。如今の人只箇の昭々靈々を認め得て、便ち瞠眼努目して精魂を弄す。什麼の交涉かあらん。只他國師の自己清淨法身と認むることなかれと道ふが如き且らく自己法身の如くんば、儞も也た夢にだも見ざることあらん。更に什麼の認むるなかれとか說かん。敎家には淸淨法身を以て極則となす。什麼としてか却て人をして認めしめざる。道

ふことを見ずや。認着すれば依前として還つて不是と。咄。好し便ち棒を與ふるに。此の意を會得せば始めて他の自己清淨法身と認むることなかれと道ふことを會せん。雪竇他師の老婆心切なることを嫌ふ。爭奈せん爛泥裏に刺あることを。豈に見ずや洞山和尚人を接するに三路あり。所謂玄路無象のところ虛空は沒蹤跡なる故に云ふ 鳥道 展手兩手を展開して人を接するの手段を云ふ なり。初機の學道且く此の三路に向つて行履せしむ。僧、師に問ふ。尋常學人をして鳥道を行しむ。未審し如何が是れ鳥道。洞山道く一人に逢はず。僧云く如何が行かん。直に須らく足下無私にして去るべし。僧云く只鳥道を行くが如くんば、便ち是れ本來の面目なることなしや否や。山云く闍黎什麼に因てか顚倒す。僧云く什麼の處か是れ學人顚倒の處。山云く若し顚倒せずんば什麼としてか奴を認めて郎と作す。僧云く如何が是れ本來の面目。山云く鳥道沒蹤跡の處を行かずと 自己是れ清淨法身と云ふも早く是れ奴を認めて新郎となすものとの意。須く是れ這般の田地境遇に到りて、方に少分の相應あるべし。直下に打疊して迹を削り聲を呑ましむるも、猶是れ衲僧門下には沙彌童行小僧の見解なることあり。更に須らく首を塵勞逆境に回らして、大用を繁興して始めて得べし 向上に更に一歩を進める即ち退歩を學し始めて本分に相應し大自在なりとの意。雪竇の頌に云く。

【頌】 一國の師も亦強いて名く。南陽獨り許す嘉聲を振ふことを 慧忠國師は初め河南の南陽白崖山の黨子谷に住し四十年山を下らず

名聲遠近に振ふ後詔に因りて西京即ち長安の光宅寺に移りて帝の師となりて宮中に出入す抑もかゝる大德の高僧なれば何にも四百餘州の帝王の師となり國師と云ふて喧がないでももと〳〵南陽の慧忠て通りぎりてあるからそれでよいので人爵によつて別に尊くなると云ふものでもないされば國師號なぞは强て云ふたものであるとの意蓋し。至人は名なしであるから國師號があるからとて名譽と云ふ譯のものではないと時人を諷したのである。大唐扶け得たり眞の天子、曾て毗盧の頂上を踏んで行かしむ 今國師は上に云ふたような譯て實は十方世界の國師である が今暫く大唐四百州の天子をして法王となし本則の通りに法身邊にも住まらない活作用。鐵鎚擊碎す黃金の骨、天地の間更に何物ぞ 其住着し珍重せる自己清淨身の思想を拂ふて本分に契合せしめたのである 三千は三千大千世界の意刹は世界のこと此無限の空間に三千大千世界の無數の世界が彼處此處に懸つて居るのは恰も大海に島嶼の横ばるが如きものだから此無量無數の世界が今は夜の暗黑中であるから沈々と一つも分らないのである此れ本地の風光を云ふもので此の本地の風光や思慮分別を以て決して窺ふことの出來るものでないとの意。

【評唱】 「一國の師も亦强て名く、南陽獨り許す嘉聲を振ふことを」と。此の頌一へに箇の眞贊に似て相似たり。道ふことを見ずや至人に名なしと。喚で國師と作すも亦是れ强て名を安じ了れり。國師の道比倫すべからず。善能恁麼に人を接す。獨り許す南陽是れ箇の作家、大唐扶け得たり眞の天子。曾て毘盧頂上を踏で行かしむ。若し是れ具眼の衲納の眼腦ならば、須く是れ毗盧頂上に向て行いて、方に此の十身調御を見るべし。佛之を調御と謂ふことは、便ち是れ 佛十號の一數なり。一身十身と化し、十身百身と化す。乃至千百億身も大綱只是れ一身なり。這の

一頌却て說き易し。後に他國師の自己淸淨法身と認むること莫れと道ふことを頌す。これ頌し得て水灑げども着かず。直に是口を下して說き難し。「鐵鎚擊碎す黃金の骨」と。此は自己淸淨法身と認むることなかれと云ふことを頌す。雪竇忒慇だ他國師を讃歎して黃金の骨一鎚に擊碎し了れり。天地の間更に何物ぞ。直に須らく淨裸々赤灑々として、更に一物の得べき無し。乃ち是れ本地の風光なるべし。一へに三千刹界世海夜沈々たるに似たり。三千大千世界香水海の中に無邊の刹あつて一刹に一海あり。正當夜靜かに更深くるの時。天地一時に澄々地なり。且らく道へ是れ什麼ぞ。切に忌む目を閉ぢ眼を合する會を作すことを、若し恁麼に會せば、正に毒手に墮在せん。知らず誰か蒼龍窟に入る。脚を展べ脚を縮む。且らく道へ是れ誰ぞ。諸人の鼻孔一時に雪竇に穿却し了らる。

第一百則　巴陵の吹毛の劍

【垂示】因を收め果を結ぶ。始を盡し終りを盡す。對面私無し。元曾て說かず今此に百則の公案も終りを告げることになつたのだが此百則の拈提は首尾一貫して住着固執の私情はさら〳〵ないされば百則の說話は說きながら未だ一字をも說かずと云ふものである無言の言で古端古相がないのである。忽ち箇の漢出で來つて、

一夏請益教化して什麼として か曾て說かずと道ふやといふものあらば、儞が悟り來らんを待つて儞に向て道ん元來曾て說かずと云ふが已に九十日の說法があつて此の通りに百則の公案も終了するに至つたではないかと云ふものあらんが我は其ものに對して汝が悟り來つて後に話そうとの文意即ち其處は到底言詮で表はされず教へられん人々哈。且く道へ。復是れ當面に諱却するが爲か、復別に長處あるが爲か 明らさまに云ふては本曖自知のものだとの意。試みに擧す看よ。

分の諱名に觸れるから云はんのか或は又言はぬ處に長處がある爲めかとの意

【本則】擧す、僧あり巴陵岳州巴陵の顯鑒禪師雲門大師の弟子に問ふ。如何なるか是れ吹毛の劍。陵云く珊瑚枝々月を撐着すと吹毛の劍とは本分の殺人刀活人劍のことである此本地の風光の當體は分別思慮に渡らぬ月光の天地一枚の樣子光々交徹して光り萬象を呑むだ樣子

【評唱】巴稜干戈を動せず。四海五湖多少の人舌頭地に落つ。雲門人を接すること正に此の如し。他巴陵は是れ雲門の的嫡子なり。亦各々箇の作略を具す。是の故に道ふ我れ韶陽新定の機一生人の興めに釘を抽き楔を拔くことを愛すと。這箇の話正に恁麼地なり雲門の支機と同じ。一句中に於て自然に三句を具す、函蓋乾坤の句、截斷衆流の句、隨波逐浪の句なり。答へ得て也妨げず奇特なることを。浮山の遠錄公云く、未だ透らざる底の人は句に參せんより、意に參んぜんには如かず。透得底の人は意に參んより、句に參せんには如かずと。雲門下に三尊宿あり。吹毛の劍に答て俱に了透得すると云ふ。唯是れ巴陵のみ答へ得て了の字に過ぎたり。此れ乃ち句を得たり。且く

道へ了の字珊瑚枝々月を撐着すと。是れ同か是れ別か。前來道ふ、三句辨ずべし一鏃空に遼ると。這の話を會せんと要せば、須く是れ情塵意想を絶し淨塵して、方に他の珊瑚枝々月を撐着すと道ふことを見るべし。若し更に道理を作さば、轉た摸索不着なるを見ん。此の語は是れ禪月友人を懷ふ詩なり。厚きことは鐵圍山上の鐵に似。薄きことは雙成仙體の纈に似たり。蜀機鳳雛動もすれば魘驚す、珊瑚枝々月を撐着す。王凱家中藏して掘ち難く。顏回が飢漢天雪を愁ふ。古檜の如くに筆直して雷にも折れず。雪衣の石女蟠桃の欵。佩で龍宮に入て步み遲々。繡熊銀簟何ぞ參差たる。驪龍珠を失す知るや知らずやと。今は巴陵句中に於ての此詩一句を取て吹毛の劒に答ふ。則ち是れ快なり。劒刄上に毛を吹て之劒を試るに、其の毛自から斷つ。乃ち利劒之を吹毛と謂ふ。巴陵只他の問處に就て便ち這の僧に答ふ。頭の落るもまた知らず、頌に云く。

【頌】不平を平げんと要す。大巧は拙の若し名劒は不平の爲めに寶匣を出ずと云ふが今巴陵は其不平を平ぐるに珊々の鞭を以て太平を致すと云ふあんばいであるが其答處巧にして却て。人の意路を通せず或は指或は掌。天に倚て雪を照らす其吹毛の劒を自由に用ふる樣は名人が或は指にて使ひ或は掌裏にて使ふが如く只さへ身の毛もよだつと云ふに天に倚て雪を照らすと云ふので。あるから寒毛卓立の外はないとの意大冶も磨礱し下得す。良工も拂拭して歇まず大冶も手の付けようがなく良工も之を拭

ひ能はざる劒だ。別々此の劒の機鋒は又格別だとの意珊瑚枝々月を撐着す其別々の用處はこう。

【評唱】「不平を平げんと要す。大巧は拙の如し」と。古へ俠客あり。路に不平を見て强の弱を凌ぐを以て即ち劒を飛ばして强者の頭を取ると。所以に宗師家眉に寶劒を藏し。袖に金鎚を掛けて不平の事を斷す寶劒金鎚共に智見を云ふ。「大巧は拙の如し」と。これ巴陵の答處不平の事を平げんと要す。他の語、忒慇傷巧なるが爲に、返つて拙と成るに相似たり。何が故ぞ、他當面正面に揮ひ來らずして、却て僻地裏に去つて、一截にして暗に人の頭を取るに、その人覺えざるが爲めなり。「或は指或は掌。天に倚て雪を照らす」と。會得すれば則ち天に倚るの長劒、凜々たる神威の如し巴陵の句を會得すれば天に倚る。長劒の如しとの意。古人云く心月孤圓にして、光萬象を呑む。光境を照すに非ず。境も亦存するに非らず。光境共に忘ず復是れ何物ぞと盤山の語。此寶劒或は現じて指上に在り。忽ち掌中に現ず。昔日慶藏主說いて這裏こに到て、手を竪てゝ云く、還つて見るや否やと。也必しも手指の上に在ざるなり。雪竇經過して儞をして古人の意を見せしむ。且く道へ、一切處是れ吹毛の劒にあらずんばあるべからず。所以に道ふ。三級浪高して魚龍と化す。癡人猶ほ犀む夜塘の水と。雪竇道く。此劒能く天に倚て雪を照らすと。尋常道ふ。天に倚る長劒光能く雪を照すと。這

の些子長劍の用處、直に得たり大冶も磨礱し下得ず。任ひ是れ良工なるも拂拭して也未だ歇まず拂掛し。良工とは即ち于將是れなり。故事自ら顯かなり。雪竇頌し了つて、末後に顯出して道ふ。「別々」と。也妨げず奇特なり。別に好處あり。尋常の劍と同じからず。且く道へ、如何なるか是れ別處。「珊瑚枝々月を撐着す」と。謂つべし光前絶後にして、獨り寰中に據て、更に等匹なしと。畢竟如何ん。諸人頭落ちぬ。老僧更に一少偈あり。

萬斛舟に盈てて手に信せて拏く　萬斛の粟米は人の命を養ふもの萬差の公案は人の慧命を相續す今萬斛を以て百則の公案に喩ふたもの

蛇を呑む　蛇は甕中の一粒を貪つて甕中に落ちて出ずる能はずとの文意即ち圜悟が學人をして箇々本具の一粒を知らしめんとして千差の因緣を述べて知らず〳〵に葛藤言句の甕中に落ち多少の氣力を費したとの意。

却て一粒に因て甕百轉の舊公案を拈提して、時人の幾眼に沙を撒却す　是れ本分の上より見れば八萬の修多羅一千餘の公案も若是れ人の眼中に沙を散布すると一般であるとの意。

和譯評註碧巖集 終

碧巖集

第一則　武帝問達磨

【垂示】隔山見烟。早知是火。隔牆見角。便知是牛。擧一明三。目機銖兩。是衲僧家尋常茶飯。至於截斷衆流。東涌西沒。逆順縱橫。與奪自在。正當恁麼時。且道。是什麼人行履處。看取雪竇葛藤。

【本則】梁武帝問達磨大師。（唧噜漢。這不如何是聖諦第一義。是甚麼。）磨曰。廓然無聖。（將謂多少奇特。過新羅。）帝曰。對朕者誰。（滿面慚惶。強惺惺。）磨曰。不識。（咄。直半文錢。）帝不契。（可惜乎。却較些子。）達磨遂渡江至魏。（這野狐精。一場懵懂。）帝後擧問志公。（貧兒思舊債。傍人有眼。）志公曰。陛下還識此人否。（和尚。過東從東過西。）帝曰。不識。（却是武帝。承當得達磨公案。出國始得。好與三十棒。達磨來也。）志公曰。此是觀音大士。傳佛心印。（胡亂指注。臂向外曲。）帝悔遂遣使去請。（果然把不住。向道不唧噜。）志公曰。莫道

陛下發使去取。○東家人死西家人助哀也好一時趕出國。闔國人去。他亦不回。志公也好與三十棒。

○不知脚跟下放大光明。

【評唱】達磨遙觀此土有大乘根器。遂泛海得得而來。單傳心印。開示迷塗。不立文字。直指人心。見性成佛。若恁麼見得。便有自由分。不隨一切語言轉。脫體現成。便能於後頭。與武帝帝對譚。幷二祖安心處。自然見得。無計較情塵。一刀截斷。洒洒落落。何必更分。是分非。辨得辨失。雖然恁麼。能有幾人。武帝嘗披袈裟。自講放光般若經。感得天花亂墜。地變黃金。辨道奉佛。誥詔天下。起寺度僧。依教修行。人謂之佛心天子。達磨初見武帝。帝問。朕起寺度僧。有何功德。磨云。無功德。早是惡水驀頭澆。若透得這箇無功德話。許儞親見達磨。且道。起寺度僧。爲什麼都無功德。此意在什麼處。帝與婁約法師。傳大士。昭明太子。持論眞俗二諦。據教中說。眞諦以明非有。俗諦以明非無。眞俗不二。卽是聖諦第一義。此是教家極妙窮玄處。帝便拈此極則處問達磨。如何是聖諦第一義。磨云。廓然無聖。天下衲僧跳不出。達磨與他一刀截斷。如今人多少錯會。却去弄精魂。瞪眼睛。云。廓然無聖。且喜沒交涉。五祖先師嘗說。只這廓然無聖。若人透得。歸家穩坐。一等是打葛藤。不妨與他打破漆桶。達磨就中奇特。所以道。參得一句透。千句萬句一時透。自然坐得斷。把得定。古人

道。粉骨碎身未足酬。一句了然超百億。達磨劈頭與他一拶。多少漏逗了也。帝不省。却以人我見故。再問對朕者誰。達磨慈悲忒煞。又向渠不識。直得武帝眼目定動。不知落處。是何言說。到這裏。有事無事。拈來卽不堪。端和尙有頌云。一箭尋常落一鵰。更加一箭已相饒。直歸少室峰前坐。梁主休言更去招。復云。誰欲招。帝不契。遂潛出國。這老漢只得慷慨。渡江至魏。時魏孝明帝當位。乃北人種族。姓拓拔氏。後來方名中國。達磨至彼。亦不出見。直過少林。面壁九年。接得二祖。彼方號爲壁觀婆羅門。梁武帝後問志公。公云。陛下還識此人否。帝曰。不識。且道。與達磨道底。是同是別。似則也似。是則不是。人多錯會道。前來達磨。是答他禪。後來武帝。是對他志公。乃相識之識。且得沒交涉。當時志公恁麼問。且道。作麼生祇對。何不一棒打殺。免見搽糊。武帝却供他欺道。不識。志公見機而作。便云。此是觀音大士。傳佛心印。帝悔遂遣使去取。好不唧嚕。當時等他道。此是觀音大士。傳佛心印。亦好擯他出國。猶較些子。人傳。志公天鑒十三年化去。達磨普通元年方來。自隔七年。何故却道。同時相見。此必是謬傳。據傳中所載。如今不論這事。只要知他大綱。且道。達磨是觀音。志公是觀音。阿那箇是端的底觀音。既是觀音。爲什麼却有兩箇。何止兩箇。成群作隊。時後魏光統律師。菩提流支三藏。與師論議。師斥相指心。而偏局之量。自不堪任。競起害心。數加毒藥。至第六度。化緣已畢。傳法得人。遂不復救。端居而逝。葬於熊耳山定林寺。後

魏宋雲奉使於葱嶺遇師手携隻履而往武帝追憶自撰碑文云嗟夫見之不見逢之不遇遇之不遇今之古之怨之恨之復讚云心有也曠劫而滯凡夫心無也刹那而登妙覺且道達磨卽今在什麼處蹉過也不知。

【頌】聖諦廓然。箭過新羅○咦何當辨的。過世○有什麼難辨對朕者誰。再來不直半文錢○又恁麼去也豈免生還云不識。三人四人中也○咄因茲暗渡江。穿人鼻孔不得○却被別人穿○蒼天蒼天○好不大丈夫荊棘。脚跟下深數丈已闔國人追不再來。兩重公案○用追作麼○在什麼處○丈夫志氣何在千古萬古空相憶。換手搥胸望空啓告○休相憶。道什麼○向鬼窟裏作活計清風匝地有何極。果然○大小雪竇向草裏輥師顧視左右云。這裏還有祖師麼。爾待番歇那○猶作這去就自云。有。塌薩阿勞喚來與老僧洗脚。更與三十棒趕出也未爲分外○作這去就猶較些子

【評唱】且據雪竇頌此公案似善舞太阿劒相似向虛空中盤礴自然不犯鋒鋩若是無這般手段纔拈著便見傷鋒犯手若是具眼者看他一拈一掇一褒一貶只用四句措定一則公案大凡頌古只是繞路說禪拈古大綱據欵結案而已雪竇與他一拶劈頭便道聖諦廓然何當辨的雪竇於佗初句下著這一句不妨奇特且道畢竟作麼生辨的直饒

鐵眼銅睛也模索不著到這裏以情識卜度得麼所以雲門道如擊石火似閃電光這箇些子不落心機意識情想等爾開口堪作什麼計較生時鷂子過新羅雪竇道徧天下衲僧何當辨的對朕者誰著箇還云不識此是雪竇忒煞老婆重重爲人處且道廓然與不識是一般兩般若是了底人分上不言而諭若是未了底人決定打作兩橛諸方尋常省道雪竇重拈一徧殊不知四句頌盡公案了後爲慈悲之故頌出事跡因茲暗渡江豈免生荊棘達磨本來茲土與人解粘去縛抽釘拔楔剗除荊棘因何却道生荊棘非止當時諸人卽今脚跟下已深數丈闔國人追不再來千古萬古空相憶可煞不丈夫且道達磨在什麼處若見達磨便見雪竇末後爲人處雪竇恐怕人逐情見所以撥轉關棙子出自己見解云休相憶清風匝地有何極既休相憶爾脚跟下事又作麼生雪竇道卽今箇裏匝地清風天上天下有何所極雪竇拈千古萬古之事拋向面前非止雪竇當時有何極爾諸人分上亦有何極他又怕人執在這裏再著方便高聲云這裏還有祖師麼自云有雪竇到這裏不妨爲人赤心片片又自云喚來與老僧洗脚太激減人威光當時也好與本分手脚且道雪竇意在什麼處到這裏喚作驢則是喚作馬則是喚作祖師則是如何名邊往往喚作雪竇使祖師去也且喜沒交涉且道畢竟作麼生只許老胡知不許老胡會。

第二則　趙州至道無難

【垂示】乾坤窄。日月星辰一時黑。直饒棒如雨點。喝似雷奔。也未當得向上宗乘中事。設使三世諸佛。只可自知。歷代祖師。全提不起。一大藏教。詮注不及。明眼衲僧。自救不了。到這裏作麼生。請益。道箇佛字。拖泥帶水。道箇禪字。滿面慚惶。久參上士。不待言之。後學初機。直須究取。

【本則】趙州示衆云。○這老漢作什麼。莫打這葛藤。至道無難。非難非易。唯嫌揀擇。眼前是什麼○三祖○少實弄○魚行水濁鳥飛毛落○老僧不在明白裏。猶在。纔有語言。是揀擇。是明白。兩頭三面○敗也○也有一箇半箇時有僧問。既不在明白裏。喊身已露○這老漢向什麼處去是汝還護惜也無。護惜箇什麼。也好與一拶舌拄上齶州云。我亦不知。拶殺這老漢倒退三千僧云。和尚既不知。爲什麼却道不在明白裏。看走向什麼處去○逐教上樹去州云。問事即得。禮拜了退。頓有這一著。○這老喊

【評唱】趙州和尚。尋常舉此話頭。只是唯嫌揀擇。此是三祖信心銘云。至道無難。唯嫌揀

擇。但莫憎愛。洞然明白。纔有是非。是揀擇。是明白。纔恁麼會。蹉過了也。鉸釘膠粘。堪作何用。州云。是揀擇。是明白。如今參禪問道。不在揀擇中。便坐在明白裏。老僧不在明白裏。汝等還護惜也無。汝諸人既不在明白裏。且道。趙州在什麼處。爲什麼。却教人護惜。五祖先師常說道。垂手來似過。作麼生會。且道。作麼生是垂手處。識取鈎頭意。莫認定盤星。這僧出來。也不妨奇特。捉趙州空處。便去拶佗。既不在明白裏。護惜箇什麼。趙州更不行棒行喝。只道我亦不知。若不是這老漢。被佗拶著。往往忘前失後。賴是這老漢。有轉身自在處。所以如此答他。如今禪和子。問著也道。我亦不知不會。爭奈同途不同轍。這僧有奇特處。方始會問。和尚既不知。爲什麼却道不在明白裏。更好一拶。若是別人。往往分疏不下。趙州是作家。只向他道。問事即得。禮拜了退。這僧依舊無奈這老漢何。只得飲氣吞聲。此是大手宗師。不與儞論玄論妙。論機論境。一向以本分事接人。所以道。相罵饒儞接觜。相唾饒儞潑水。殊不知這老漢。平生不以棒喝接人。只以平常言語。只是天下人不奈何。蓋爲他平生無許多計較。所以橫拈倒用。逆行順行。得大自在。如今人不理會得。只管道趙州不答話。不爲人說。殊不知當面蹉過。

【頌】至道無難。三重公案○滿口含霜○道什麼言端語端。魚行水濁○七花八裂○搽胡也一有多種。

分開好○只一般有什麼了期。二無兩般。何堪四五六七○打葛藤作什麼。天際日上月下。觀面相呈○頭上漫漫脚下漫漫○

切忌昂頭底頭。檻前山深水寒。一死更不再活○還覺寒毛卓豎麼。髑髏識盡喜何立。棺木裏瞪眼○盧行者是佗同參。枯木龍吟銷未乾。咄○枯木再生花○逢磨遊吏土。難難。邪法難扶○倒一說○這裏是什麼所在說雜說易。揀擇明白君自看。嗜○將謂由別人○值自看○不干山僧事。

【評唱】雪竇知佗落處。所以如此頌。至道無難。便隨後道。言端語端舉一隅不以三隅反。雪竇道。一有多種。二無兩般。似三隅反。一爾且道。什麼處是言端語端處。爲什麼一却有多種。二却無兩般。若不具眼。向什麼處摸索。若透得這兩句。所以古人道。打成一片依舊見山是山。水是水。長是長。短是短。天是天。地是地。有時喚天作地。有時喚地爲天。有時喚山不是山。喚水不是水。畢竟怎生得平穩去。風來樹動。浪起船高。春生夏長。秋收冬藏。一種平懷。泯然自盡。則此四句頌頓絕了也。雪竇有餘才。所以分開結裏算來也。只是頭上安頭道。至道無難。言端語端。一有多種。二無兩般。雖無許多事。天際日上時月便下。檻前山深時水便寒。到這裏。言也端。頭頭是道。物物全眞。豈不是心境俱忘。打成一片處。雪竇頭上太孤峻生。末後也漏逗不少。若參得透。見得徹。自然如醍醐上味。相似。若是情解未忘。便見七花八裂。決定不能會。如此說話。髑髏識盡喜何立。枯木龍吟銷未乾。只

這便是交加處。這恁恁麼問。趙州恁麼答。州云。至道無難。唯嫌揀擇。總有語言。是揀擇。是明白。老僧不在明白裏。是汝遐護惜也無。時有僧便問。既不在明白裏。又護惜箇什麼。州云。我亦不知。僧云。和尚既不知。爲什麼却道不在明白裏。州云。問事卽得。禮拜了退。此是古人問道底公案。雪竇拽來。一串穿却。用頌至道無難。唯嫌揀擇。如今人不會古人意。只管咬言嚼句。有甚了期。若是通方作者。始能辨得這般說話。不見僧問香嚴。如何是道。嚴云。枯木裏龍吟。僧云。如何是道中人。嚴云。髑髏裏眼睛。僧後問石霜。如何是枯木裏龍吟。霜云。猶帶喜在。如何是髑髏裏眼睛。霜云。猶帶識在。僧又問曹山。如何是枯木裏龍吟。山云。血脉不斷。如何是髑髏裏眼睛。山云。乾不盡。什麼人得聞。山云。盡地大未有一箇不聞。僧云。未審龍吟是何章句。山云。不知是何章句。聞者皆喪。復有頌云。枯木龍吟眞見道。髑髏無識眼初明。喜識盡時消息盡。當人那辨濁中清。雪竇可謂大有手脚。一持與爾交加頌出。然雖如是都無兩般。雪竇末後有爲人處。更道難難。只這難難。也須透過始得。何故。百丈道。一切語言。山河大地。一一轉歸自己。雪竇凡是一拈一掇。到末後須歸自己。且道。什麼處是雪竇爲人處。揀擇明白君自看。既是打葛藤頌了。因何却道君自看。好彩教爾自看。且道。意落在什麼處。莫道諸人理會不得設使山僧到這裏。也只是理會不得。

第三則　馬大師不安

【垂示】一機一境。一言一句。且圖有箇入處。好肉上剜瘡。成窠成窟。大用現前。不存軌則。且圖知有向上事。蓋天蓋地。又摸索不著。恁麼也得。不恁麼也得。太廉纖生。恁麼也不得。不恁麼也不得。太孤危生。不涉二途。如何卽是。請試擧看。

【本則】馬大師不安。（這漢漏逗不少。帶累別人去也。）院主問。和尙近日尊候如何。大師曰。日面佛月面佛。（可煞新鮮。養子之緣。）

【評唱】馬大師不安。院主問。和尙近日尊候如何。大師云。日面佛月面佛。祖師若不以本分事相見。如何得此道光輝。此箇公案。若知落處。便獨步丹霄。若不知落處。往往枯木巖前差路去在。若是本分人。到這裏須是有驅耕夫之牛。奪飢人之食。底手脚。方見馬大師爲人處。如今多有人道。馬大師接院主。且喜沒交涉。如今衆中多錯會。瞠眼云。在這裏。左眼是日面。右眼是月面。有什麼交涉。驢年未夢見在。只管蹉過古人事。只如馬大師如此道。意在什麼處。有底云。點平胃散一盞來。有什麼巴鼻。到這裏作麼生得平穩去。所以道。向上一路。千聖不傳。學者勞形。如猿捉影。只這日面佛月面佛。極是難見。雪竇到此。亦是難頌。却爲他見得透。用盡平生工夫。指注他。諸人要見雪竇麼。看取下文。

【頌】日面佛月面佛。（開口見膽。鏡相照於中。無影像。）五帝三皇是何物。（太高生。莫謾他好。）一十年來曾苦辛。（自是儞落草。不干山僧事。啞子喫苦瓜。）爲君幾下蒼龍窟。（何消。）恁麼。（莫錯用心。好。）屈。（恁麼。莫向恁人說。）堪述。（向阿誰說。與恁人說。）明眼衲僧莫輕忽。（恁麼。殺人。恁殺人。）

【評唱】神宗在位時。自謂此頌諷國。所以不肯入藏。雪竇先拈云。日面佛月面佛。一拈了却云。五帝三皇是何物。且道。他意作麼生。適來已說了也。直下注佗。所以道。垂釣四海。只釣獰龍。只此一句已了。後面雪竇自頌。他平生所以用心參尋。二十年來曾苦辛。爲君幾下蒼龍窟。似箇什麼。一似人入蒼龍窟裏取珠相似。後來打破漆桶。將謂多少奇特。元來只消得箇五帝三皇是何物。且道雪竇語落在什麼處。須是自家退步看。方始見得他落處。豈不見與陽剖侍者答遠錄公問。婆竭出海乾坤震。覩面相呈事若何。剖云。金翅鳥王當宇宙。箇中誰是出頭人。遠云。忽遇出頭。又作麼生。剖云。似鶻捉鳩。君不信。髑髏前驗始知眞。遠云。恁麼則屈節當胷。退身三步。剖云。須彌座下烏龜子。莫待重遭點額回。所以三皇五帝亦是何物。人多不見雪竇意。只管道諷國。若恁麼會。只是情見。此乃禪月題公子

行云。錦衣鮮華手擎鶴閑行氣貌多輕忽。稼穡艱難總不知。五帝三皇是何物。雪竇道。屑。堪述明眼衲僧莫輕忽。多少人向蒼龍窟裏作活計。直饒是頂門具眼。肘後有符明眼衲僧。照破四天下。到這裏也莫輕忽。須是子細始得。

第四則　德山挾複子

【垂示】青天白日。不可更指東劃西。時節因緣。亦須應病與藥。且道放行好。把定好。試舉看。

【本則】德山到潙山。擔板漢。野狐精。挾複子。於法堂上。不妨令人疑著。納敗缺。從東過西。從西過東。可煞有禪。作什麼。顧視云。無無。便出。好與三十棒。天。眞獅子兒。善獅子吼。雪竇著語云。勘破了也。錯。然。果。點。德山至門首。却云。也不得草草。放去收來。頭上太高生。末後太低生。知過必改能有幾人。便具威儀。再入相見。依前作這去就。是第二重敗缺。喩。潙山坐次。冷眼看這老漢。捋虎鬚也。須是這般人始得。德山提起坐具云。和尚。改頭換面。無風起浪。潙山擬取拂子。須是那漢始得。逕。鄧。帷之中。不妨坐斷天下人舌頭。德山便喝。拂袖而出。野狐精見解。這一喝也有權

也有實也有照也有用。一等是聚雲擺霧者。就中奇特。雪竇著語云。勘破了也。錯。然。果。點。德山背却法堂。著草鞋便行。風光可愛。公案未圓。瘡得頂上笠。失却脚下鞋。已是喪身失命了也。潙山至晚問首座。適來新到。在什麼處。東邊落節西邊拔本。東觀東南意在西北。首座云。當時背却法堂。著草鞋出去也。靈龜曳尾。好與三十棒。這般漢腦後合喫多少。潙山云。此子已後向孤峯頂上。盤結草菴。呵佛罵祖去在。賊過後張弓。天下納僧跳下出。雪竇著語云。雪上加霜。錯。然。果。點。

【評唱】夾山下三箇點字。諸人還會麼。有時將一莖草。作丈六金身用。有時將丈六金身。作一莖草用。德山本是講僧。在西蜀講金剛經。因教中道。金剛喻定後得智中。千劫學佛威儀。萬劫學佛細行。然後成佛。他南方魔子。便說即心是佛。遂發憤擔疏鈔行脚。直住南方。破這魔子輩。看他恁麼發憤。也是箇猛利底漢。初到澧州路上見一婆子賣油糍。遂放下疏鈔。且買點心喫。婆云。所載者是什麼。德山云。金剛經疏鈔。婆云。我有一問。儞若答得。布施油糍。作點心。若答不得。別處買去。德山云。但問。婆云。金剛經云。過去心不可得。現在心不可得。未來心不可得。上座欲點那箇心。山無語。婆遂指令去參龍潭。纔跨門便問。久

響龍潭。及乎到來。潭又不見。龍又不現。龍潭和尚。於屏風後引身云。子親到龍潭。師乃設禮而退。至夜間入室。侍立更深。潭云。何不下去。山遂揭珍面重簾而出。見外黑。却回云。門外黑。潭遂點紙燭度與山。山方接。潭便吹滅。山豁然大悟。便禮拜。潭云。子見箇什麼。便禮拜。山云。某甲自今後。更不疑著天下老和尚舌頭。至來日。潭上堂云。可中有箇漢。牙如劒樹口似血盆。一棒打不回頭。他時異日。向孤峰頂上。立吾道去在。山遂取疏鈔。於法堂前。將火炬擧起云。窮諸玄辯。若一毫置於太虛。竭世樞機。似一滴投於巨壑。遂燒之。後聞溈山盛化。直造溈山。便作家相見。包亦不解。直上法堂。從東過西。從西過東。顧視云。無無。便出。且道。意作麼生。莫是顛麼。人多錯會。用作建立。直是無交涉。看他恁麼。不妨奇特。所以道。出群須是英靈漢。敵勝還他獅子兒。選佛若無如是眼。假饒千載又奚爲。到這裏。須是通方作者。方始見得。何故。佛法無許多事。那裏著得情見來。是他心機。那裏有如許多阿勞。所以玄沙道。直似秋潭月影。靜夜鐘聲。隨扣擊。以無虧。觸波瀾而不散。猶是生死岸頭事。到這裏。亦無得失是非。亦無奇特玄妙。既無奇特玄妙。作麼生會。他從東過西。從西過東。且道。意作麼生。溈山老漢。也不管他。若不是溈山。也被他折挫一上。看他溈山老作家相見。只管坐觀成敗。若不深辨來風。爭能如此。雪竇著語云。勘破了也。一似鐵橛相似。衆中謂之著語。雖然在兩邊。却不住在兩邊。作麼生會。他道。勘破了也。什麼處是勘破處。且

道。勘破德山。勘破溈山。德山遂出到門首。却要拔本。自云。也不得草草。要與溈山掀出五臟心肝。法戰一場。再具威儀。却回相見。溈山坐次。德山提起坐具云。和尚。溈山擬取拂子。德山便喝。拂袖而出。可煞奇特。衆中多道。溈山怕他。有甚交涉。溈山亦不忙。所以道。智過於禽獲。得禽。智過於獸獲。得獸。智過於人獲。得人。參得這般禪。盡大地。森羅萬象。天堂地獄。草芥人畜。一時作一喝來。他亦不管。掀倒禪牀。喝散大衆。他亦不顧。如天之高。似地之厚。溈山若無坐斷天下人舌頭。底手脚。時驗他也大難。若不是他一千五百人善知識。到這裏也分疎不下。溈山是運籌帷幄。決勝千里。德山背却法堂。着草鞋。便出去。且道。他意作麼生。儞道德山是勝是負。溈山恁麼是勝是負。雪竇著語云。勘破了也。是他下工夫。見透古人聲訛。極則處。方能恁麼不妨奇特。訥堂云。雪竇著兩箇勘破。作三段判。方顯此公案。似傍人斷二人相似。後來這老漢。緩緩地至晚。方問首座。適來新到。在什麼處。首座云。當時背却法堂。着草鞋出去也。溈山云。此子已後向孤峰頂上。盤結草庵。呵佛罵祖去在。且道。他意旨如何。溈山老漢。不是好心。德山後來呵佛罵祖。打風打雨。依舊不出他窠窟。被這老漢見透平生伎倆。到這裏。喚作溈山與他受記。得麼。喚作澤廣藏山。理能伏豹。得麼。若恁麼。且喜沒交涉。雪竇知此公案落處。敢與他斷更道。雪上加霜。又重拈起來教人見。若見得去。許儞與溈山德山雪竇同參。若也不見。切忌妄生情解。

【頌】一勘破。言猶在耳○過一一勘破。兩量公案雪上加霜曾嶮墮。三段不同在什麼處○飛騎將軍入虜庭。喻○敗軍之將無勢再得完全能幾箇。死中得活急走過。彷若無人再斬○喪身失命。理能伏豹○穿却鼻孔○三十六策盡彌神通堪作何用不放過。穿却鼻孔孤峯頂上草裏坐。果然○穿過鼻孔也未發奇特○爲什麼却在草裏坐咄。會麼○兩刃相傷○兩兩三三舊路行○唱拍相隨○便打

【評唱】雪竇頌一百則公案。一則則焚香拈出。所以大行於世。他更會文章。透得公案。盤礴得熟。方可下筆。何故如此。龍蛇易辨。衲子難瞞。雪竇參透這公案。於節角聲訛處。著三句語。撮來頌出。雪上加霜。幾乎嶮墮。只如德山。似什麼。一似李廣天性善射。天子封爲飛騎將軍。深入虜庭。被單于生獲。廣時傷病。置廣兩馬間。絡而盛臥。廣遂詐死。睨其傍有一胡兒騎善馬。廣騰身上馬。推墮胡兒。奪其弓矢。鞭馬南馳。彎弓射退追騎。以故得脫。這漢有這般手段。死中得活。雪竇引在頌中。用比德山再入相見。依舊被他跳得出去。看他古人見到說到。行到用到。不妨英靈。有殺人不眨眼底手脚。方可立地成佛。有立地成佛底人。自然殺人不眨眼。方有自由自在分。如今人。有底問著。頭上一似衲僧氣槩。輕輕拶著。便腰做段。股做截。七支八離。渾無些子相續處。所以古人道。相續也大難。看他德山潙山如此。豈是滅滅挈挈底見解。再得完全能幾箇。急走過德山喝便出去。一似李廣被捉後。

設計一箭射殺一箇番將。得出虜庭。相似。雪竇頌到此大有工夫。德山背却法堂。著草鞋出去。道得便宜。殊不知這老漢依舊不放他出頭。在雪竇道。不放過。潙山至晚問問首座。適來新到在什麼處。首座云。當時背却法堂。著草鞋出去也。潙山云。此子他日。向孤峯頂上盤結草庵。呵佛罵祖去在。幾曾是放過來。不妨奇特。到這裏。雪竇爲什麼道。孤峰頂上草裏坐。又下一咄。且道落在什麼處。更參三十年。

第五則　雪峰盡大地

【垂示】大凡扶竪宗教。須是英靈底漢。有殺人不眨眼底手脚。方可立地成佛。所以照用同時。卷舒齊唱。理事不二。權實並行。放過一著。建立第二義門。直下截斷葛藤。後學初機。難爲湊泊。昨日恁麼事不獲已。今日又恁麼。罪過彌天。若是明眼漢。一點謾他不得。其或未然。虎口裏橫身。不免喪身失命。試舉看。

【本則】雪峯示衆云。一盲引衆盲。○不爲分外盡大地撮來。如粟米粒大。是什麼手段○山僧從來不弄鬼眼睛拋向面前。只恐拋不下○漆桶不會。倚勢欺人○自領出去○莫設大衆好打鼓普請看。瞎○打鼓爲三軍

【評唱】長慶問雲門。雪峰與麼道。還有出頭不得處麼。門云。有。慶云。作麼生。門云。不可總作野孤精見解。雪峰云。匹上不足。匹下有餘。我更與你打葛藤。拈柱杖云。還見雪峰麼。咄。王令稍嚴。不許攙奪行市。大潙喆云。我更與你諸人。土上加泥。拈柱杖云。看看。雪峰向諸人面前放屙。咄。爲什麼。屎臭也不知。雪峰示衆云。盡大地撮來。如粟米粒大。古人接物利生。有奇特處。只是不妨辛勤。三上投子。九到洞山。置漆桶木杓。到處作飯頭。也只爲透脫此事。及至洞山作飯頭。一日洞山問雪峰。作什麼。峰云。淘米。山云。淘沙去米。淘米去沙。峰云。沙米一齊去。山云。大衆喫箇什麼。峰便覆盆。山云。子緣在德山。指令見之。纔到便問。從上宗乘中事。學人還有分也無。德山打一棒云。道什麼。因此有省。後在鰲山阻雪。謂嵓頭云。我當時在德山棒下。如桶底脫。相似嵓頭喝云。儞不見道。從門入者。不是家珍。須是自己胷中流出。蓋天蓋地。方有少分相應。雪峰忽然大悟。禮拜云。師兄。今日始是鰲山成道。如今人只管道。古人特地做作。教後人依規矩。若恁麼。正是謗他古人。謂之出佛身血。古人不似。如今人苟且。豈以一言半句。以當平生。若扶竪宗教。續佛壽命。所以吐一言半句。自然坐斷天下人舌頭。無儞著意路。作情解。涉道理處。看他此箇示衆。蓋爲他曾見作家來。所以有作家鉗鎚。凡出一言半句。不是心機意識思量鬼窟裏作活計。直是超群拔萃。坐斷古今。不容擬議。他家用處。盡是如此。一日示衆云。南山有一條鼈鼻蛇。汝等諸人。切

須好看取。時稜道者出衆云。恁麼則今日堂中。大有人喪身失命去在。又云。盡大地是沙門一隻眼。汝等諸人。向什麼處屙。又云。望州亭與汝相見了也。烏石嶺與汝相見了也。僧堂前與汝相見了也。時保福問鵝湖。僧堂前即且置。如何是望州亭。烏石嶺相見處。鵝湖驟步歸方丈。他常擧這般語示衆。只如這盡大地撮來。如粟米粒大。這箇時節。且道以情識卜度得麼。須是打破羅籠。得失是非。一時放下。洒洒落落。自然透得他圈纏。方見他用處。且道雪峰意在什麼處。人多作情解道。心是萬法之主。盡大地一時在我手裏。且喜沒交涉。到這裏。須是箇眞實漢。聊聞擧著。徹骨徹髓。見得透。且不落情思意想。若是箇本色行脚衲子。見他恁麼已是郎當。爲人了也。看他雪竇頌云。

【頌】牛頭沒。閃電相似。踐過了也。○馬頭回。如擊石火。曹溪鏡裏絕塵埃。打破鏡來與儞相見。○須是打破始得。打鼓看來君不見。刺破儞眼睛。○莫輕易好。○漆桶有什麼雖見處。百花春到爲誰開。法不相饒。

○一場狼藉。○藤窩裏出頭來。

此兩句。一時道盡了也。雪竇第三句。却通一線道。略露些風規。早是落草。第四句。直下更是落草。若向言上生言。句上生句。意上生意。作解作會。不唯帶累老僧。亦乃辜負雪竇。古人句雖如此。意不如此。終不作道理繫縛人。曹溪鏡裏絕塵挨。多少人道靜心便是鏡。且喜沒交涉。只管作計較道理。有什麼了期。這箇是本分說話。山僧不敢不依本分。牛頭沒。馬頭回。雪竇分明說了也。自是人不見。所以雪竇如此郎當頌道。打鼓看來君不見。癡人還見麼。更向儞道。百花春至爲誰開。可謂豁開戶牖。與儞一時八字打開了也。及乎春來。幽谷野澗。乃至無人處。百花競發。儞且道。更爲誰開。

第六則　雲門十五日

【本則】雲門垂語云。十五日已前不問汝。半河南半河北○這裏不收舊曆日○十五日已後。道將一句來。不免從朝至暮○切忌道着來日是十六日月如流自代云。日日是好日。收○鰕跳不出斗○誰家無明月清風○還知麼○海神知貴不知價

【評唱】雲門初參睦州。州旋機電轉。直是難湊泊。尋常接人。纔跨門便摑住云。道道。擬議不來。便推出云。秦時輥轆鑽雲門。凡去見。至第三回。纔敲門。州云。誰。門云。文偃。纔開門。便

跳入。州摑住云。道道。門擬議。便被推出。門一足在門閫內。被州急合門。拶折雲門脚。門忍痛作聲。忽然大悟。後來語脉接入。一模脫出睦州。後於陳操尚書宅住三年。睦州指往雪峰處去。至彼出衆便問。如何是佛。峰云。莫寐語。雲門便禮拜。一住三年。雪峰一日問。子見處如何。門云。某甲見處。與從上諸聖。不移易一絲毫許。靈樹三十年。不請首座。常云。我首座生也。又云。我首座牧牛也。復云。我首座行脚也。忽一日令撞鐘。三門前接首座。衆皆訝之。雲門果至。便請入首座寮。解包。靈樹人號曰知聖禪師。過去未來事預皆知。一日廣主劉王。將興兵。躬入院。請師決。臧否。靈樹已先知。怡然坐化。廣主怒曰。和尚何時得疾。侍者對曰。師不曾有疾。適封一合子。令俟王來。呈之。廣主開合。得一帖子。云。人天眼目。堂中首座。廣主悟旨。遂寢兵。請雲門。出世住靈樹。後來方住雲門。師開堂說法。有鞠常侍致問。靈樹果子熟未也。門云。什麼年中。得信道生。復引劉王昔爲賣香客。等因緣。劉王後謚靈樹爲知聖禪師。靈樹生生不失通。雲門凡三生爲王。所以失通。一日劉王詔師入內過夏。共數人尊宿。皆受內人問訊。說法。唯師一人不言。亦無人親近。有一直殿使。書一偈。貼在碧玉殿上云。大智修行始是禪。禪門宜默不宜喧。萬般巧說爭如實。輸却雲門總不言。雲門尋常愛說三字禪。顧鑒咦。又說一字禪。僧問。殺父殺母。佛前懺悔。殺佛殺祖。向什麼處懺悔。門云。露。又問。如何是正法眼藏。門云。普。直是不容擬議。到平鋪處。又却罵人。若下一句

語。如鐵橛子相似。後出四哲。乃洞山初。智門寬。德山密。香林遠皆爲大宗師。香林十八年爲侍者。凡接他只叫遠侍者。遠云。諸門云。是什麼。如此十八年。一日方悟門云。我今後更不叫汝。雲門尋常接人。多用睦州手段。只是難爲湊泊。有抽拔楔底鉗鎚。雪竇道。我愛韶陽新定機。一生與人抽釘拔楔。垂箇問頭。示衆云。十五日已前不問汝。十五日已後道將一句來。坐斷千差。不通凡聖。自代云。日日是好日。十五日已前。這語已坐斷千差。十五日已後。這語也坐斷千差。是他不道。明日是十六。後人只管隨語生解。有什麼交涉。他雲門立箇宗風。須是有箇爲人處。垂語了。却自代云。日日是好日。此語通貫古今。從前至後。一時坐斷。山僧如此說話。也是隨語生解。他殺不如自殺。纔作道理。墮坑落塹。雲門一句中。三句俱備。蓋是他家宗旨如此。垂一句語。須要歸宗。若不如此。只是杜撰。此事無許多論說。而未透者。却要如此。若透得。便見古人意旨。看取雪竇打葛藤。

【頌】去却一。七穿八穴○向什麼處去○放過一著。拈得七。拈不出○却不放過。上下四雜無等匹。何似生○上是天下是地東南西北與四維有什麼等匹○爭奈拄杖在我手裏。徐行踏斷流水聲。莫問脚跟下○雖爲體究○打入葛藤窟裏去了也。縱觀寫出飛禽跡。眼裏亦無此消息○野狐精見解○依前只在舊窠窟裏。煙冪冪。未出這窠窟○足下雲生。空生巖畔花狼籍。在什麼處○不唧唧漢○勘破了也。彈指堪悲舜

苦多。四方八面盡法界○向舜若多鼻孔裏道將一句來○在什麼處。莫動著。前言何在○動著時如何。動著三十棒。自領出去○便打

【評唱】雪竇頌古。偏能如此。當頭以金剛王寶劍。揮一下了。然後略露些風規。雖然如此。畢竟無有二解。去却一。拈得七。人多作算數會道。去却一。是十五日已前事。雪竇驀頭下兩句言語。印破了。却露出教人見。去却一。拈得七。切忌向言句中作活計。何故。胡餅有什麼汁。人多落在意識中。須是向語句未生已前。會取始得。大用現前。自然見得也。所以釋迦老子成道後。於摩竭提國。三七日中。思惟如是事。諸法寂滅相。不可以言宣。我寧不說法。疾入於涅槃。到這裏。覓箇開口處不得。以方便力故。爲五比丘說已。至三百六十會。說一代時教。只是方便。所以脫珍御服。著弊垢衣。不得已而向第二義門中。淺近之處。誘引諸子。若教他向上全提。盡大地無一箇半箇。且道。作麼生是第一句。到這裏。雪竇露些意。教人見。儞但上不見有諸佛。下不見有衆生。外不見有山河大地。內不見有見聞覺知。如大死底人却活。相似長短好惡。打成一片。一一括來。更無異見。然後應用不失其宜。方見他道。去却一。拈得七。上下四維無等匹。若於此句透得。直得上下四維無有等匹。森羅萬象。草芥人畜。著著全彰。自己家風。所以道。萬象之中獨露身。惟人自肯乃方親。昔年謬向

途中覓。今日看來火裏冰。天上天下唯我獨尊。人多逐末。不求其本。先得本正。自然風行草偃。水到渠成。徐行路斷水聲。徐徐行動時浩浩流水聲。也應踏斷。縱觀寫出飛禽跡縱目一觀。直饒是飛禽跡。亦如寫出相似。到這裏。鑊湯爐炭吹教滅。劍樹刀山喝便摧。不爲難事。雪竇到此慈悲之故。恐人坐在無事界中。復道草茸茸。煙羃羃。且道是什麼人境界。喚作日日是好日。得麼。且喜沒交涉。直得徐行踏斷流水聲也不是。縱觀寫出飛禽跡也不是。草茸茸也不是。煙羃羃也不是。直饒總不恁麼。正是空生巖畔花狼籍也。須是轉過那邊。始得。豈不是。須菩提巖中宴坐。諸天雨花讚歎。尊者曰。空中雨花讚歎。復是何人。天曰。我是天帝釋。尊者曰。汝何讚嘆。天曰。我重尊者善說般若波蜜羅多。尊者曰。我於般若。未嘗說一字。汝云何讚歎。天曰。尊者無說。我乃無聞。無說無聞。是眞般若。又復動地雨花。雪竇亦曾有頌云。雨過雲凝曉半開。數峰如畫碧崔嵬。空生不解巖中坐。惹得天花動地來。天帝既動地雨花。到這裏。更藏去那裏。雪竇又道。我恐逃之逃不得。大方之外皆充塞。忙忙擾擾知何窮。八面清風惹衣裓。直得淨躶躶赤洒洒。都無纖毫過患也。未爲極則。且畢竟如何即是。看取下文。云。彈指攝悲舜若多。楚語舜若多。此云虛空神。以虛空爲體。無身覺觸。得佛光照。方現得身。儞若得似舜若多神時。雪竇正好彈指悲歎。又云。莫動著。動著時如何。白日青天。開眼磕睡。

第七則　法眼答慧超

【垂示】聲前一句。千聖不傳。未曾親覩。如隔大千。設使向聲前辨得。截斷天下人舌頭。亦未是性燥漢。所以道。天不能蓋。地不能載。虛空不能容。日月不能照。無佛處獨稱尊。始較些子。其或未然。於一毫頭上透得。放大光明。七縱八橫。於法自在自由。信手拈來。無有不是。且道。得箇什麼。如此奇特。復云。大衆會麼。從前汗馬無人識。只要重論蓋代功。即今事且致。雪竇公案。又作麼生。看取下文。

【本則】僧問法眼。道什麼。○擔柳過狀 慧超答和尚。如何是佛。道什麼。○眼睛突出 法眼云。汝是慧超。依樣脫出。○餡餃 就身打劫

【評唱】法眼禪師。有啐啄同時底機。具啐啄同時底用。方能如此答話。所謂超聲越色。得大自在。縱奪臨時。殺活在我。不妨奇特。然而此箇公案。諸方商量者多。作情解會者不少。不知古人凡垂示一言半句。如擊石火。似閃電光。直下撥開一條正路。後人只管去言句上。作解會。道慧超便是佛。所以法眼恁麼答。有者道。大似騎牛覓牛。有者道。問處便是。有什麼交涉。若恁麼會去。不惟辜負自己。亦乃滾屈古人。若要見他全機。除非是一棒打不

回頭底漢。牙如劍樹。口似血盆。向言外知歸。方有少分相應。若一一作情解。盡大地是滅胡種族底漢。只如超禪客於此悟去。也是他尋常管帶參究。所以一言之下。如桶底脫相似。只如則監院。在法眼會中。也不曾參請入室。一日法眼問云。則監院何不來入室。則云。和尚豈不知某甲於青林處。有箇入頭。法眼云。汝試爲我舉看。則云。某甲問。如何是佛。林云。丙丁童子來求火。法眼云。好語。恐儞錯會。可更說看。則云。丙丁屬火。以火求火。如某甲是佛。更去覓佛。法眼云。監院果然錯會了也。則不憤。便起單。渡江去。法眼云。此人若回可救。若不回。救不得也。則到中路。自忖云。他是五百人善知識。豈可賺我耶。遂回再參。法眼云。儞但問我。我爲儞答。則便問。如何是佛。法眼云。丙丁童子來求火。則於言下大悟。如今有者只管瞪眼作解會。所謂彼既無瘡。勿傷之也。這般公案。久參者。一舉便知落處。法眼下謂之箭鋒相拄。更不用五位君臣。四料簡。直論箭鋒相拄。是他家風如此。一句下便見。當陽便透。若向句下尋思。卒摸索不著。法眼出世。有五百衆。是時佛法大興。時韶國師。久依疎山。自謂得旨。乃集疎山平生文字頂相。領衆行脚。至法眼會下。他亦不去入室。只令參徒隨衆入室。一日法眼陞座。有僧問。如何是曹源一滴水。法眼云。是曹源一滴水。其僧惘然而退。韶在衆聞之。忽然大悟。後出世承嗣法眼。有頌呈云。通玄峰頂。不是人間。心外無法。滿目青山。法眼印云。只這一頌。可繼吾宗。子後有王侯敬重。吾不如汝。看他古人。恁

麼悟去。是什麼道理。不可只教山僧說。須是自己。二六時中打辨精神。似恁麼與他承當。他日向十字街頭。垂手爲人。也不爲難事。所以僧問法眼。如何是佛。法眼云。汝是慧超。有甚相辜負處。不見雲門道。擧不顧即差互。擬思量何切悟。雪竇後面頌得。不妨顯赫。試擧看。

【頌】江國春風吹不起。盡大地那裏得這消息。○文彩已彰。鷓鴣啼在深花裏。啼啼何用悲。○又被風吹。別調中。○豈有恁麼事。三級浪高魚化龍。通這一路。○莫謾大衆。衆好。○踏著龍頭。凝人猶戽夜塘水。扶籬模壁。○挨門傍戶。○衲僧有什麼用處。○守株待兎。

【評唱】雪竇是作家。於古人難咬難嚼。難透難見。節角諸訛處。頌出教人見。不妨奇特。雪竇識得法眼關棍子。又知慧超落處。更恐後人向法眼言句下。錯作解會。所以頌出。這僧如此問。法眼如是答。便是江國春風吹不起。鷓鴣啼在深花裏。此兩句只是一句。且道。雪竇意在什麼處。江西江南。多作兩般解會。道江國春風吹不起用。頌汝是慧超。只這箇消息。直饒江國春風也吹不起。鷓鴣啼在深花裏。用頌諸方商量這話。浩浩地似鷓鴣啼在深花裏。相似有什麼交涉。殊不知。雪竇這兩句。只是一句。要得無縫無罅。明明向汝道。言也端語也端。蓋天蓋地。他問如何是佛。法眼云。汝是慧超。雪竇道。江國春風吹不起。鷓鴣啼在深花裏。向這裏薦得去。可以丹霄獨步。儞若作情解。三生六十劫。雪竇第三第四句。

忒煞傷慈。爲人一時說破。超禪師當下大悟處。如三級浪高魚化龍。癡人猶戽夜塘水。禹門三級浪。孟津即是龍門。禹帝鑿爲三級。今三月三。桃花開時。天地所感。有魚透得龍門。頭上生角。昂鬃豎尾。拏雲而去。跳不得者。點額而回。癡人向言下咬嚼。似戽夜塘之水。求魚相似。殊不知。魚已化爲龍也。端師翁有頌云。一文大光錢。買得箇油糍。喫向肚裏了。當下不聞飢。此頌極好。只是太拙。雪竇頌得極巧。不傷鋒犯手。舊時慶藏主愛問人。如何是三級浪高魚化龍。我也不必在。我且問儞。化作龍去。即今在什麼處。

第八則　翠巖夏末示徒

【垂示】會則途中受用。如龍得水。似虎靠山。不會則世諦流布。羝羊觸藩。守株待兎。有時一句。如踞地獅子。有時一句。如金剛王寶劍。有時一句。隨波逐浪。若也途中受用。遇知音別機宜。識休咎。相共證明。若也世諦流布。具一隻眼。可以坐斷十方。壁立千仞。所以道。大用現前。不存軌則。有時將一莖草。作丈六金身用。有時將丈六金身。作一莖草用。且道。憑箇什麼道理。還委悉麼。試舉看。

【本則】翠巖夏末示衆云。一夏此來。爲兄弟說話。開口爲知恁麼看翠

巖眉毛在麼。只贏得眼睛也落地。和鼻孔也失了。入地獄如箭射。保福云。作賊人心虛。灼然是賊識賊。長慶云。生也。舌頭落地。將錯就錯。果然雲門云。關。走在什麼處去。天下衲僧跳不出。敗也。

【評唱】古人有晨參暮請。翠巖至夏末。却恁麼示衆。然而不妨孤峻。不妨驚天動地。且道。一大藏教。五千四十八卷。不免說心說性。說頓說漸。還有這箇消息麼。一等是恁麼時節。翠巖就中奇特。看他恁麼道。且道。他意道在什落處。古人垂一鈎。終不虛設。須是有箇麼理爲人。人多錯會道。白日青天。說無向當話。無事生事。夏末先自說過。先自點檢。免得別人點檢他。且喜沒交涉。這般見解。謂之滅胡種族。歷代宗師出世。若不垂示於人。都無利益。圖箇什麼。到這裏見得透。力知古人有驅耕夫之牛。奪飢人之食手段。如今人問著。便向言句下咬嚼。眉毛上作活計。看他屋裏人。自然知他行履處。千變萬化。節角聲訛。著著有出身之路。便能如此與他酬唱。此語若無奇特。雲門保福長慶三人。唾唾地與他酬唱作什麼。保福云。作賊人心虛。只因此語。惹得適來說許多情解。且道。保福意作麼生。切忌向句下覓。他古人。儞若生情起念。則換你眼睛。殊不知。保福下一轉語。截斷翠巖脚跟。長慶云。生也。人多道。長慶隨翠巖脚跟轉。所以道。生也。且得沒交涉。不知長慶自出他見解。道。生也。各有出身處。我且問儞。是什麼處是生處。一似作家面前。金剛王寶劍。直下便用。

若能打破常流見解。截斷得失是非。方見長慶與他酬唱處。雲門云。關。不妨奇特。只是難參。雲門大師。多以一字禪示人。雖一字中。須具三句。看他古人臨機酬唱。自然與今時人迥別。此乃下句底樣子。他雖如此道。意決不在那裏。既不在那裏。且道在什麼處。也須子細自參始得。若是明眼人。有照天照地底手脚。直下八面玲瓏。雪竇爲他一箇關字。和他三箇穿作一串頭出。

【頌】翠巖示徒。（這老賊○教壞人家男女）千古無對。（千箇萬箇○也有一箇半箇○分一節）關字相酬。（不信道○不妨奇特○若是恁麼人方解恁麼道）失錢遭罪。（飲氣吞聲○雪竇也不少○和聲便打）潦倒保福。（同行同伴○猶作這去就○兩箇三箇）抑揚難得。（放行把住○誰是同生同死○莫謗他好○且喜沒交涉）嘮嘮翠巖。（這野狐精○合取口好）分明是賊。（道著也不妨○捉敗了也）白圭無玷。（還辨得麼○天下人不知價）誰辨眞假。（多只是假○山僧從來無眼○碧眼胡僧）長慶相諳。（是精識精○須是他始得○未得一半在）眉毛生也。（在什麼處○從頂門上至脚跟下一一莖草也無）

【評唱】雪竇若不恁麼慈悲頌出令人見。爭得名善知識。古人如此。一一皆是事不獲已。蓋爲後學著他言句。轉生情解。所以不見古人意旨。如今忽有箇出來。掀倒禪床。喝散大衆。在他不得。雖然如此。也須實到這田地。始得雪竇道。千古無對。他只道。看翠巖眉毛在

麼。有什麼奇特處。便乃千古無對。須知古人吐一言半句出來。不是造次。須是有定乾坤底眼。始得雪竇著一言半句。如金剛王寶劒。如踞地獅子。如擊石火。似閃電光。若不是頂門具眼。爭能見他古人落處。這箇示衆。直得千古無對。過於德山棒。臨濟喝。且道雪竇爲人意在什麼處。儞且作麼生會。他道千古無對。關字相酬。失錢遭罪。這箇意如何。直饒是具透關底眼。到這裏。也須子細始得。且道。是翠巖失錢遭罪。是雪竇失錢遭罪。是雲門失錢遭罪。儞若透得。許儞具眼。潦倒保福。抑揚難抑。自己。揚古人。且道。保福在什麼處是抑。什麼處是揚。嘮嘮翠巖。分明是賊。且道。他偷什麼來。雪竇却道是賊。切忌隨他語脉轉却。到這裏。須是自有操持。始得。白圭無玷。頌翠巖大似白圭。相似。更無些瑕翳。誰辨眞假。可謂罕有人辨得。雪竇有大才。所以從頭至尾。一串穿却。末後却方道。長慶相諳。眉毛生也。且道。生也在什麼處。急著眼看。

第九則　趙州東西南北

【垂示】明鏡當臺。妍醜自辨。鍫鋤在手。殺活臨時。漢去漢來。胡來漢去。死中得活。活中得死。且道。到這裏。又作麼生。若無透關底眼。轉身處。到這裏。灼然不奈何。且道。如何是透關底眼轉身處。試擧看。

【本則】僧問趙州。如何是趙州。河北河南總說不著○彌泥裏有刺○不在河南正在河北 州云。東門西門南門北門。開也○相罵饒彌接背相唾饒彌發水○見成公案○還見麼○便打

【評唱】大凡參禪問道。明究自己。切忌揀擇言句。何故。不見趙州擧道。至道無難。唯嫌揀擇。又不見雲門道。如今禪和子。三箇五箇聚頭口喃喃地便道。這箇是上才語句。那箇是就身處打出語。不知古人方便門中。爲初機後學。未明心地。未見本性。不得已而立箇方便語句。如祖師西來。單傳心印。直指人心。見性成佛。那裏如此葛藤。須是斬斷語言。格外見諦。透脫得去。可謂如龍得水。似虎靠山。久參先德。有見而未透。透而未明。謂之請益。若是見得透請益。却要語句上周旋。無有凝滯。久參請益。與賊過梯。其實此事不在言句上。所以雲門道。此事若在言句上。三乘十二分教。豈是無言句。何須遠磨西來。汾陽十八問中。此間謂之驗主問。亦謂之探拔問。這僧致箇問頭。也不妨奇特。若不是趙州。也難祗對他。這僧問。如何是趙州。趙州是本分作家。便向道。東門西門南門北門。僧云。某甲不問這箇趙州。州云。儞問那箇趙州。後人喚作無事禪。賺人不少。何故。他問趙州。州答云。東門西門南門北門。所以只答他趙州。儞若恁麼會。三家村裏漢。更是會佛法去。只這便是破滅佛法。如將魚目比況明珠。似則似。是則不是。山僧道。不在河南。正在河北。且道。是有事。是

無事。也須是子細始得。遠錄公云。末後一句。始到牢關。指南之旨。不在言詮。十日一風。五日一雨。安邦樂業。鼓腹謳歌。謂之太平時節。謂之無事。不是拍盲便道無事。須是透過關棍子。出得荊棘林。淨躶躶赤灑灑。依前似平常人。由儞有事也得。無事也得。七縱八橫。終不執無定有。有般底人道。本來無一星事。但只遇茶喫茶。遇飯喫飯。此是大妄語。謂之未得謂得。未證謂證。元來不曾參得透。見人說心說性。說玄說妙。便道只是狂言。本來無事。可謂一盲引衆盲。殊不知。祖師未來時。那裏喚天作地。喚山作水來。爲什麼祖師更西來。諸方陞堂入室。說箇什麼。盡是情識計較。若是情識計較盡。方見得透。依舊天是天。地是地。山是山。水是水。古人道。心是根法是塵。兩種猶如鏡上痕。到這箇田地。自然淨躶躶赤灑灑。若極則理論。也未是安穩處在。到這裏。人多錯會。打在無事界裏。佛也不禮。香也不燒。似則也似。爭奈脫禮不是。纔問著。却是極則相似。纔拶著。七花八裂。坐在空腹高心處。及到臘月三十日。換手搥胷。已是遲了也。這僧恁麼問。趙州恁麼答。且道。作麼生摸索。恁麼也不得。不恁麼也不得。畢竟如何。這些子是難處。所以雪竇枯出來。當面示人。趙州一日坐次。侍者報云。大王來也。趙州矍然云。大王萬福。侍者云。未到和尚州云。又道來也。參到這裏。見到這裏。不妨奇特。南禪師枯云。侍者只知報客。不知身在帝鄉。趙州入草求人。不覺渾身泥水。這些子實處。諸人還知麼。看取雪竇頌。

【頌】句裏呈機劈面來。○響○莫謗趙州好○魚行水濁○撈天摸地作什麼。東西南北門相對。開也○那裏有許多門○背却趙州城向什麼處去。無限輪鎚擊不開。自是儞輪鎚不到○開也

【評唱】趙州臨機。一似金剛王寶劒。擬議即截却儞頭。往往更當面換却儞眼睛。這僧也敢捋虎鬚。致箇問頭。大似無事生事。爭奈句中有機。他既呈機來。趙州也不辜負他問頭。所以亦呈機答。不是他特地如此。蓋爲透底人。自然合轍。一似安排來相似。不見有一外道。手握雀兒。來問世尊。云。且道。某甲手中雀兒。是死耶。是活耶。世尊遂騎門闖云。儞道。我出耶入耶。一本云。世尊竪起拳頭云。開也合也。外道無語。遂禮拜。此話便似這公案。古人自是血脈不斷。所以道。問在答處。答在問處。雪竇如此見得透便道。句裏呈機劈面來。句裏有機。如帶兩意。又似問人。又似問境。相似。趙州不移易一絲毫。便向他道。東門西門南門北門。爍迦羅眼絕纖埃。此頌趙州人境俱奪。向句裏呈機與他答。此謂之有機有境。纔轉便照破他心膽。若不如此。難塞他問頭。爍迦羅眼者。是梵語。此云堅固眼。亦云金剛眼。照見無碍。不唯千里明察秋毫。亦乃定邪決正。辨得失機宜。識休咎。雪竇云。東西南北門相對。無限輪鎚擊不開。既是無限輪鎚。何故擊不開。自是雪竇見處如此。儞諸人又作麼生。得此門開去。請參詳看。

第十則　睦州問僧近離甚處

【垂示】恁麼恁麼。不恁麼不恁麼。若論戰也。箇箇立在轉處。所以道。若向上轉去。直得繹迦彌勒。文殊普賢。千聖萬聖。天下宗師。普皆飲氣吞聲。若向上轉去。醯雞蠛蠓。蠢動含靈。一一放大光明。壁立萬仞。儻或不上不下。又作麼生商量。有條攀條。無條攀例。試舉看。

【本則】睦州問僧。近離甚處。探竿影草○作家禪客○且莫詐明頭○也解恁麼去。州云。老僧被汝一喝。陷虎之機○揀人作麼○僧又喝。看取頭角○似則似是則未是○只恐龍頭蛇尾。州云。三喝四喝後作麼生。逆水之波○未曾有一人出得頭○入那裏去。僧無語。果然摸索不著。州便打云。若使睦州盡令而行。盡大地草木悉斬爲三段。這掠虛頭漢。放過一著落在第二。

【評唱】大凡扶竪宗教。須是有本分宗師眼目。有本分宗師作用。睦州機鋒。如閃電相似。愛勘座主。尋常出一言半句。似箇荊棘叢相似。著脚手不得。他纔見僧來。便道見成公案。放儞三十棒。又見僧云。上座。僧回首。州云。擔板漢。又示衆云。未有箇入頭處。須得箇入頭處。既得箇入頭處。不得辜負老僧。睦州爲人多如此。這僧也善雕琢。爭奈龍頭蛇尾。當時

若不是睦州。也被他惑亂一場。只如他問近離什麼處。僧便喝。且道。他意作麼生。這老漢也不忙。緩緩地向他道。老僧被汝一喝。似領他話在。一邊。又似驗他相似。斜身看他如何。這僧又喝。似則似。是則未是。被這老漢穿却鼻孔來也。遂問云。三喝四喝後作麼生。這僧果然無語。州便打云。這掠頭虛漢。驗人端的處。下口便知音。可惜許。這僧無語。惹得睦州道。掠虛頭漢。若是諸人。被睦州道三喝四喝後作麼生。合作麼生。祇對。免得他道。掠虛頭漢。這裏若是識存亡。別休咎。脚踏實地。漢。誰管三喝四喝後作麼生。只爲這僧無語。被這老漢便據欵結案。聽取雪竇頌出。

【頌】兩喝與三喝。雷聲浩大雨點全無○自古至今罕有人恁麼。作者知機變。若不是作家爭驗得○只恐不恁麼。若謂騎虎頭。囫○瞎漢○虎頭如何騎○多少人恁麼會○也有人作這見解。二俱成瞎漢。親言山親口○何止兩箇○自領出去。誰瞎漢。教誰辨○賴有末後句○洎乎賺殺人。拈來天下與人看。看卽不無覷著卽瞎○閣梨若著眼看陳手掐則空○恁麼舉且道是第幾機

【評唱】古人道。有時一喝。不作一喝用。有時一喝。却作一喝用。有時一喝。如踞地獅子。有時一喝。如金剛王寶劍。與化道。我見爾諸人。東廊下也喝。西廊下也喝。且莫胡喝亂喝。直饒喝得與化。上三十三天。却撲下來。氣息一點也無。待我甦醒起來。向汝道。未在。何故。與化未曾向紫羅帳裏撒眞珠。與爾諸人在。只管胡喝亂喝作什麼。臨濟道。我聞汝等總學

我喝。我且問爾。東堂有僧出。西堂有僧出。兩箇齊下喝。那箇是賓。那箇是主。爾若分賓主。不得。已後不得學老僧。所以雪竇頌道。作者知機變。這僧雖被睦州收。他却有識機變處。且道。什麼處。是這僧識機變處。鹿門知禪師。點這僧云。識法者懼。當頭道。若論戰也。箇箇立在轉處。黃龍心和尙道。窮則變。變則通。這箇些子。是祖師坐天下人舌頭處。爾若識機變。舉著。便知落處。有般漢云。管他道三喝四喝。作什麼。只管喝將去。說什麼三十二十喝。喝到彌勒佛下生。謂之騎虎頭。若恁麼知見。不識睦州。則故是。要見這僧。太遠在。如人騎虎頭。須是手中有刀。兼有轉變。始得。雪竇道。若恁麼。二俱成瞎漢。雪竇似倚天長劍。凜凜全威。若會得雪竇意。自然千處萬處一時會。便見他雪竇後面頌。只是下注脚。又道。誰瞎漢。且道。是賓家瞎。是主家瞎。莫賓主一時瞎。麼。拈來天下與人看。此是活處。雪竇一時頌了也。爲什麼。却道。拈來天下與人看。且道。作麼生看。開眼也著。還有人免得麼。

第十一則 黃檗酒糟漢

【垂示】佛祖大機。全歸掌握。人天命脈。悉受指呼。等閑一句一言。驚群動衆。一機一境。打鎖敲枷。接向上機。提向上事。且道。什麼人曾恁麼來。還有知落處麼。試擧看。

【本則】黃檗示衆云。打水碍盆○一口吞盡○天下衲僧跳不出。汝等諸人。盡是噇酒糟漢。

恁麼行脚。道著○踏破草鞋○掀天撼地何處有今日。用今日作什麼○不妨驚翠動衆還知大唐國裏無禪師麼。老僧不會○一口吞盡○也是雲居羅漢時有僧出云。只如諸方匡徒領衆。又作麼生。也好與一拶○臨機不得不恁麼璧云。不道無禪。只是無師。直得分疎不下○瓦解冰消○龍頭蛇尾漢

【評唱】黃檗身長七尺。額有圓珠。天性會禪。師昔遊天台。路逢一僧。與之談笑。如故相識。熟視之。日光射人。頗有異相。乃偕行。屬溪水暴漲。乃植杖捐笠而止。其僧率師同渡。師曰。請渡。彼即褰衣躡波。加履平地。回顧云。渡來渡來。師咄云。這自了漢。吾早知揑怪。當斫汝脛。其僧歎曰。眞大乘法器。言訖不見。初到百丈。丈問云。巍巍堂堂。從什麼處來。檗云。巍巍堂堂從嶺中來。丈云。來爲何事。檗云。不爲別事。百丈深器之。次日辭百丈。丈云。什麼處去。檗云。江西禮拜馬大師去。丈云。馬大師已還化去也。爾道。黃檗恁麼問。是知來問。是不知來問。却云。某甲特地去禮拜。福緣淺薄。不及一見。未審平日有何言句。願聞舉示。丈逐舉。再參馬祖。困緣。祖見我來。便堅起拂子。我問云。即此用。離此用。祖遂掛佛子於禪牀角。良久。祖却問我。汝已後皷兩片皮。如何爲人。我取拂子。竪起。祖云。即此用。離此用。我將拂子掛禪牀角。祖振威一喝。我當時直得三日耳聾。黃檗不覺悚然吐舌。丈云。子已後莫承嗣

馬大師麼。檗云。不然。今日因師舉。得見馬大師大機大用。若承嗣馬師。他日已後喪我兒孫。丈云如是如是。見與師齊。減師半德。智過於師。方堪傳授。子今見處。宛有超師之作。諸人且道。黃檗恁麼問。是知而故問耶。是不知而問耶。須是親見他家父子行履處。始得。黃檗一日。又問百丈。從上宗乘。如何指示。百丈良久。檗云。不可教後人斷絕去。百丈云。將謂汝是箇人。遂乃起入方丈。檗與裴相國爲方外友。裴鎮宛陵。請師至郡。以所解一編示師。師接置於座。略不披閱。良久乃云。會麼。裴云。不會。檗云。若便恁麼會得。猶較些子。若也形於紙墨。何處更有吾宗。裴乃以頌贊云。自從大士傳心印。額有圓珠七尺身。掛錫十年棲蜀水。浮盃今日渡漳濱。八千龍象隨高步。萬里香花結勝因。擬欲事師爲弟子。不知將法付何人。師亦無喜色。云心如大海無邊際。口吐紅蓮養病身。自有一雙無事手。不曾祇揖等閑人。檗住後。機鋒峭峻。臨濟在會下。睦州爲首座。問云。上座在此多時。何不去問話。濟云。教某甲問什麼話。即得。座云。何不去問如何是佛法的的大意。濟便去問。三度被打出。濟辭座曰。蒙首座令三番去問。被打出。恐因緣不在這裏。暫且下山。座云。子若去須辭和尚。去方可。首座預去白檗云。問話上座。甚不可得。和尚何不穿鑿教成一株樹。去與後人爲蔭涼。檗云。吾已知。濟來辭。檗云。汝不得向別處去。直向高安灘頭見大愚去。濟到大愚。遂舉前話。不知某甲過在什麼處。愚云。檗與麼老婆心切。爲爾徹困。更說什麼有過無過。

濟忽然大悟云。黃檗佛法無多子。大愚搊住云。儞適來又道有過。而今却道佛法無多子。濟於大愚脇下堅三拳。愚拓開云。汝師黃檗。非干我事。一日檗示衆云。牛頭融大師。橫說竪說。猶未知向上關棙子。在是時石頭馬祖下禪和子。浩浩地說禪說道。他何故却與麽道。所以示衆云。汝等諸人。盡是噇酒糟漢。恁麽行脚。取笑於人。但見八百一千人處便去。不可只圖熱鬧也。可中總似汝如此容易。何處更有今日事也。唐時愛罵人。作噇酒糟漢。人多喚作黃檗罵人。具眼者自見。佗落處。大意垂一鈎釣人問。衆中有不惜身命底禪和。便解恁麽出衆問。佗道。只如諸方匡徒領衆。又作麽生。也好一拶。這老漢果然分踈不下。便却解漏逗云。不道無禪。只是無師。且道。意在什麽處。佗從上宗旨。有時擒。有時縱。有時殺。有時活。有時放。有時收。敢問諸人。作麽生是禪中師。山僧恁麽道。已是和頭沒却了也。諸人鼻孔。在什麽處。良久云。穿却了也

【頌】凛凛孤風不自誇。(猶自不知有○也是雲居羅漢)端居寰海定龍蛇。(也要別緇素○也要皂白分明)大中天子曾輕觸。(說什麽大中天子○任太也須從地起○更高爭奈有天何)三度親遭弄爪牙。(死蝦蟆○多口作什麽○未爲奇特○猶是小機巧○若是大機大用現前盡十方世界乃至山河大地盡在黃檗處乞命)

【評唱】雪竇此一頌。一似黃檗眞贊相似。人却不得作眞贊會。他底句下。便有出身處。分明道。凛凛孤風不自誇。黃檗恁麽示衆。且不是爭人負我。自逞自誇。若會這箇消息。一任七縱八橫。有時孤峯頂獨立。有時鬧市裏橫身。豈可僻守一隅。捨愈不歇。愈尋愈不見。愈擔荷愈沒溺。古人道。無翼飛天下。有名傳世間。盡情捨却佛法道理。玄妙奇特。一時放下却較些子。自然觸處現成。雪竇道。端居寰海定龍蛇。是龍是蛇。入門來便驗取。謂之定龍蛇眼。擒虎兕機。雪竇又道。定龍蛇兮眼何正。擒虎兕兮機不全。又道。大中天子曾輕觸。三度親遭弄爪牙。黃檗豈是如今惡脚手。從來如此。大中天子者。續咸通傳中載。唐憲宗有二子。一曰穆宗。一曰宣宗。宣宗乃大中也。年十三。少而敏黠。常愛跏趺坐。穆宗在位時。因早朝罷。大中乃戲登龍床。作揖群臣勢。大臣見而謂之心風。乃奏穆宗。穆宗見而撫歎曰。我弟乃吾宗英胄也。穆宗於長慶四年晏駕。有三子。曰敬宗。文宗。武宗。敬宗繼父位二年。內臣謀易之。文宗繼位一十四年。武宗即位。常喚大中作癡奴。一日武宗恨大中昔日戲登父位。遂打殺致後苑中。以不潔灌而復甦。遂潛遁在香嚴閑和尚會下。後剃度爲沙彌。未受具戒。後與智閑遊方到廬山。因智閑題瀑布詩云。穿雲透石不辭勞。地遠方知出處高。閑吟此兩句。停思久之。欲釣他語脈看。如何。大中續云。溪澗豈能留得往。終歸大海作波濤。閑方知不是尋常人。乃默而識之。後到鹽官會中。請大中作書記。黃檗在彼作首座。檗一日禮佛次。大中見而問曰。不著佛求。不著法求。不著衆求。禮拜當何所求。檗云。不著

佛求。不著法求。不著衆求。常禮如是。大中云。用禮何爲。檗便掌。大中云。太麁生。檗云。這裏什麼所在。說麁說細。檗又掌。大中後繼國位。賜黃檗爲麁行沙門。裴相國在朝。後奏賜斷際禪師。雪竇知他血脈出處。便用得巧。如今還有弄爪牙底麼。便打。

第十二則　洞山麻三斤

【垂示】殺人刀。活人劍。乃上古之風規。亦今時之樞要。若論殺也。不傷一毫。若論活也。喪身失命。所以道。向上一路。千聖不傳。學者勞形。如猿捉影。且道。旣是不傳。爲什麼却有許多葛藤。公案具眼者。試說看。

【本則】僧問洞山。如何是佛。（鐵蒺藜○天下稱僧跳不出）山云。麻三斤。（灼然○破草鞋○指桃樹罵柳樹爲秤鎚）

【評唱】這箇公案。多少人錯會。直是難咬嚼。無下口處。何故。淡而無味。古人有多少答佛話。或云。殿裏底。或云。三十二相。或云。杖林山下竹筋鞭。及至洞山却麼。麻三斤。不妨截斷古人舌頭。人多作話會。麼。洞山是時在庫下。秤麻。有僧問。所以如此答。有底麼。洞山問東答西。有底麼。爾是佛。更去問佛。所以洞山遶路答之。死漢更有一般麼。只這麻三斤便

是佛。且得沒交涉。爾若恁麼去。洞山句下尋討。參到彌勒佛下生也未。夢見在。何故。言語只是載道之器。殊不知古人意。只管去句中求。有什麼巴鼻。不見古人道。道本無言。因言顯道。見道即忘言。若到這裏。還我第一機來始得。只這麻三斤。一似長安大路一條相似。舉足下足無有不是。這箇話與雲門餬餅話是一般。不妨難會。五祖先師頌云。賤賣擔板漢。貼秤麻三斤。千百年滴貨無處著。渾身。爾但打疊得情塵意想計較得失是非。一時淨盡。自然會去。

【頌】金烏急。（左眼半斤○快鷂趕不及○火焰裏橫身）玉兎速。（右眼八兩○姮娥宮裏作窠窟）善應何曾有輕觸。（如鐘在扣如谷受響）展事投機見洞山。（錯認定盤星○自是闍黎恁麼見）跛鼈盲龜入空谷。（自領出去○同坑無異土○阿誰打爾鷂子死）花簇簇錦簇簇。（兩重公案○一狀領過○依舊一般）南地竹兮北地木。（三重也有○四重公案○頭上安頭）因思長慶陸大夫。（瀨兒牽伴○山僧也恁麼雪竇也恁麼）解道合笑不合哭。（呵呵○蒼天夜半更添冤苦）咦。（咄○是什麼○便打）

【評唱】雪竇見得透。所以劈頭便道。金烏急。玉兎速。與洞山答麻三斤。更無兩般。日出月沒。日日如是。人多情解。只管道。金烏是左眼。玉兎是右眼。縱問著。便瞠眼云。在這裏。有什

麼交涉。若恁麼會。達磨一宗。掃地而盡。所以道。垂鈎四海。只釣獰龍。格外玄機。爲尋知己。雪竇是出陰界底人。豈作這般見解。雪竇輕輕去敲關擊節處。略露些子。教儞見。便下箇注脚。道。善應何曾有輕觸。洞山不輕酬這僧。如鐘在扣。如谷受響。大小隨應。不敢輕觸。雪竇一時突出心肝五藏。呈似儞諸人了也。雪竇有靜而善應頌云。覿面相呈。不在多端。龍蛇易辨。衲子難瞞。金鎚影動。寶劍光寒。直下來也。急著眼看。洞山初參雲門。門問。近離甚處。山云。渣渡。門云。夏在甚麼處。山云。湖南報慈。門云。幾時離彼中。山云。八月二十五。門云。放竹三頓棒。參堂去。師晚間入室。親近問云。某甲過在儞麼處。門云。飯袋子。江西湖南。便恁麼去。洞山於言下。豁然大悟。遂云。某甲他日向無人煙處。卓箇庵子。不著一粒米。不種一莖菜。常接待往來十萬大善知識。盡與伊抽却釘。拔却楔。拈却膩脂帽子。脫却鶻臭布衫。各令灑灑落落地。作箇無事人去。門云。身如椰子大。開得許大口。洞山便辭去。他當時悟處。直下顯脫。豈同小見。後來出世應機。麻三斤語。諸方只作答佛話會。如何是佛。杖林山下竹筋鞭。丙丁童子來求火。只管於佛上作道理。雪竇云。若恁麼作展事與投機。會。正似跛鼈盲龜入空谷。何年月日。尋得出路。去花簇簇錦簇簇。此是僧問智門和尚。洞山道。麻三斤意旨如何。智門云。花簇簇錦簇簇。會麼。僧云。不會。智門云。南地竹兮北地木。僧回舉似洞山。山云。我不爲汝說。我爲大衆說。遂上堂云。言無展事。語不投機。承言者喪。滯句

者迷。雪竇破人情見。故意式作一串頭出。後人却轉生情見。道。麻是孝服。竹是孝杖。所以道。南地竹兮北地木。花簇簇錦簇簇。是棺材頭邊畫底花草。還識羞麼。殊不知南地竹兮北地木。與麻三斤。只是阿爺與阿爹相似。古人答一轉語。決是意不恁麼。正似雪竇道。金烏急玉兎速。自是一般寬曠。只是金鍮難辨。魚魯參差。雪竇老婆心切。要破儞疑情。更引箇死漢。因思長慶陸大夫。解道合笑不合哭。若論他頌。只頭上三句。一時頌了。我且問儞。都盧只是箇麻三斤。雪竇却有許多葛藤。只是後悲忒煞。所以如此。陸亘大夫。作宣州觀察使。參南泉。泉遷化。亘聞喪入寺下祭。却呵呵大笑。院主云。先師與大夫有師資之義。何不哭。大夫云。道得即哭。院主無語。亘大哭云。蒼天蒼天。先師去世遠矣。後來長慶聞云。大夫合笑不合哭。雪竇借此意大綱道。儞若作這般情解。正好笑。莫哭。是便是。末後有一箇字。不妨磬訛。更道咦。雪竇還洗得脫麼。

第十三則　巴陵銀椀裏

【垂示】雲凝大野。徧界不藏。雪覆蘆花。難分朕迹。冷處冷如冰雪。細處細如米末。淡淡處佛眼難窺。密密處魔外莫測。舉一明三。即且止。坐斷天下人舌頭。作麼生道。且道。是什麼人分上事。試舉看。

【本則】僧問巴陵。如何是提婆宗。白馬入盧花○道什麼○點 巴陵云。銀椀裏盛雪。塞斷儞咽喉○七花八裂

【評唱】這箇公案。人多錯會道。此是外道宗。有什麼交涉。第十五祖提婆尊者。亦是外道中一數。因見第十四祖龍樹尊者。以針投鉢。龍樹深器之。傳佛心宗。繼爲第十五祖。楞伽經云。佛語心爲宗。無門爲法門。馬祖云。凡有言句。是提婆宗。只以此箇爲主。諸人盡是祖僧門下客。還曾體究得提婆宗麼。若體究得。西天九十六種外道。被汝一時降伏。若體究不得。未免著返披袈裟去在。且道。是作麼生。若道言句是。也沒交涉。若道言句不是。也沒交涉。且道。馬大師意在什麼處。後來雲門道。馬大師好言語。只是無人問。有僧便問。如何是提婆宗。門云。九十六種。汝是最下一種。昔有僧辭大隋。隋云。什麼處去。僧云。禮拜普賢去。大隋豎起拂子云。文殊普賢。盡在這裏。僧畫一圓相。以手托呈師。又拋向背後。隋云。侍者將一貼茶來。與這僧去。雲門別云。西天斬頭截臂。這裏自領出去。又云。赤旗在我手裏。西天論議。勝者手執赤旗。負墮者返披袈裟。從偏門出入。西天欲論議。須得奉王勅。於大寺中。聲鐘擊鼓。然後論議。於是外道於僧寺中。封禁鐘鼓。爲之沙汰。時迦那提婆尊者。知佛法有難。遂運神通。登樓鐘。欲擯外道。外道遂問樓上聲鐘者誰。提婆云。天。外道云。天是

誰。婆云。我。外道云。我是誰。婆云。我是你。外道云。你是誰。婆云。你是狗。外道云。狗是誰。如是七返。外道自知負墮。伏義。遂自開門。提婆於是從樓上持赤旗下來。外道云。汝何不後。婆云。汝何不前。外道云。汝是賤人。婆云。汝是良人。如是展轉酬問。提婆折以無礙之辯。由是歸伏。時提婆尊者。手持赤旗。義墮者旗下立。外道皆斬首謝過。時提婆止之。但化令削髮入道。於是提婆宗大興。雪竇後用此事。而頌之。巴陵衆中謂之鑒多口。常縫坐具行脚。深得他雲門脚跟下大事。所以奇特。後出世法嗣雲門。先住岳州巴陵。更不作法嗣書。只將三轉語上雲門。如何是道。明眼人落井。如何是吹毛劍。珊瑚枝枝撐著月。如何是提婆宗。銀椀裏盛雪。雲門云。他日老僧忌辰。只擧此三轉語。報恩足矣。自後果不作忌辰齋。依雲門之囑。只擧此三轉語。然諸方答此話。多就事上答。唯有巴陵恁麼道。極是孤峻。不妨難會。亦不露些子鋒鋩。八面受敵。著著有出身之路。有陷虎之機。脫人情見。若論一色邊事。到這裏須是自家透脫了。却須是遇人始得。所以道。道吾舞笏。同人會。石霜彎弓。作者請。此理若無師印授。擬將何法語玄談。雪竇隨後拈提爲人。所以頌出。

【頌】老新開。千兵易得一將難○多口阿師端的別。是什麼端的○頂門上一著夢見也末解道銀椀裏盛雪。鍛跳不出斗○兩重公案○多少人喪身失命九十六箇應自知。衆身在內○闍黎還知麼○一坑埋却不知却

問天邊月。遠之遠矣○自顧望空啓告出去○提婆宗提婆宗。道什麼○山僧在這裏○滿口含霜赤旛之下起清風。百雜碎○打云已著了也○爾且去斬頭截臂來與爾道一句

【評唱】老新開新開乃院名也。端的別。雪竇讚歎有分。且道什麼處是別處。一切語言皆是佛法。山僧如此說話。成什麼道理。去雪竇微露些子意。道只是端的別。後面打開云。解道銀椀裏盛雪。更與爾下箇注脚。九十六箇應自知。負墮始得。爾若不知。問取天邊月。古人會答此話云。問取天邊月。雪竇頌了。未後須有活路。有獅子返擲之句。更提起與爾道。提婆宗提婆宗。赤旛之下起清風。巴陵道。銀椀裏盛雪。爲什麼雪竇却道。赤旛之下起清風。還知雪竇殺人不用刀麼。

第十四則　雲門對一說

【本則】僧問雲門。如何是一代時教。直至如今不了○座主不會○葛藤窠裏雲門云。對一說。無孔鐵鎚○七花八裂○老鼠咬生薑

【評唱】禪家流。欲知佛性義。當觀時節因緣。謂之教外別傳。單傳心印。直指人心。見性成佛。釋迦老子四十九年住世。三百六十會。開談頓漸權實。謂之一代時教。這僧拈來問云。

如何是一代時教。雲門何不與他紛紛解說。却向他道箇對一說。雲門尋常一句中須具三句。謂之函蓋乾坤句。隨波逐浪句。截斷衆流句。放去收來。自然奇特。如斬釘截鐵。教人義解卜度他底不得。一大藏教。只消三箇字。四方八面。儞穿鑿處。人多錯會。却道對一時機宜之事。故說。又道。森羅及萬象。皆是一法之所印。謂之對一說。更有道。只是說那箇一法。有什麼交涉。非唯不會。更入地獄如箭。殊不知。古人意不如此。所以道。粉骨碎身未足酬。一句了然超百億。不妨奇特。如何是一代時教。只消道箇對一說。若當頭薦得。便可歸家穩坐。若薦不得。且伏聽處分。

【頌】對一說。活鰍鱔○言猶在耳○不妨孤峻太孤絕。傍觀有分○何止壁立千仞○豈有恁麼事無孔鐵鎚重下楔。錯會名言也○雲門老漢也是泥裏洗土塊○雪竇也是粧飾閻浮樹下笑呵呵。四州八縣不曾見。箇漢○同道者方知○能有幾人別別。讚歎有分○須是雪竇始得○有什麼別處韶陽老人得一橛。在什麼處○更有一橛分付阿誰○德山臨濟也須退倒三千○那一橛又作麼生○便打昨夜驪龍拗角折。非止驪龍拗折○有誰見來○還有證明麼○啞知

【評唱】對一說太孤絕。雪竇讚之不及。此語獨脫孤危。光前絕後。如萬丈懸崖。相似。亦如百萬軍陣。無儞入處。只是忒煞孤危。古人道欲得親切。莫將問來問。問在答處。答在問端。直是孤峻。且道什麼處是孤峻處。天下人奈何不得。這僧也是箇作家。所以如此問。雲門